平澤興先生追悼記念誌

京都東ロータリークラブ

再版にあたり

京都東ロータリークラブ
会長　小池　薫

京都東ロータリークラブが誕生して60年の歳月が流れました。還暦といえば、自分たちの来し方行く末を考える節目の年です。我がクラブの将来を考える時、私達はその原点を知る必要があります。クラブの先輩からは、「ロータリーでわからないことがあったり、行き詰まった時には、虎の巻として平澤興先生の遺稿集をひもとき、先生のご活躍中のお言葉を読めばよい」と指導を受けています。しかし、今では平澤先生の謦咳に接した会員は27名となり、平澤先生の遺稿集を手に取ったことのない会員も増えました。

平澤興先生は、京都東ロータリークラブ誕生の翌年に入会し、京都大学医学部長、総長を務められました。大学の重職を退かれた後、クラブ会長、地区ガバナーを歴任、我がクラブをこよなく愛し、同時代の会員から敬愛されながら、平成元年に89歳で薨去されました。平澤先生がロータリーのために書き下ろした玉稿の集大成が遺稿集です。私は昨年初めて拝読させていただきましたが、ロータリーを学問のように追求する平澤先生の迫力に、只々圧倒されました。

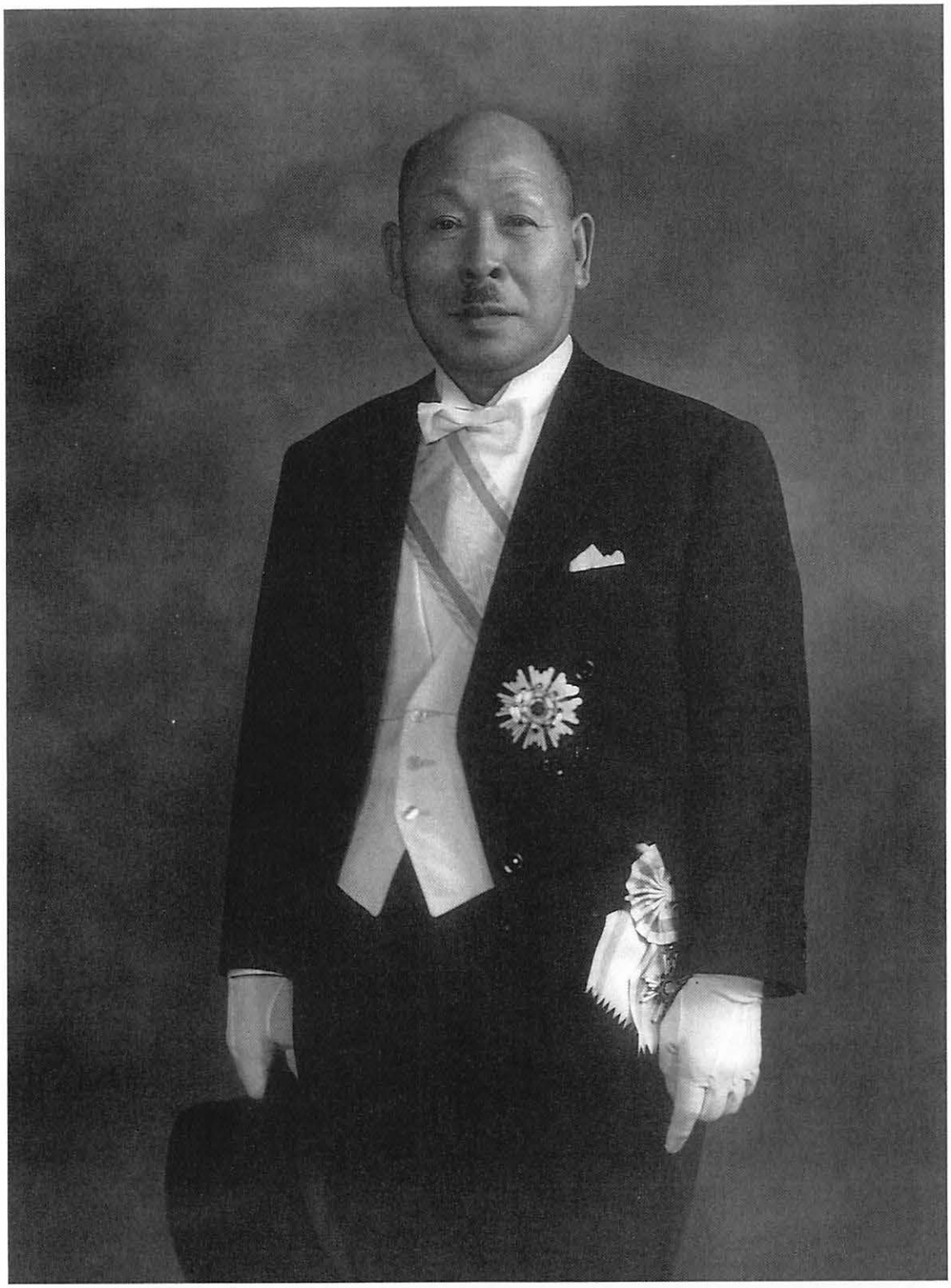
遺稿集をひもとくと、例会については、「互いに年齢や職業や地位など、すべてを忘れて、裸になり、あるがままに自由に語り、互いに意見を交換しながら成長するのである。スピーチなどで、毎週何かを学び、限りない人生の深さと味を知り、改めて、我と我が身を顧み、いよいよ伸びる意欲を燃やす場である」とあります。

これら珠玉の言葉は、私達が初心に還り、友情と奉仕を見つめ直す際の道標になると確信いたします。京都東ロータリークラブの皆様、平澤興先生の遺稿集を通して、より充実したクラブ生活を楽しみ、より良き未来を築いていきましょう。

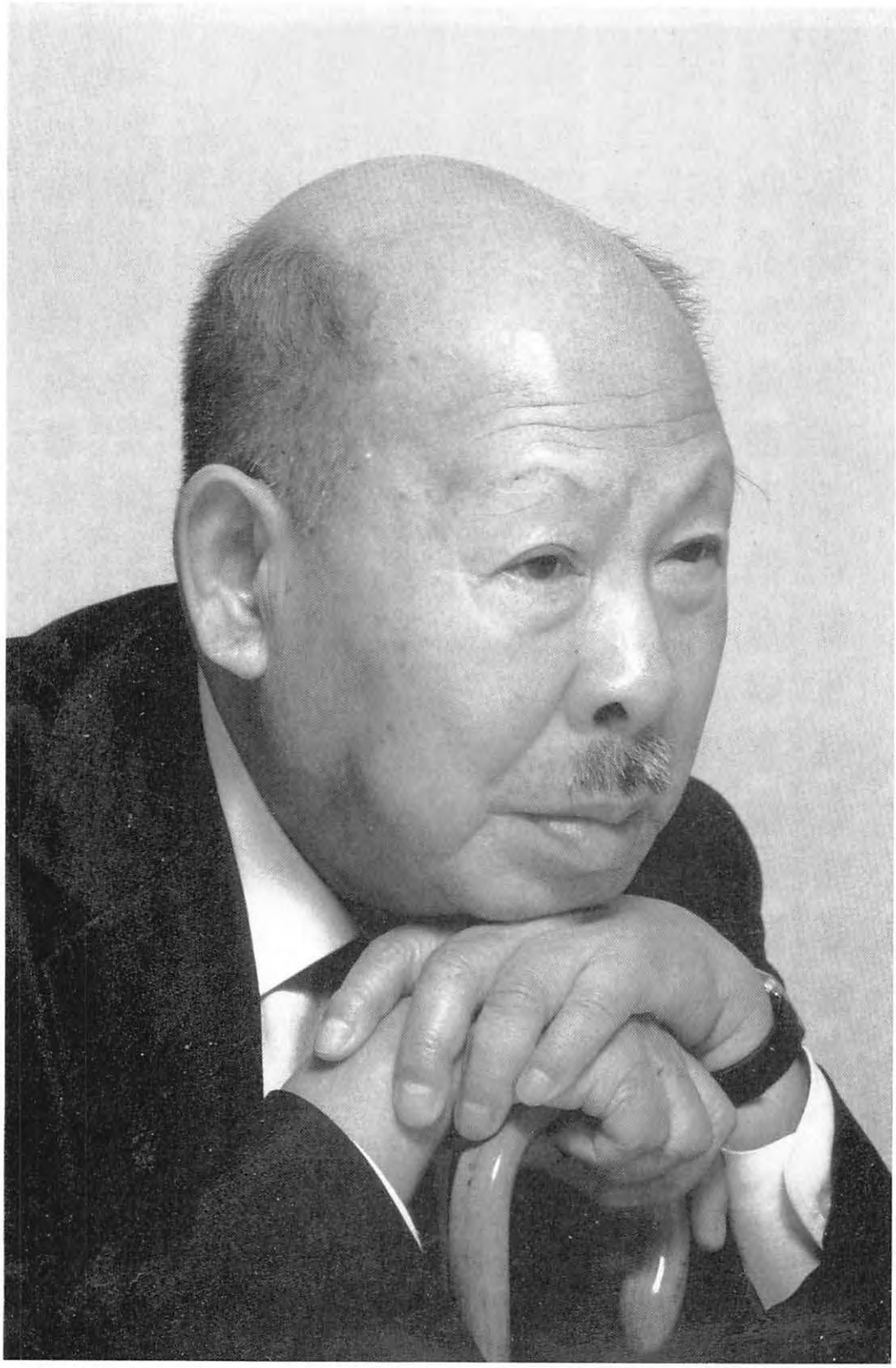
最後になりましたが、本誌の再版のためにご尽力いただきました、60周年記念事業実行委員会 記念誌部会の皆様に、心より感謝と御礼を申し上げます。

平成27年12月

昭和天皇 皇后 両陛下
京都大学理学部附属瀬戸臨海
実験所に 行幸 啓される
昭和37年(1962) 5月23日
(サンケイ新聞社提供)



勲一等瑞宝章拝受　昭和45年(1970)11月 3 日



昭和63年(1988)　秋

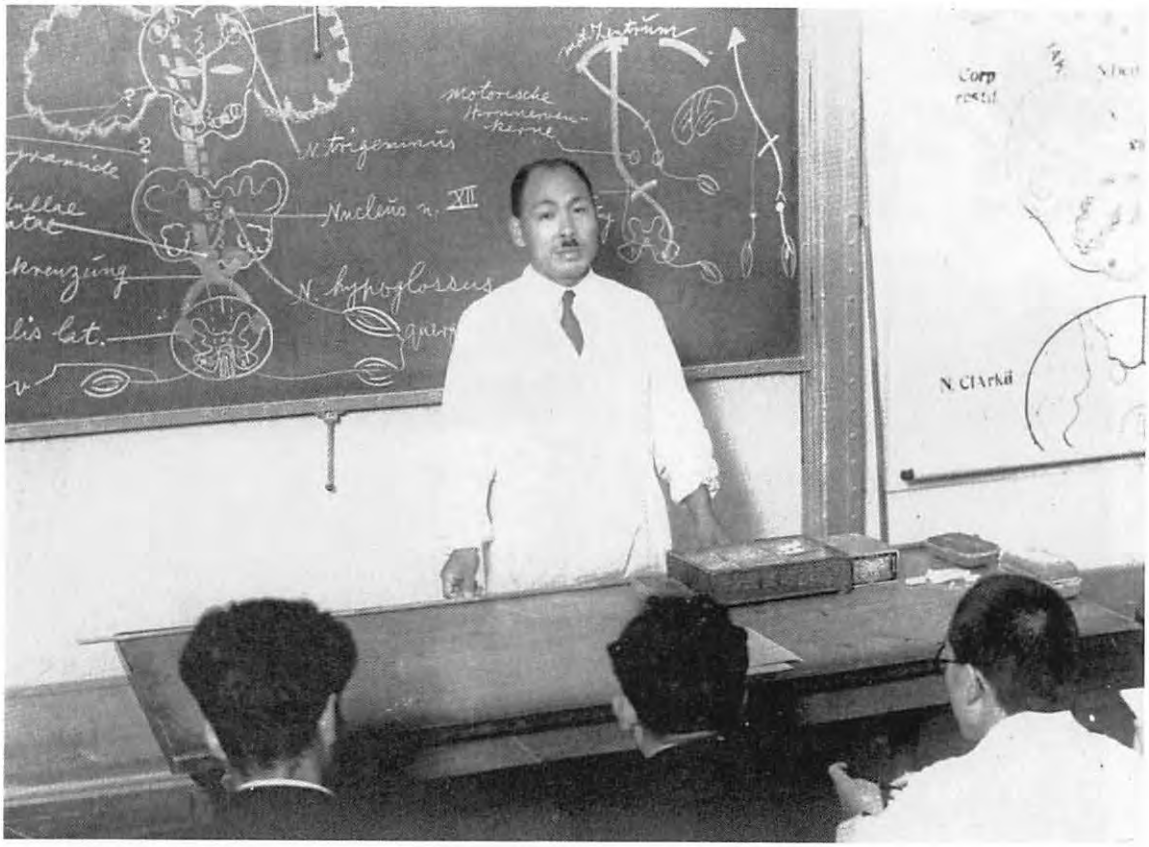
父君 平太郎　母君 チノ　平澤少年(中学時代)

第四高等学校(金沢)時代

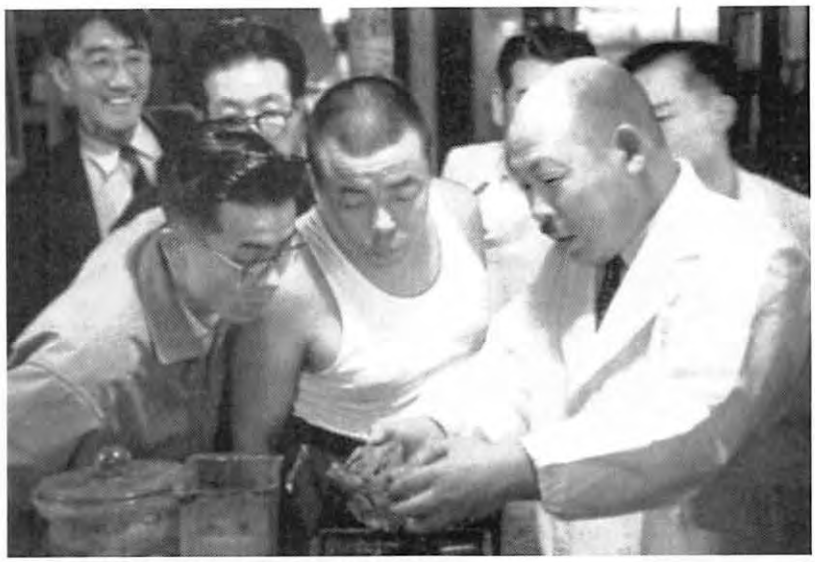
松枝夫人と 昭和30年代

京都帝国大学医学部時代

スイス・ドイツ留学時代



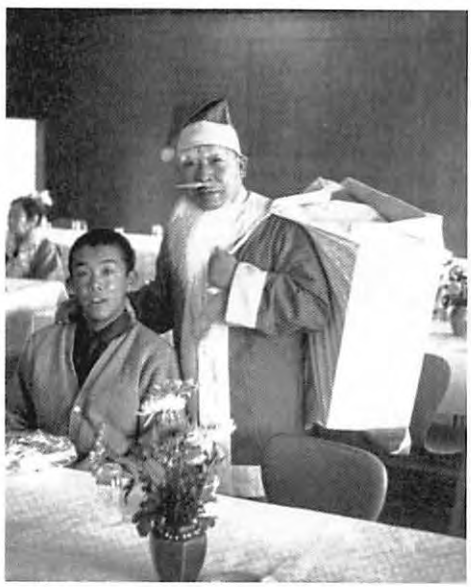
新潟医科大学教授時代



京都大学医学部教授時代　山下清君と

日本学士院賞受賞　昭和26年(1951) 5 月

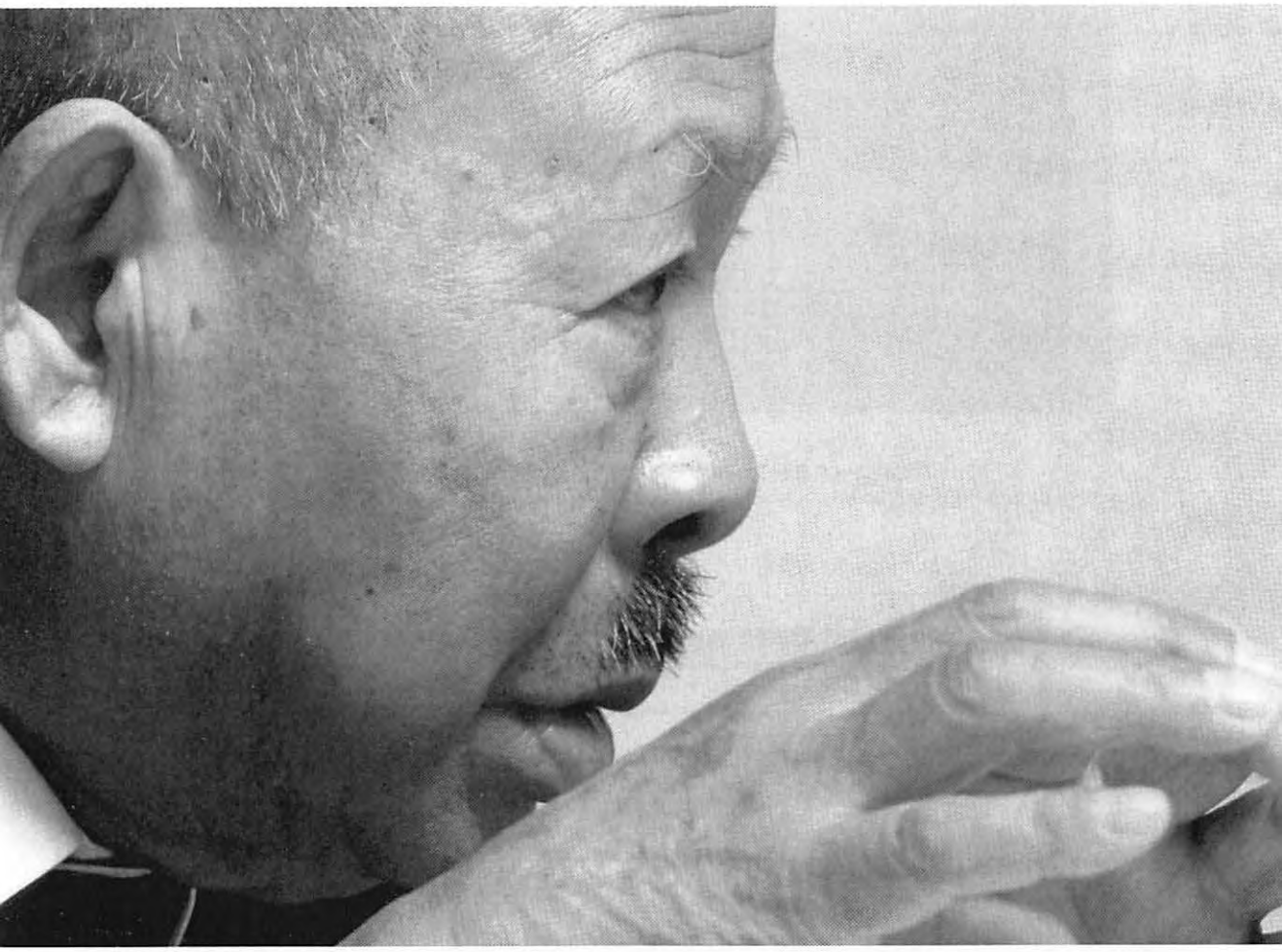
ロータリークラブにて



クリスマス家族会　昭和39年(1964)12月25日

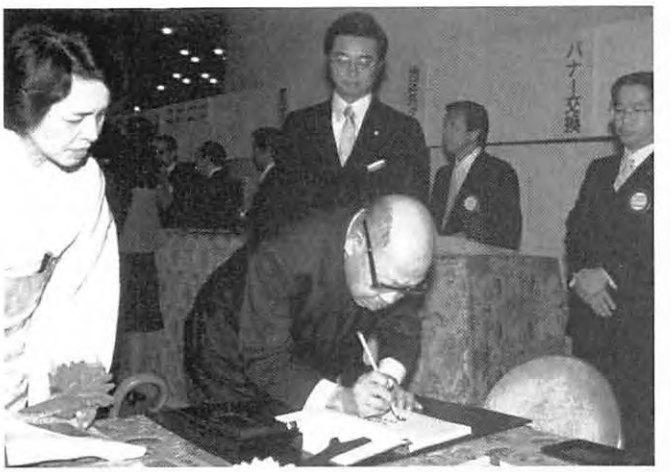
ゴルフ同好会にて　昭和40年(1965) 5 月

G.S.E. と共に　昭和43年(1968) 3 月19日



昭和63年(1988)　秋

京都東ロータリークラブ創立25周年記念式典　昭和56年(1981) 5月22日



受付で署名

クラブアッセンブリー　昭和59年(1984) 5 月25日

スピーチ〝生いたちについて〟　昭和62年(1987)

京都洛東 R. C. 認証状伝達式に出席　昭和63年(1988) 6 月 6 日

ファイアー・サイド・ミーティング　昭和63年(1988)11月11日

クラブ〝年忘れ家族会〟　昭和63年(1988)12月23日

昭和63年(1988)　秋

亡くなられる前日、平成元年(1989) 6 月16日
〝歴代会長と次年度会長との懇談会〟(於 都ホテル佳水園) での写真。数ある先生の写真の中で、これが最終のものとなった
(水渡英二会員提供)

詩人佐藤春夫氏と　昭和39年(1964) 4月

棟方志功画伯夫妻と　昭和45年(1970)11月

松下幸之助氏と　昭和55年(1980)

日本国天皇は勲三等平澤　興を
勲一等に叙し瑞寶章を授与する
昭和四十五年十一月三日皇居において
みずから名を署し璽をおさせる

裕仁

昭和四十五年十一月三日
内閣総理大臣佐藤榮作
総理府賞勲局長宮崎清文
第一八四七五八二号

従三位平澤　興
正三位に叙する
平成元年六月十七日
内閣総理大臣宇野宗佑奉

醫學博士平澤　興
日本學士院法第三條に
より日本學士院會員に
選定する
昭和四十五年十一月十三日
日本學士院

刊行のことば

京都東ロータリークラブ会長
日比野　丈夫

平澤興先生が逝去されてから、早くも一年が回ってこようとしている。昨年六月十六日のことであった。先生はわたくしたちの朝食会に元気なお顔を見せられ、引続きわが京都東クラブの例会に出席して、機嫌よく談笑の一時を過ごされた。いつもと変らぬそのお姿を拝見したとき、翌朝、突然の悲報に接しようとは、誰が想像し得たであろうか。

先生はこよなくロータリーを愛され、その精神に徹し、みずからこれを実践してこられたのである。先生はロータリーの発展とともに、終始わが京都東クラブの充実と円満な運営を心にかけていて下さった。先生を頂点として団結し活動してきたわがクラブは、大切な象徴をなくして、一時は茫然自失したといってもよい状態であった。思うに、先生は実に信念の人である。教育とは人の長所を見付けて賞めることだといわれ、誰に対しても常に温顔と真情とをもって、強い励ましを与えられたことは忘れられない。先生は明治、大正、昭和、平成の四代にわたり、満八十八歳の天寿を全うせられた。その間、医学界の巨星として、教育界、文化界にも指導的な地位を占めてこられたのであって、先生を失ったことはただロータリーのみではなく、わが国の大きな損失である。

いま先生の一周忌を迎えるに当り、先生の長年のロータリーに関する遺文を集録し、記念写真と併せて先生を偲ぶよすがとすることとなった。こうして先生の遺訓を永久に残し、日常の指針とすることにより、先生はいつまでもわたくしたちの心の中に、生き続けて行かれることと信ずる。

終りに、この記念誌の編集、出版に奉仕して下さった委員諸氏に対して、深甚な敬意と感謝とを表するものである。

平成二年五月

目　次

再版にあたり
刊行のことば…… 17
平澤 興 先生のガバナーズ レター …… 20
平澤 興 先生の詞章…… 70
平澤 興 先生のフォーラムでの発言集… 113
平澤 興 先生への頌辞 …… 134
平澤 興 先生の年譜 …… 141
跋 文・編集後記 …… 144
再版あとがき

題字　　会長 日比野丈夫

平澤 興 先生の
ガバナーズ レター

ガバナー月信より

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO JAPAN

No. 1 July 1. 1967　　ガバナー月信　第1信（昭和42年7月1日）

第365区ロータリークラブ

会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ガバナー月信は、本来ガバナーが毎月地区内R.C.の会長及び幹事へ送るおたよりです。しかし、同時に会員諸君にも、よくその趣旨が徹底するようにと、従来慣習的に直接会員諸君にも、その「写」が送られております。どうか会長幹事はよきリーダーとして、会員諸君はそのよき積極的協力者として、ますますロータリーのクラブ活動が向上するよう、あくまでも自主的な姿をおとり下さい。ロータリークラブは、そういう積極性と自主性とを基盤として、奉仕の理想に向って限りなく前進と実行とを続ける組織なのです。受け身ではだめ、飽くまでも積極的に明るく、楽しく！

A Message

from The President of Rotary International

1967-68

Make your
Rotary membership
effective

- Get personally involved in Rotary
- Exercise leadership by being successful in your own business or profession
- Be loyal to your own community and nation and serve them wherever possible
- Keep informed and develop an understanding of the problems of peoples of other nations

Luther H. Hodges
President

1967-68年度　国際ロータリー会長メッセージ

ロータリアンとしての あなたの資格を　効果的に

- ロータリーの活動に自ら進んで参加すること
- あなたの職業に成功を収めることにより指導力を発揮すること
- あなたの地域社会や国家に対し忠誠を捧げ、あらゆる機会に奉仕すること
- 他国の人々の問題によく通じ、これが理解を深めること

ルーサー　H　ホッジス

就任のことば

会長並びに幹事諸君！　新年おめでとう。ロータリーの新年おめでとう。つよい7月の陽光と目もさめる7月の濃緑は、いかにも前進してやまないロータリーの理想を象徴しておるかのようです。悔なき充実したロータリーのこの1年を送るため、しっかりと手をつなぎ、心を一つにして、栄光にみちたロータリーの大道を堂々と、奉仕と友情の理想を祕めて前進しましょう。一人の人間として、家庭人として、職業人として、ロータリーの理想を身につけ、更に地域社会から、ロータリーの世界共同体にまでその眼を開き、実行をひろげて、よきパパたると同時に、世界の心を心とした、大きなロータリアンになりましょう。そして何よりも口先きだけではなく、日々の生活の中にロータリーを生かしましょう。ロータリーの心を頭で理解するだけではなく、われわれの血の中にとかし、われわれの行動の中に生かしましょう。ロータリアンとして生長する、そこに必ず人間としての幸福も成功もあるのです。

本年のホッジス R. I. 会長こそは、正に文字通り、そういう理想的なロータリアンです。その長い実業家、政治家、社会事業家としての深い経験が、会長メッセージの中に集約されています。このメッセージは読めば読むほど、さらさらとしたすなおさの中に、無限の真実と力とを含んでいますが、わたしはホッジス会長と握手をした際、これはただの言葉ではなく、69年の実行の裏打ちが、その中にあるということを直感いたしました。何度も何度も読みかえして下さい。わたしも毎日くりかえし、くりかえし、これを読みかえして、その奥にある言葉の無限の味を、ほんとうにわたしのものにしたいと念じています。

「ロータリアンとしてのあなたの資格を効果的に――ロータリーの活動に自ら進んで参加しましょう。」さらさらとしながら、しかも何たる強烈な響きを持つ言葉でしょう。しかし、ホッジス会長自身もレークプラシッドで言われたように、「真剣になるのはよいが、あまり深刻になりすぎないように」いたしましょう。「ありのままに、好意的にふるまって下さい」。ありのままに、好意的にふるまう――何というおおらかな姿でありましょう。われわれも、ロータリーをからだにとかし、からだにつけて、そうなるよう今日の生活を生かしましょう。ニコニコと今日の命を生きて、限りないロータリーの生活を楽しみましょう。

会長並びに幹事の各位、限りなく、みのりの多い1年を心から祝福申しあげます。どうぞ会員諸君にも、各位の御家庭の方々にも、私の心からのこの祈りをお伝え下さい。

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 2 July 15. 1967　　ガバナー月信　第2信（昭和42年7月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス RI 会長

アドレス

尊敬するパストガバナー各位，親愛なる次年度の会長，幹事，会報委員の各位，本日ここに1967～68年度のロータリー第365区のガバナーエレクトとして，アドレスを述べる機会を与えられましたことは，まことに私の光栄とするところでありますが，同時にその重大なる責任に身の引きしまる思いが致します。しかし，私は本日，各位の元気なお姿に接し，眉間にただよう各位のご決意の程をまのあたり拝見して，必ずや本地区の次年度のロータリー活動には見るべきものがあろうことを確信し，ロータリアンとしての喜びをかみしめております。

ご承知のように，私は次年度のガバナーノミニーとして去る4月29日から5月6日まで北米ニューヨーク州の北部なるレーク・プラシッドの国際協議会に列し，教育を受け，更に去る5月23日から5月26日まで仏国ニースのロータリー国際大会に出席して，偉大なロータリーの活動とその世界性とを直接自らの目，自らの肌で感じて，文字通り，身ぶるいするような強烈な感激にうたれました。たしかにロータリーは生きています。そして今日も明日に向って逞しい成長をつづけつつあるのです。私はエバンスR. I. 会長，ホッジス次期会長を始め，数多くのロータリアン達のあたたかい友情のぬくみを胸一杯にだきしめて帰りました。

ロータリーにおける奉仕の理想と世界的友情――それは頭でわかるとか，わからぬなどというものではなく，からだ全体で，心全体で，じかに感じとるべきものでありましょう。

諸君，地区協議会の目的は，ご承知の通り，教育及び情報の提供と地区活動の調整などでありますが，

先ずもって私がレーク・ブラシッドで受けて来たこの胸のぬくみを諸君に伝えて，ロータリーの感激を新たにしてもらいたいのであります。そして私は諸君が今日ここで時間の許す限り，グループ別の討議を通じて，リーダーやカウンセラー方のご指導のもとに，できるだけ自由に話しあって，次年度第365区のロータリー活動についての研究をして戴きたいのであります。もとより限られた時間で，心ゆくまですべての問題について討議することは不可能でしようが，何れあとで行われるリーダーシップ・フォーラム参加の方々などと共に，各位のロータリークラブで研究をつづけて戴きたいと存じます。

第365区のロータリークラブと言っても，クラブの大小はもちろん，その地域や歴史などがいろいろ違いますので，その問題となるところも様々でありましようが，会長として，幹事として，また会報委員として最も重要なことは，ホッジス次期会長も言われるように，何よりも先ず身を以て，ロータリー活動に情熱を捧げることです。私も諸君と共にある限りの情熱を傾け，私の最善をつくして，第365区のロータリー活動に挺身し，国際ロータリーの前進に寄与したいと念じています。受け身ではなく，あくまでも積極的に頑張りましょう。

このことは「国際ロータリーの基本方針」からも，むしろ当然のことであります。国際ロータリー理事会(1962～63)が採択したその基本方針は，ぜひ一度かみしめてお読みを願いたいと存じますが，そこには，先ず各ロータリアンによるロータリー綱領推進の重要性が述べられ，ついで国際ロータリー運営の根本原則が加盟ロータリークラブの実質的な自治性にあることが強調され，さらに運営に関してはある程度の制限はあるが，これが最小限度にとどめられており，この制限規定内にあって，各地域ではその実状に応じて国際ロータリーの方針を解釈し，実行するよう最大の融通性が認められているのであります。

この国際ロータリーの基本方針はたしかに読めば読むほど味が出ます。どうもロータリーは規則づくめだとか，規則がやかまし過ぎるとか，よく言われ，私自身もたしかにそう思ったことがあります。しかし，ロータリーにもポール・ハリスが

これを始めた頃には何もそんな規則とか，定款などというものはなかったのであります。会員が少い間はお互の話しあいだけで万事よかったのでありますが，それが次第に大きくなり，国境を越え，宗教や人種を越えて世界的のものになるにつれて，お互の間の理解と連絡のために約束として規約が必要となったのであります。

定款とか規則とかいうと，とかく，つい固くなり，抵抗を感じ易いのでありますが，実はそれは文化的な社会とか，組織における一つの公けの約束であります。私自身規則には格別弱い人間で，規則に対する抵抗感のようなものはまことによく分かるのでありますが，私はこの度のロータリー国際協議会などに出席して，しみじみとその誤りを感じ，ロータリーの手続や規則などをまとめている「手続要覧」などにしても，実はロータリーをここまで発展せしめた先人達の血と汗の結晶なのだ，ということに気がつきました。

国際ロータリーでもなるべく，こまかなことは言わず，世界のロータリー組織の横のつながりがくずれない限り，できるだけ各ロータリークラブの融通性を認めようというのが，その基本方針であります。しかし，これはあくまでもある制限内であり，この制限は，ロータリアンは世界的組織

の一員として承知せねばならず，またそういう了解の下で入会しているはずであります。もとよりこれは全会員が規則のすべてを暗記しておらねばならぬというようなことではなく，国法を知らなくとも道徳的に行動すれば，よき国民たり得るように，もしロータリークラブがある程度まで成長し，知らぬ間に，そこにロータリーの奉仕の理想と国際性とがとけこむような空気になれば，そのクラブの空気に同化することによって，自然とよきロータリアンにもなれるだろうし，むしろそういう状態こそが望ましいことでありましょう。しかし，クラブの中心としてその指導に当る会長や幹事は，やはり正しい方向に，国際組織としてのクラブの成長と指導のためにも，ロータリー運営の根本的なものには，よく通じておかねばなりませぬ。

「実質的な自治性」とか「最大の融通性」などというと，一見何でもないようでありますが，真の意味で自治性とか，自主性とか，融通性などということは最もむずかしいことで，ここには単なる模倣ではない思考力と独創性とが必要であり，世界組織としてのロータリアンたるためには，こういう点にも深く思いを致さねばなりませぬ。

ついでにここで一言したいことは，分かると，分かったつもりとは違うということであります。規則の文字を暗記しても，必ずしもそれでその規則が本当に分かったとは言われぬので，この点も心しておくべきことでありましょう。たとえば「四つのテスト」などにしても，その文句を暗記することは簡単なことでありますが，真にその意味を理解するには，人生に対する真剣な態度と深い経験が必要であって，私は心から「四つのテスト」のすばらしさには感心しながらも，本当にはまだ私にも完全には分かっておらぬ，ということにやっと気がつき出して来ました。文字を知ることと，その心に通ずることとは，決して同じではなく，時にはそこに非常な距離があるのであります。そう思って読むと，ロータリーの「手続要覧」などにも，しばしば簡単な表現のなかに先人の血や汗が感じられ，規則の文字にも脈々たる命の流れのあることに気づきます。

次に次年度ロータリー活動の中心ともなるべきホッジスR.I.会長のメッセージを考えて見ましょう。ホッジスR.I.会長のメッセージは，実にさらさらとしていて，しかも，その中にはホッジス会長その人でなければ出ない味があります。ホッジス会長自身も言っておられるように，このメッセージは，「ロータリーの四大奉仕部門に関連したものであり，従って，ロータリーの目的と計画から逸脱したことを強調しようとするものではありません」が，しかし，それだけ氏自身の長い体験から出たこのメッセージには，何か自然の重みがあります。

"Make your Rotary membership effective"「ロータリアンとしてのあなたの資格を効果的に」ということが全体の柱になっております。たしかにロータリーの会員は，名誉職でもなければ，特別のエリートでもなく，一業一人の原則によって，各種の職業からきびしい選考をへて選び出された人々で，職業を通じて社会に，国家に，世界に奉仕をしょう——超我の奉仕をしょう，という人々であります。会員自らもそういうことを承知をし，その上で入会されたわけですから，ただロータリーのバッジをつけただけでは，真のロータリアンとは言われません。積極的に自ら進んでその理想を実行してこそ，はじめて真のロータリアンたる名にふさわしいのです。しかし，このメッセージはガバナーたるわたし自身にも痛い言葉で，まず私自身がこれを熱意を以て実行せねばなりません。レーク・プラシッドでの国際協議会は，たしかにこの意味において，私に強い印象と覚悟とを与えました。同時に，私は，この時，東洋人として，日本人として，いろいろと民族的な特性について，もっと根本的な「汝の欲するところは之を人に施せ」ということと，東洋的な「汝の慾せざるところは之を人に施すな」という対照的な考え方であります。とかく東洋的な考え方が消極的になりがちなのに対して，西欧的の考え方は積極的です。これは単なるりくつではなく，われわれの生活と西欧の生活とを見ると，何となく，そういうものがあります。しかし，地球が次第に小さくなり，距離などというものが昔ほど意味を持たなくなりつつある現在では，やはりわれわれはもっと積極的にならねばならぬと思います。若ものは日本でも，次第にそういう傾向に成長しつつあるようであります。

しかし，そうかと言って相手の気持ちをあくまでも大切にしようという東洋的の考え方が，すべて間違いであるなどとは毛頭私も考えてはおりません。相手の気持は尊ぶべきはどこまでも尊びながら，他方では世の中をよくしようというためには，時には自らを殺しても，もっと積極的になる必要があるでしょう。要するに，「汝の欲するところは之を人に施せ」ということと，「汝の欲せざるところは，之を人に施すな」ということのどちらがよいかとか，悪いとかいうことではなく，この二つの要案を充分考え合わせて，深い思索のもとで行動してこそ，はじめて真に望ましい調和のある活動ができるのではないでしょうか。

同じ日本でも，こういう事は都会と田舎とで随分と違うと思われますが，ただ余り遠慮だけしているのでは何も出来ないでしょうし，また忙しい今日の世界では実際的でもないでしょう。

"Get personally involved in Rotary"——「ロータリーの活動に自ら進んで参加すること」——これはロータリーの奉仕的性格を考えれば，当然のことであり，また「ロータリアンとしてのあなたの資格を効果的に」ということになれば，それ以外の道はないでしょう。これは「ロータリアンとしてのあなたの資格を効果的に」という大前提につづく四カ条の中でもいわば中心ともなるべきもので，ニースの大会でのホッジス R. I. 会長の挨拶の中では，"Make your Rotary membership effective by becoming personally involved in Rotary" とつづけて，一つの文章として表現されております。これは，クラブ奉仕の諸活動にあてはまるのみならず，職業奉仕，社会奉仕，国際奉仕などの活動にも適用されます。"Get personally involved" という訳はむずかしく，どう訳しても，そのものずばりという日本語にはならないようですが，自ら進んで身を入れてやるとか，受け身ではなく進んでそれに没頭するとか，というような気持ちでしょう。私なども過去を顧みて，まことに恥ずかしい思いを致しますが，何とかこういう気持ちで頑ばりたいと思っております。

しかし，ホッジス R. I. 会長はたしかに，これを誇と自信を以て言い得る過去の実績をもっておられる方であります。その明るく，しかもたくましい自信のある風貌に接すると，ほんとうにそうだなあ，と諾かれます。ホッジス会長は，今日までまことに多面的な活動をつづけてこられ，しかもどの方面でもそれぞれ成功をもたらされた方ですが，あくまでもロータリーの心を心とし，堂々と積極的に奉仕の生活を実行されて，今日に至り，69才の今日もなお元気一杯に活躍をつづけておられる方であります。実に友情にあつく思いやりの深い方だそうですが，一面信ずるところに向ってはあくまでも積極的に事を進められる方だそうであります。

"Exercise leadership by being successful in your own business or profession"——「あなたの職業に成功を収めることにより，指導力を発揮すること」——これも，まことに現実的で，ある意味ではあまりに現実的だとさえ見られるでしょう。しかし，そこにホッジス R. I. 会長の大地に足のついた確実性があるのであります。ホッジス R. I. 会長は，ロータリアンが自らの足でしっかりと大地に立つ自主性と行動力をもたないようでは，ロータリアンとしても強い指導力や影響力を持てないと言われるのです。全く同感です。しかしきびしい現実の中で，あくまでもロータリーの綱領に従って行動することは決して容易なことではありません。だが，それだけにそういう信念と行動が出来れば職業における成功はたしかであり，また社会的な指導力も充分発揮し得るでありましょう。それは高い信念に立って行動することは，決してただ心懸けや，善意だけで出来るものではなく，人に数倍する意志力はもちろん，更らにそれにもましてどんな困難にも濁らない知慧がいるからです。成功，少くとも長つづきのする成功は，単なる幸運ではなく，職業に対する高い信念，挫けることのない強い意志，濁流を泳ぎぬく聰明な知慧と努力から来るものであります。

ホッジス R. I. 会長も言われるように，初期のロータリーにおいては，会員の事業上の成功を助けることも，その目的の一つでありました。ホッジス会長は，定款綱領の第二にうたっているように，若しすべてのロータリアンが「職業の高き道徳的基準，すべての有用な職業の価値あることの認識，そして社会に奉仕する好機としての各自の業務を，各ロータリアンにより権威あらしめること」というような確信に立って行動すれば，必ずそこには

職業における成功があると固く信じ，自らそれを実行してこられた方であります。財界において，政界において，その他，諸方面の活動において，氏はそれを確信を以て実践し，今日の地歩をしめられたのであります。だからホッジス R. I. 会長の言葉は何等のよそゆきも，てらいもなく，自らの経験をそのままに言葉にされたのです。ホッジス R. I. 会長を知って「あなたの職業に成功を収めることにより指導力を発揮すること」という会長の言葉に接すると，一見平凡に見えるこの言葉に一段と深さが加わるのです。ホッジス会長においては職業活動とロータリー活動とが，生活の中で全く一つにとけておるのであり，これこそが最も望ましいロータリアンの姿なのです。こういうすなおなロータリアンの心と姿をよく理解し，ロータリーの初期から今日までの発展の歴史を知る時，始めてよく，「奉仕の一つの機会として，知り合いを拡めて行くこと」とか，「最もよく奉仕をするものが，最も得るところが多い」などという言葉がすなおに理解ができるように思われます。ロータリーは，そういう会員同志が事業上の成功を助け合うというような初期の先入観念から次第に脱皮発展してきて，次第に事業及び職業上の道徳的水準を高めるような方向に発展し，更に社会奉仕，国際奉仕などとひたむきな成長を遂げ，現在では国際奉仕 (International Service) から国際社会奉仕(World Community Service)なる理想と実行とにまで進みつつあるのであります。国際奉仕はまだ国家とか民族とかいうものを認めての上の事ですが，World Community Service は，もうそう概念の上ではなく，世界とか，人類とかいうものを心の中で一つに考え，世界共同体という考えの上に立つことでありまして，考え方の上には明かに International Service と World Community Service との間には，一つの進歩があります。現実世界の混乱を思うと，World Community などという考え方は，あまりに現実離れがしているではないか，というような声も聞かぬでもありませんが，しかし，ロータリーの奉仕の理想が個人への奉仕から社会的，国家的，国際的奉仕となり，更に人類共同体への奉仕にまで伸びつつあることを思うと，世界社会奉仕には一つの必然性があり，非現実的とも見える夢の中にこそ将来のロータリーのゴールが示されているように思われます。

とにかく僅か62年前に，ポール・ハリスほか3人の会員によって始められたロータリーが，今日世界的に驚くべき発展をつづけつつあることは，正に世紀の奇蹟とも言われましょう。

"Be loyal to your own community and nation and serve them wherever possible"——「あなたの地域社会や国家に対し，忠誠をささげ，あらゆる機会に奉仕すること」——まことに当然のことですが，実は社会生活において歴史の浅い日本では，こんなことは分かり切っておるようで，なかなか，そうではありません。Community，地域社会などという考え方は，北米のように近隣者の相互の結びによって社会をつくりあげて来た社会では極めて自然でしょうが，日本のような社会では必ずしもそうではなく，上下のつながりはよくとも横とのつながりは決してよくありませんでした。

これは地域社会と大学というような問題をとりあげてもよくわかることで，今後は別として，従来は大学は国の文化に貢献しても，あまり直接地域社会の文化には貢献しませんでした。とにかく，まず，自らの地域社会からよくして行くという考え方——しかもそれは命令とか，強制によるものではなく，自発的にこれをよくするということの望ましいことは，説明を要しません。そういう意味ではわれわれはもっと深く考えて，地域社会への奉仕に力を致しましょう。

国家につくすということが偏狭な愛国主義などと違うことは，ロータリーの国際性を考えれば，説明の必要はありますまい。むしろ広く世界を知り，人類を知ってこそ，始めて調和と平和の中で生きる一国のために奉仕ができましょう。

"Keep informed and develop an understanding of the problems of peoples of other nations"——「他国の人々の問題によく通じ，これが理解を深めること」——ほんとうにそうです。

われわれは幸に今日も慾しいだけ食べていますが，全世界から見ると，その2/3も何等かの意味で充分食物をとり得ない状態だといいます。単に，こういう問題だけではなく，世界には数々の問題があり，人類という立場に立てば，ある意味ではみな共通の問題であり，われわれすべてが努力せ

ねばならぬことでしょう。

とにかくロータリアンは世界のどこにおり，どのクラブに属していても人種，宗教，政治などを超越した世界的組織の会員であり，その意味においてはみな世界人であり，世界人たるべき使命を有するものであります。

ホッジス R.I. 会長のメッセージの意味するところはまことに広く，且つ深うございます。われわれはただの言葉としてだけではなく，ホッジスその人の心を心として，ロータリアンの名に恥じない行動をするよう努力いたしましょう。

ロータリーをからだにつけ，ロータリー的に日々の生活を生きましょう。メッセージに魂を入れるのは，われわれロータリアンの責任であり，楽しい義務でもあります。

次に均衡のとれたクラブ活動について考えて見たいと思いますが，その前に一つロータリー定款の綱領について自他ともに深い注意を喚起したいと存じます。ここではこの綱領には深くふれませんが，これこそロータリー活動のモーターたるべきものでありますから，私共は朝に夕にこれを心にしっかりと刻みつけておきましょう。ご承知のようにロータリーには，四大部門がありますが，望ましいロータリー活動には，その基礎としてこの四大部門の均衡のとれた活動が何よりも大切であります。国際ロータリー発展の歴史から見れば既に前にも触れたように，職業奉仕から始まり，クラブが大きくなるにつれてクラブそのものの世話をするクラブ奉仕となり，これを中心としてその活動は社会奉仕，国際奉仕という風にのび，更に世界共同体への奉仕，World Community Service という風に発展しつつあるのであります。ロータリーの四大部門は互に密接な関係を持ちながら，それぞれの特殊的な活動を持つものであります。その中でもクラブ奉仕はクラブ活動の根底をなすもので，さらにその中には出席，職業分類，クラブ会報，親睦，雑誌，会員選考，プログラム，広報，ロータリー情報等の小委員会がもうけられ，S.A.A. もその重要なメンバーであります。クラブ奉仕はクラブの基本的なムードづくりには最も大切で，どの一つを考えてもいろいろ工夫すべき問題がありますが，何よりも各小委員会が一つ心にとけあって，横の連絡をとる事が必要であり，特に例会の持ち方などについてマンネリズムに陥ったり，独創を欠いたりすることのないように致したいものです。クラブ奉仕が一つ心にとけることなくしては，楽しい例会も，明かるいクラブも出来ません。クラブの中にわだかまりや，派閥的

のものや，感情のそごなどのないよう，世界的に広く，深く，明かるいセンスを持つように致しましょう。言葉の使い方などにしても，不必要なていねいさや形式などはさけて，なるべく素直な言葉を使うようにいたしましょう。

職業奉仕は各自の職業に対する深い自覚と自負の上に立つもので，職業奉仕こそは，一業一人をモットーとするロータリー活動の根源中の根源をなすもので，若し世界の人々がすべての自己の職業についてロータリーの示す如き自覚と自負とを持つようになれば，それだけでも世の中は，どれほどよくなることでしょう。ロータリアンこそは，この意味でも世の光であり，ますます職業の権威を高からしめながら，それを通じて社会に貢献しましょう。「四つのテスト」などについても，もっと真剣に考え，真剣に話しあって，生活の中へ具現するよう努めましょう。

社会奉仕は Community Service の訳ですが，実は原語の気分は，すっきりとは出ておりません。Community というのは一般社会というよりはもっと身近な地域社会とでもいうべきもので，習慣，感情，利害などを同じくするような社会のことです。我々日本人には真の意味での Community 意識は，どうも不充分のようですが，大いに勉強して地域社会の実状をよく知り，最も各地域の実状に即して奉仕をするように勤めましょう。地域社会には交通安全，身体障害児，インター・アクト，青少年の教育問題等，ロータリークラブが貢献し得る問題はいろいろありますが，よく研究して最も効果的に活動しましょう。

国際奉仕，さらにそれから成長しつつある国際社会奉仕，World Community Service などが国際理解の増進や世界の平和に望ましいことは，いまさら説明するまでもありませんが，特にこの方面には，他国の組み合わせ地区との共同作業，世界社会奉仕，国際青少年交換計画，ロータリー財団の活躍（ロータリー財団奨学生，財団追加奨学生，大学在学中の学生に対する財団奨学生，専門的訓練のための補助，研究グループ交換等）等の種々の問題があります。地方のクラブでは国際奉仕や世界社会奉仕の仕事などには余り関心はないかも知れませんが，優秀である限りもとより地方出身者もこういう国際的計画に参加できるのであり，またホッジス R.I. 会長が言われるように「他国の人々の問題によく通じ，これが理解を深めること」のためには，直接関係の有無などにかかわらず，ロータリアンたる以上こういう国際奉仕にも充分関心を持つことが望ましいのであります。パリーの大通りシャンゼリゼーに松下や，ソニー，東芝などの製品を見るにつけても，われわれ日本人はもっと眼を開き，広い心を持った日本人にならねばなりません。いろいろの意味で国際理解は日本の将来にとっても，ますます必要になりましょう。

私は最近，本年度アメリカの第522区との提携で2カ月アメリカでの「研究グループ交換」に参加して帰った6人の若い青年にあって，全くそのすばらしい成長振りに感心いたしました。若ものの眼はたしかで，僅か2カ月の研修としては驚くばかり多くを見，多くを学び，多くの問題を持って帰りました。特にこのグループ研究の人々で感じたのは，親しく肌でアメリカの人と土地とに接し，からだで感じて来たことで，研究室などにおける部分的把握ではなく，全人的な把握と成長をして来たことであります。私はこの際，研究グループ交換委員会（委員長　絹川清氏—京都 R.C.）と，若人のよきリーダーたりし奥村龍三氏（大阪北 R.C.）に対し，さらにまたすばらしい参加の青年諸君に対して，心からの敬意と感謝とを捧げたいと存じます。来年度はアメリカからの青年実業家を迎えることになっておりますが，どうぞ各地のロータリークラブでも格別のご協力をお願い申上げます。

さて，健全な会員育成の問題ですが，何がロータリーにとって大切と言っても，これほど大切な問題はないでしょう。クラブのよしあしも，その活動の内容も最後的には，この問題にかかって来ます。これには先ず入会前の慎重公正な会員選考が最も大切ですが，しかし，ロータリーはそれ自体がたえず前向きに伸びつつある組織ですから，国際ロータリーの進歩におくれないためには，いな，願わくばその成長に積極的に貢献するためには，どうしても入会後もたえず自らの努力によってロータリアンとしての成長に努めねばなりません。

同時に大切なことは，クラブ全体としての空気

だと思います。クラブ自身に明かるくして，たえずそこに進歩のあるような楽しい空気があれば，自ら会員も成長いたしますが，そうでないと，なかなか会員の成長はむずかしいでしょう。たしかに会員の成長には各個人の努力のみならず，更にクラブ全体にもそういう空気と友情とがあることが望ましいのです。十分の審査をした会員ですから，困る会員などという不幸は起らぬはずですが，しかし，現実には必ずしもそうとばかりは言われません。そういう時クラブとして取るべき道は，私はあくまでもあたたかい友情と忍耐とであり，そういうものをも，よきロータリアンとして伸ばす努力だと思います。知る者は知らざるものを，強きものは弱きものに手をのばし，力をかしてやるべきでしょう。

なおここで一言したいことは，ロータリーの規則にはこまかくは書いてないが，よきロータリアンたるためには，それ以前によき人間であるということであります。よき人間たることは，ロータリアンに先行する問題であり，これは実はロータリアンとしての選考の際に自から問題となることであり，各会員はよき個人，よき家庭人，よき職業人，よき社会人であるとの認定のもとで，ロータリークラブへの入会が認められたのであります。もとより入会後ロータリアンとして更に広い視野に立ち，よき友人を得て，ますます人間的成長をとげるようになりましょうが，ロータリアンとしては個々のロータリーの規則などに通ずるなどという前に，先ず以て人間として立派であることが絶対の前提であり，ロータリアンこそは社会的に模範となるべきものだと思います。

よきロータリアンたるためには，たえざる反省と努力とが必要であります。クラブとしてはたえず会員に必要な情報を提供し，前向きの活動に努力せねばなりません。ロータリアンは，その特典と義務をたえず反省し，一業一人として推薦されたことや，家庭から地域社会，さらには国家，世界などへの奉仕を理想とする組織の一員たることなどを深く自覚し，あくまでも積極的にロータリーの世界的発展に寄与したいものであります。ロータリアンは，どこにおっても心の中では世界の人々とともにいき，一つの世界共同体たるロータリーに生きているのであります。

諸君，1967〜68年度のロータリー活動はもう目の前に迫って来ました。ロータリー第365区の次年度の活動がいかなるものになるかは先ず以て会長，幹事たる諸君とガバナーたる私の肩にかかっているのであります。互に手を握りあってすべての会員諸君の友情と熱意とを信じ，全会員と共に堂々と前進いたしましょう。情熱の燃えるところ，必ず道は開けます。諸君，今はただ前進あるのみです。

——1967. 6. 24　国立京都国際会館における国際ロータリー第365区1967〜68地区協議会より——

六月二十四日
第三六五区　地区協議会会場にて

右の写真は、この本の編集時に収録したものです。（以下同じ）

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 3 August 15. 1967　　ガバナー月信　第3信（昭和42年8月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

ロータリーにもっと童心と自然を

今年は随分暑さが厳しうございますが，皆様にはお元気でご活躍のことと存じます。私も去る7月10日から大津クラブを振り出しにガバナー公式訪問を始め，京都，京都南，京都北，大阪北，大阪東，大阪，京都西，宇治，高槻，大阪淀川の11ロータリー・クラブの訪問をすませ，親しくその活動振りを拝見いたしました。私が公式訪問を終えたのは，この地区の全クラブのまだ1/7に過ぎませんが，しかし，これらのクラブを廻ってしみじみ感じたことは，さすがにロータリアンは皆立派で，まじめだということであります。少くとも今まで訪問した限りでは，どのクラブでも，ずぼらというような印象を受けたところは一つもなく，皆それぞれにその発展に苦心をしておられます。既にまわったクラブでも，クラブの大小とか，地域社会の状態は決して一様ではなく，従って活動上の苦心もそれぞれ違いますが，どのクラブにしても，ロータリーの理想が高く，しかもたえず前向きに向上しているだけに，これを達成することは容易ではなく，各位のご努力に対しては心からあつく感謝しております。たしかにロータリーの道は奉仕の道ひとすじであります。しかし，職業を通じて社会，Community に対する奉仕には限りがありません。今やロータリーでは，この Community なる理念は地域社会から国家を越えて世界社会にまで伸びつつありますが，われわれは，どこのロータリー・クラブに属するにしても，同時にロータリーのいわゆる世界共同社会の一員であり，この共同社会において，出来る限りの奉仕をせねばなりません。人類のすべてが，こういう社会奉仕の念に燃える時，この雑音の多い社会もそのまま神の国となり，雑音はそのまま，もはや単なる雑音ではなく，単調を破るバライティにもなり得るのではないで

しょうか。一筋の奉仕の理想に燃えて限りなき理想の実現を夢みている私は，この頃しみじみと生きる喜びを感じています。

しかし，ロータリーはあまりにも巨大であります。一通りその規則を理解することはそれほどの難事ではないでしょうが，その全貌をからだで感じ取ることは決して容易ではありません。もとより現在の私にもそれは出来ません。しかし，私はロータリー体得の夢は決して捨てていません。

ロータリーで最も重要なことの一つは，その創始者ポール・ハリスの素朴な心にかえることでしょう。いろいろの職業人が集まり，自らの天職の尊さに目醒めながら，世の中を明るく，正しくしょう，というポール・ハリスの素朴な心——そういう自然の心を何よりも先ずしっかりと身につけたいものです。去るニースの国際大会委員会の委員長であった Gian P. Lang 氏は，かつて R.I. 会長の時のターゲットの第一に 'Keep Rotary Simple'「ロータリーを簡潔に」と叫んでおりますが，本年度の Hodges R. I. 会長もこのことに言及しておられました。生物などを見ても，とかく進化は多くは分化であり，分化は多くは複雑化なので，ロータリーが進展につれて複雑になるのは，むしろある意味では自然のなり行きかと存じますが，しかし，そうであればあるほど，複雑な枝葉に心を奪れて，その中心となるべき最も大切な心棒を忘れてはなりますまい。素朴な心，あるがままの自然の心，なまの心——R.I. Hodges 会長はそういうもののシンボルのような人です。69年の激しい人生の波濤をのりこえながら，その心底をつくっているものは，濁りない童心の素朴さです。その明るさも，積極性さも，ある意味では，この素朴さの現れと見ることが出来ましょう。私はここで，先年 N.H.K. に招かれて来日した小児麻痺生ワクチンの発明者，Sabin 博士のレセプションの席上のことを想い出さずにはおられません。私はこの席上で "You are simple, you are very simple—but in the best sense of the word."「あなたはシンプルです。あなたは大変シンプルです。しかしその言葉の最もよき意味において。」と言って歓迎の言葉を始めました。ところが，まだ酒の一滴もはいらぬ博士は感激されて，初対面の私を抱擁されたのです。濁らない純情，聖なる目標への熱情こそは，力の泉であり，明るさの源のようです。

ポール・ハリスの心，あたたかい心，しかし思い立っては挫けることのない積極的な心，そういうものをロータリーに取り戻したいと思います。ポール・ハリスの純なる心，R.I. 会長 Hodges のなまの心を，ぜひロータリーにとりもどしましょう。このなまの心は，我々が理解しているロータリーの心よりも，もっともっと自然で，それだけに強く，思うがままに笑え，思うがままに語り，思うがままに振舞う心です。明るいがそれは弱さではなく，むしろ挫けることを知らぬ強さです。

私もこの頃，毎日何かしら，少しづつロータリーを学びつつあります。どうぞ各位も日ごとに何かを学び取って下さい。

今日も太陽があがりました。それは限りないロータリーの今日の一日です。切に各位のご健闘を祈ります。

七月二十一日
大阪R・C・公式訪問

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 4 September 15. 1967　　ガバナー月信　第4信（昭和42年9月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

ロータリーにおける理想と現実

相変らず日中はなかなか厳しい暑さですが，さすがに朝夕は凌ぎ易くなり，いわゆる夜の秋ともいうべき季節になりました。私は熱心に公式訪問をつづけておりますが，9月2日現在でやっと20クラブを終ったばかりです。今までのところでは，どのクラブもまじめによく準備されておりますが，クラブの経験や，地域や或いは工夫などの差異により，その活動にはやはりいろいろの相違があります。

最も恐ろしいことは，クラブ活動の本質を充分極めずに，右へならえ式に事を運ぶことで，それはとりも直さず，熱意と工夫の欠乏を意味します。ロータリーは，その創立以来たえず前進を目ざし，事実また前進をつづけて参りました。ロータリーを知れば知るほど，感心するのは，その活動の中に理想主義と現実主義とが渾然として一つに溶けていることであります。たとえば，職業奉仕一つを例にとって見ても，職業は直接各自の生活の基盤そのものですが，ロータリアンの活動は，先ずこの自己の職業を立派に道徳的に遂行し，各自の職業を社会的尊敬と権威とを得るまでに向上せしめ，こういう立場で有用な他の職業の価値をも心から認識し，尊敬して，ややもすれば，ただ生活の手段のみの如く考えられる自らの職業そのものに，創意工夫と感謝とをこめて，世の中のためになるように奉仕をしようということであります。そして経験の示すところでは，この奉仕そのものが，ほんものであればあるほど，意識的に別に結果を求めなくとも最大の結果をもたらすことになるのであります。"He profits most who serves best" はポール・ハリスが Chesley R. Perry と共にロータリー中興の最大の人としてあげている Arthur F. Sheldon の提唱にかかるもので，ミネアポリス・ロータリアンの貢献に成る "Service above self" なる

標語とともに，1911年ポートランドにおける第2回全国大会，National Association of Rotary Clubsにおいて，はじめてロータリーの標語として採用されたものであります。ポール・ハリスの報ずる如く，シェルドンはミシガン大学卒業後，シカゴに出て，ある商社の予約図書販売係に就職しましたが，その当時は，シカゴの最悪時代で，その混沌たる実業界の状態は，若いシェルドンの心に深刻な感銘を与えずにはおきませんでした。美徳には何の報酬もなきが如き暗い時代でありましたが，しかし物質的利益よりも名誉を重んずるシェルドンは，店主の期待する販売係の態度にはあくまで反対せざるを得ず，奮然として仕事着を手近かの小溝に投げ捨てて，辞職したのであります。シェルドンの標語には激しい生活の実践がかかっております。シェルドンの「最もよく奉仕するものが，最も多く利益を受ける」と言う標語の内容も，シェルドン自身も説く如く，二つの意味があります。その一は，その文字そのものの意味で，よく尽すほど儲けも大きい，という物質的の意味であり，その二は，単に商売上の損得のみではなく，「蔭徳あれば陽報あり」というような精神的な意味であります。儲けようという目的のためには手段を選ばぬという当時においては，シェルドンはむしろ，一般に向っては素朴な第一の意味で，いわば腐った商業道徳に反旗をひるがえしたのでありますが，同時により深く事を考え得る人々に向っては，この標語を第二の精神的意味に使ったのであります。たしかに，この標語は物質的にも精神的にもあてはまるもので，ここら当りにも，如何にもロータリーの現実面と理想面の二つが現れております。あまり事物をはじめから精神化するよりも，むしろはじめは現実的に見る方がわかり易く，また本当の意味ではむしろ理解もし易いのであります。殊にロータリーにはそういう面が少からずありますが，日本のロータリーでは，どうも精神的，抽象的な理解が多く，そのためかえってロータリーのなまのよさが分らぬような気が致します。こういうことは，ロータリーが今日まで歩いた跡を見ると，いろいろ教えられるところが多々ございます。たとえば，1906年1月，シカゴ・ロータリークラブの会則の中に初めてその姿を現わした二つの目標が，その第一は「会員の事業上の利益を促進すること」と書かれているそうであります。「奉仕こそ我がつとめ」によりますと元国際ロータリーの或る会長はこれについて「職業奉仕は創立当初のクラブが，毎週，会員が発注又は受注したものを全部蒐集編纂する役目をもつ所謂，統計家と称するクラブ役員をおいたときに，実際に初まったのである。尤も斯様な職業奉仕は，うまく行かないことを発見した。さりながら，その頃でさえ，会員は既に相互扶助に努めていたのであるから，私は別にこれを恥とは思わない。」と。因みにロータリー綱領が今日の如く最終的に四項目に書き改められたのは，1935年であります。誠に深くわれわれが教えられるところは，国際ロータリーが高い理想を持ちながらたえずその不足や過ちを改めながら，柔軟な態度で前進しつづけて来たことであります。

ロータリー綱領の第二にある「総ての有用な職業の価値あることの認識」などという言葉の意味するところも，一見極めて簡単でありますが，どうもまだ日本のロータリーでは充分には認識されてはおらぬようであります。職業分類に一時期を画するような現時点では，改めて，もっと素直にこれらの表現の意味するものを真に理解するように努めなければなりません。

とかく，理想と現実などというと，相反するもののように思われますが，真の理想主義はしっかりと現実に立脚し，しっかりと足を大地に踏みしめてこそ始めて可能だと存じます。理想家にとっては，決して失敗も無意味のものではなく，成功と同様に，否むしろ，それ以上に前進の大きな力となるものだと思います。どうぞロータリーの活動においてもあまり失敗を恐れず，創意工夫を以て逞しく前進して下さい。　（9月3日稿）

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 5 October 15. 1967　　ガバナー月信　第5信（昭和42年10月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

白浜における
国際ロータリー第365区年次大会

恐ろしい台風の季節も漸く過ぎて，日毎に秋は深まりますが，いよいよ御隆勝のことと存じます。さて，この月の月信の最大のニュースと言えば，いわずもがな，10月2～3日の両日，田辺クラブをホストとし，白浜クラブをコ・ホストとして南紀・白浜町で開催された本年度の第365区地区大会であります。

さて，本年度のこの地区大会には従来と異った点が二つあったことが先づ指摘されます。その一は，前年まで殆んど大都市で行なわれ，地方都市と言っても福井市，大津市のような県庁所在地で開催されていましたが，今回は日本の三大泉都とは申しながらも，田辺市，白浜町を合せて人口僅か10万余の地方，白浜で行なわれましたこと。そ

の二は，従来，前夜懇談会と称して大会の前夜に会長・幹事の懇談会が催され，大会の提出議案の説明，開催地に対しての諸案件，次年度大会の等々について協議と懇談が持たれましたが，その日程の3日間を，今回は2日間に短縮して，初日の会長・幹事部会に引きつづいて従前の懇談会が行なわれたことであります。ここに先づ登録委員会より発表された参加人員を記しましょう。

来賓20名　その家族11名

地区内　71R.C.　会員1309名　その家族 426名

地区外　31R.C.　会員　45名　その家族　28名

総計　102R.C.　1839名という盛会でありました。

なお来賓としてお迎えしましたロータリアンは，ミラーR.I.会長代理，松本R.I.理事をはじめとし，服部第369区ガバナー，難波第368区直前ガバナー，北村直前ガバナー，鳥養，柏原，山岸，秦，空地，森，村上，堀内，神野の各パスト・ガバナー並びに原田次期ガバナー・ノミニーの諸氏でありました.

以下に大会プログラムを中心に筆を進めましょう。

■大会第1日　10月2日(土)　白浜会館

定刻 14：00 会場に響き渡るファンファーレとともに，大会は開幕されましたが，本大会におけるロータリー的な最大の感銘は，何と言ってもホッジスR.I.会長の代理として遙々米国から本大会にご出席されましたチャールズ H. ミラー氏のメッセージでありました。これは，その深い内容とともに，直接本年度の第365区の活動指針ともなるべきものであり，またそれ自体がすばらしいものであるため，欠席を余儀なくされた会員のためにもと，その全文を印刷しこの月信に添えることに致しました。

15：30　部門別協議会はそれぞれ会場を異にして開かれ，各部会とも真摯な討議の裡に時間切れを惜みました。

・クラブ奉仕(A)部会

(ロータリー情報，広報，雑誌，職業分類，会員選考)

リーダー（福井北）　坪川　健一氏

・クラブ奉仕(B)部会

（プログラム，出席，親睦，S.A.A.，会報）

リーダー（長　浜）　岡田　孝夫氏

・職業奉仕部会

リーダー（京都南）　北川貞次郎氏

・社会奉仕部会

リーダー（奈　良）　今西清兵衛氏

・国際奉仕部会

リーダー（和歌山東）吉 田　豊氏

・会長幹事部会

リーダー（大　阪）　塚本　義隆氏

（各部会のカウンセラーその他，記載省略）

この会長幹事部会において特に重要事項の説明があり，ただに会長幹事のみならず，クラブ例会等に於ても充分研究，協力するよう要望されましたので，それらの要点を摘記いたします。なお，これらのR.I.からの公式パンフレットは10月末頃までに届けられる由でありますが。

さて，毎偶数年に国際大会の一部として規定審議会が開かれますことは既に各位もご承知のことと存じます。明年のメキシコ市での国際大会はこの年にあたります。その際，R.I.理事会から提出の規定改正案の中でも最も重視されている二つの案は，

(1)　ロータリー・クラブ会員規定改正案(68—42)

会員規定を大巾に一本化し，会員の〝種類〟と言う名称の廃棄も実行しようという理事会の考え方。その理由として，長年に亘って，複雑化して行く会員資格規定，現在の姿は余りにも複雑すぎると指摘しています。また会員は，その職業の本拠地か，その居住地の何れかに基づいて入会出来るという新制度。一つの職業分類に3人まで会員を入会させることが出来るなど。以上のような実に画期的なものであります。

(2)　R.I.年会費の増額案（68—24）

現行額，半年3弗を，半年4弗に増額する案。その理由として，現行年会費は過去16年間そのまま据え置かれているということ，世界的傾向の物価上昇，ロータリー企画の活潑化等々の事実を述べられ，この懇請には言わずもがなと賛意の拍手が力強く巻きおこりました。

その他，クラブの拡大と会員の増強問題，次年度会長の選任時期を早める勧告，地区年次大会の今後のあり方，日本万国博内ロータリー例会計画の進行状況などにつき説明と質問が熱心に交されました。

小憩後，会長幹事懇談会が引き続きその場所で行なわれ，R.I. 会長代理ミラー氏，ガバナー，全パスト・ガバナーも同席，北村直前ガバナーがリーダーをつとめられ，大会第2日決議委員会（委員長京都R.C. 森下弘氏）より提出される6つの決議案の審議を行ない，全部異議なく可決された次第でした。

それ以前，部会に参加されない会員並びに家族は日本三大泉都と呼ばれる白浜観光をバスを連ねて回遊され，19：00 本会場，白浜会館に再び全出席者参集，ホスト，コ・ホスト，両R.C.の会員家族の心あたたまる歓待をうけつつ大晩餐会がロータリーの友情と感激のうちにはじめられ，郷土の余興，倍賞千恵子さんの歌謡曲も楽しく，最後に「手に手つないで」を歌い喜び，初日のとばりは静かにおろされて行きました。

■大会第2日　10月3日(土)　白浜会館

定刻 9：30 再開，「限りなき道ロータリー」が酒井美智男名ソングリーダー(京都R.C.)によってあざやかな初登場？　次に予定に従って部門別協議会報告が前日のリーダーによってそれぞれ要領よく然かも適確に告げられたあと，決議委員会報告，大拍手のうちに何れも採決されましたが次のような6つの内容でありました。

第1号　R.I. 会長代理派遣に対する感謝の件。

第2号　ホッジス会長の1967～68年度計画に協力の件。

第3号　第365区直前ガバナー北村孝治郎氏に対する感謝の件。

第4号　1968～69年度国際ロータリー会長として選挙された東ケ崎潔氏に対し祝意を表する件。

第5号　ホスト・クラブ及び協力団体に対する感謝の件。

第6号　Guide to Classification に関する件。

続いて資格審査委員会報告（和歌山R.C.藤沢元雄委員長）登録委員会報告（田辺R.C.長井利一良委員長）――前記――をうけた後，特別講演として京大名誉教授，宮地伝三郎理博の「本能と文化」のお話は動物生態学の研究に生涯を捧げられた碩学のご講演だけあって，平明なお話の中にも人間社会の基本的理解に資するところ極めて多く多大の興味と感銘を与えられました。

午後，選挙委員会報告が山口善造委員長（大津R.C.）よりなされ――別掲記事参照――1968～69年度の第365区ガバナー・ノミニーにご就任された原田秀雄氏の謙虚なお態度のうちにも眉宇に決意のほどを深く示されたご挨拶は万雷の拍子を呼び，その感激は坩堝にたぎるひと時でありました。

暫くして，会場がもとの静けさをとり戻した時，今は亡き今村，岡島パスト・ガバナーの外32名の物故会員に対し静かに敬虔な黙祷を捧げ心からご冥福をお祈り申したのでありました。

次にロータリー財団奨学生の挨拶に移り，

アンドリューB・デンプスター君
(英国―大阪R.C.)

滝本正彦君（京都東R.C.―英国）

の両君が，また交換グループ研究生の挨拶を

佐山和夫君（田辺R.C.―米国)が，

またインターアクト・クラブの挨拶は当地区として第3番目に生れた橿原学院高等学校のI.A.C.会長の速見博君が若者らしい力強い決意と今後の抱負と希望を述べ出席者全員から拍手の嵐の激励をうけて降壇，恒例の出席優秀クラブの表彰がこれにつづき，第一位　和泉R.C.　100％　第二位　舞鶴R.C.　100％　第三位　鯖江R.C.　100％　第四位　大和高田R.C.　第五位　近江八幡R.C.　第六位　和歌山東R.C.　第七位　橋本R.C.　第八位　五条R.C.　第九位　枚方R.C.　第十位　茨木R.C.。同率の場合，会員数の多いクラブを優先との掟が適用されたのも嬉しい話題。

プログラムはパンクチヤルに進んだ　14：00，R.I. 会長代理へは超小型トランジスター・テレビ，同夫人へはこの地産の美しい真珠の首飾が記念品として贈呈され，北村直前ガバナーへは目録を贈り，深く感謝の意を表するとともにその労に微意を捧げた次第でした。

ポピュラーソング「我は海の子」の合唱に一息を入れたあと，待望のパネル討議は，奥村竜三氏(大阪北)がそのリーダーにつき，パネラーは奈良常五郎氏(大阪)，オーチス・ケリー氏(京都)，田口敏三氏(近江八幡)，テーマは〈国際親善とロータリーの役割〉，それぞれ経験深いリーダー，パネラーによっての活潑な展開は実に内容豊富で，示唆されるところが非常に多く，時に爆笑もおこ

り，興味と感銘を与えた時宜をえた企画と賞讃しきり。

いよいよ終幕も近く感ぜられる　15：15

ミラー会長代理は演壇にその巨軀を進めてご登壇，感想を実に堂々と，主として明年メキシコ大会に提出される議案を中心にR.I.会長と理事会の決意のほどを披瀝され，諸君の全面的な理解ある支持を与えられんことを祈ると。なおロータリーの前進途上においてこれらは非常に重要な一段階を画するものであると言っても敢て過言ではないと力説されたあと，この第365区の地区大会に惜みなき讃辞を贈ると結ばれました。

次に参加クラブ代表として最遠隔地の勝山クラブが選ばれ，ホスト・クラブ，コ・ホスト・クラブ並びに開催地への感謝の挨拶，また記念寄附の動議もあり異議なく可決。次期大会開催地の大阪南クラブ代表がホスト・クラブとしての抱負と決意を述べられ，来年の開催期日は10月19〜20日，会場は大阪フェスティバル・ホールとの予定の旨の報告と挨拶をされ万雷の拍手のうちに降壇されました。

以上，不備ながらも書き連ねましたが紙面に余裕も最早ありません。あの純粋な童心と美しいハーモニーの三校のコーラス，あの小旗を打ち振り心から歓送して下さった幼い元気な若者たちのあのフィナーレの閉幕はいまだに脳裏を去来，絶讃激励の言葉を述べたい私の胸中ですが……

最後に，例年のこととはもうせ，今回の地区大会でもホストたる田辺クラブ，コ・ホストたる白浜クラブの御尽力は筆舌につくし難いものでありましたが，ここに謹んで第365区の会員一同とともに心から厚く御礼を申し上げます。真にありがとうございました。

地区大会における
ガバナー・アドレス

本日ここに国際ロータリー会長代理 Charles H. Miller 御夫妻をはじめ，各位のご参列を得て，国際ロータリー第365区の年次大会を開催することは，まことに御同慶の至りに存じます。

今日ほど私はロータリアンの喜びと誇りとを感ずることはありません。我々はみな奉仕の理想に生きるロータリアンであります。ロータリー創立

以来正に62年，今やロータリーは世界の137カ国622,000余人に及び，人種，宗教，国境などを越えて，世界の隅々にまで拡がりつつあります。本日ここにお集りのロータリアンは凡そ1360人，その御家族を合すれば凡そ1850人であります。30数億という世界人口，1億という日本人口から考えれば，まだロータリアンの数は決して多いとは言われませんが，しかし，ロータリーが歩いた僅か62年の歴史から考えれば，確かに驚歎すべき数であり，我々ロータリアンはこの素晴しい歴史の足跡に鑑みて，更にロータリーの増強に努めねばなりません。

諸君，私は諸君と共に，天を仰いで今日のこの幸福に心から感謝いたしたいと存じます。考えれば考えるほど，感謝すべきことは余りにも多いのでありますが，今日は五つの幸福を指摘するに止めましょう。五つの幸福とは，第一に人間たるの幸福，第二に健康たる幸福，第三に職業に成果を持つ幸福，第四に家庭の理解を持つ幸福，第五にロータリアンたるの幸福であります。

第一の人間たる幸福などは一見余りにも平凡に思えるかも知れません。しかし，十数億年の生命の流れの中で，その頂点たる人間に生れて来たということほど，偉大な奇蹟がどこにありましょうか。我々はこの偉大な奇蹟に慣れ過ぎているのでありますが，この奇蹟は今日の最高最新の科学を以てしても，とてもまだ解きあかすなどということの出来ない奇蹟であります。人間は他の動物の如く，ただ環境に動かされて生きるだけではなく，環境に順応しながらも，次元の高い思索と精神生活とによって，たえずよりよき環境，よりよき社会をつくり出そうと努力しているのであり，ロータリー活動も正に素晴しいそういう努力の一つで

あります。十数億年の生命の歴史の中で，直立猿人の出現からは約50万年，現代の人間，Homo sapiens が出現してからは約5万年，人間がやや正確な記録的歴史を持つようになってからは，約5千年，文芸復興期からは約5百年前後に過ぎないのでありまして，人類の将来にはなお洋々たる前途があると言われましょう。

第二に健康たるの幸福でありますが，元気であればこそ，今日のこの地区大会にも出席ができたのであります。これも一見平凡のようですが，決して平凡どころではなく，考えれば考える程，不思議なことであります。肺も心臓も，我々の知らぬ間に，働いているのであり，胃腸も肝臓もそうであります。いわば我々は，こうした内臓の奉仕によって生きておるのであります。一見自分の工夫で生きているようでありますが，こうした内臓の働きは生れた時，そのまま大自然から我々人間に与えられているのでありまして，決して自分で特に工夫をして心臓を動かしたり，肺を動かしたりしているのではありません。知らぬ間に働く内臓の奉仕のおかげで生きているのでありまして，そういう意味では生きるということは実は，生かされて生きるとでも言わねばならぬかと存じます。

奉仕の理想に生きる我々ロータリアンが，実は内臓の奉仕によって生かされて生きているということは，まことに面白いことであります。しかし人間としてはこの肉体的な生命だけでは駄目なのでありまして，この第一生命の上に，特に人間に与えられた第二の生命たる高い精神的生命を充実してこそ，始めて人間としてのつとめを果したとも言われるのであります。考えて見ると，奉仕の理想に生きるロータリアンの生活は，それ自体人間に与えられた最も尊い仕事の一つのように思われます。

第三の幸福は，諸君が，それぞれの職業に成功され，繁昌されている幸福であります。もとより諸君のお仕事はいろいろで，必ずしも充分に満足したり，安心したり出来ない方もあるかも知れませんが，それにしても，この大会に出席できる余裕をお持ちになるということは，そのこと自体大いに謝すべきことでございましょう。二本の脚があっても不平をいう人もあり，片脚でも，いや脚がなくても感謝をしている人もあります。目が見えても不平をいう人があり，目が見えなくとも感謝している人もあります。それは心の深さの問題ではないでしょうか。

第四の幸福は，よきロータリアンたるには，どうしても家庭の理解と協力が必要かと存じますが，うっかりすると忘れ易いこういう幸福にも深く感謝したいものであります。わけても今日お元気なご夫人やお子さんたちとご一緒に出席のロータリアン諸君には，私は心からの祝福と御礼とを申しあげたいと存じます。言うまでもなく共同社会は，先ず家庭生活がその出発点であり，奉仕の理想に生きる我々ロータリアンは，よき社会人たる前に先ずよき家庭人となりたいものであり，よき家庭人たらずしては，とてもよき社会人にはなれまいと存じます。しかし，同時によき社会人たるためには家庭の理解も是非望ましいものであり，社会につながる家庭が，ロータリアンその人のみならず，家庭ぐるみでロータリーの奉仕の理想を理解し，協力して戴くことになれば，その家庭そのものの生活が奉仕と感謝の生活となり，家庭の幸福には期して俟つべきものがあると存じます。ロータリーは先ず家庭から，そして家族の一人一人からということになるのではないでしょうか。

ロータリアン諸君，我々はむずかしいロータリーの規則を説く前に，先ずよき家庭人となるように努めましょう。よき夫，よき父，家庭のすべての人々から愛され，尊敬されるような人間になるように努めましょう。これは決してなまやさしいことではありませんが，祈りのあるところには道があります。御家庭でも我々の気持ちを察して，今後ともますますご協力下さい。

第五の幸福は，現在ロータリアンとして，栄光に輝くロータリーの会員たることであります。ロータリーは御承知の如く，地域における各職業の代表たるべき人を厳重な資格審査を経て，こちらから入会をお願いするのでありまして，普通の会の如く，会費さえ出せば入会出来るものではありません。こうして厳重に選ばれた地域の人々を会員として，各職業を通じて，先ず地域社会に，この地域社会から国家，更には国家を超えて世界社会に，人類全体に奉仕しようというのが，我々ロータリアンの理想であり，生活であります。今こそ，我々は超我の理想を心深く嚙みしめ，その実

行に全力を傾倒いたしましょう。

諸君，我々は何たる幸福ものでありましょう。以上あげた五つの幸福は，今ここにいる我々のすべてが持っているのであります。とかく人間はこうした身についた現在の幸福は忘れがちで，充分その幸福を味あおうとしませんが，せめてロータリアンはそういう表面的な生活ではなく，もっと静かに，そして深く我々自身を内面から眺めたいと存じます。

ロータリー62年の歴史を通じて，しみじみ感じることの一つは，理想と現実との調和であります。ロータリーは常に前向きの大きな理想を持ちながら，しっかりと大地に足をつけて前進しつづけて来ましたが，これはロータリーの創設者ポール・ハリスを始めとして，それにつづく偉大な先輩たちのおかげであります。我々は頭を垂れて，こうした偉大な先輩たちの組織力と生命力とに心から敬意と感謝とを捧げましょう。

諸君，しかし，ただ感謝をしたり，よろこんだりするだけではまだ不充分であります。我々はこの感謝と幸福とを実行の裏づけによって，更にロータリーの成長と前進のために捧げねばなりません。ご承知の如く現在R.I.第365区はクラブ数71，会員数約4150人であります。我々はここに至った今日までの成長を喜ぶとともに，更に一段と逞しい努力によって，質量両面に亘って，わが第365区のロータリー拡大と成長とに邁進せねばなりません。よき人を選び，よき地域を選んでロータリーの増強をはかるということは，ロータリアンが更にロータリー入会によって人間的に成長を遂げ，その地域社会の前進に一段と貢献するという意味において，それはそのまま地域社会の向上と幸福につながることになります。

諸君，我々は何とかして，少しづつでもよいから日々成長するように努力いたしましょう。個人として，家庭人として，職業人として，国際人として，世界人として成長したいものであります。しかし，こうした理想は突然達せられるものではなく，着実な今日の生活から始まるのであります。しっかりと足もとの現実を凝視し，大地に足を踏みしめて，今日の生活を生かしましょう。機会があるごとに私が諸君に対し，また私自身に対して叫んで来ましたように，我々はただ口先きだけのロータリアンではなく，ロータリーをからだにつけてこれを日々の生活の中に実現いたしましょう。

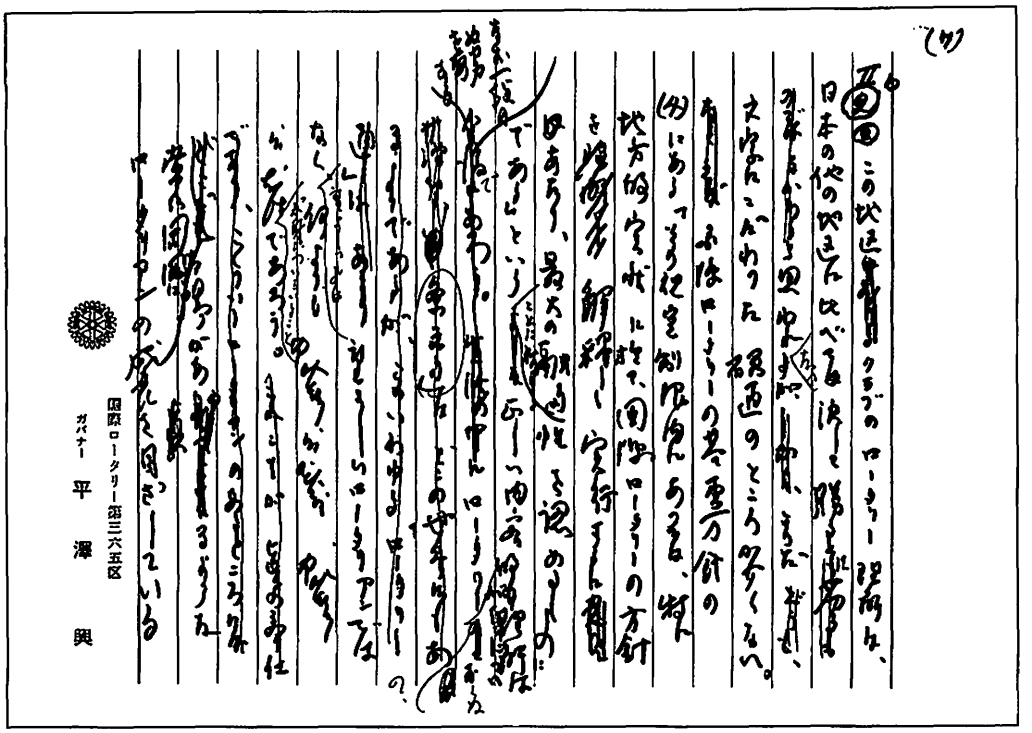
最も危険なのは，かるく文字だけを読んで分かったつもりになることであります。真に分かるということは，実になかなかむずかしいことでありまして，分かるという言葉の中には，(1)分かったつもり，(2)真に分かる，(3)その実行などいろいろの段階がありますが，陽明学などでは，知識が実行によって裏づけされて始めて分かったと言えるのだと説くのであります。なるほど知行合一のこの考え方は誠に深く，ロータリーにおいてもその通りだと思うのでありますが，我々はただロータリーを日々の生活の中に生かして，楽しく，しかも稔りの多い生活を送りましょう。

諸君，奉仕を理想とするロータリーの心は不変でありますが，本年度のホッジスR.I.会長のメッセージはいかにも具体的に，この理想を表現して余すところがありません。これはホッジス会長のみのり多いロータリアンとしての経験と，ホッジス会長その人の人柄と英知から迸しり出たもので，ホッジス会長その人を深く知れば知るほど深い味が出るのであります。ホッジス会長の言われる如く，今こそ我々は，いよいよ覚悟をあらたにし，ロータリー活動に積極的に参加し，各自の職業に成功してその指導力を発揮し，また各自の地域社会や日本に忠誠を捧げてあらゆる機会にそれに奉仕し，更には他国の人々の問題にもよく通じて国際社会の理解と奉仕に献身いたしたいと存じます。ホッジス会長のメッセージの全体として強く感ぜられることは，その逞しい積極性であります。その表現はまことに調和的でありますが，特に忘れてならぬことはこのホッジス会長の強い積極性であります。去る8月5日京都の国際会館で行き届いたモデレーター神野太郎氏の御指導の下で行なわれたリーダーシップ・フォーラムなどもその現れの一つでありますが，その趣旨については直接参加された会長，委員長等はもちろん，既にクラブ全体としても検討努力中のことと存じますので，フォーラムの詳細についてはここでは改めて繰り返しません。しかし，クラブの増強，世界社会奉仕等を始め，クラブ活動の全般に亘り，本年度は格別の御精進をお願い致します。

たしかにホッジス会長の言葉には，表面の響き

以上に深く，広いものがあります。小さな行きがかりや感情に囚われずに，大きく温かく世界を感じとる世界的センスと世界的善意とがそのうしろにあります。もとより世界的組織たるロータリーの会員は，本質的にはその第一条件としての世界的センスと世界的善意とがあろうかと存じますがこれは口でいうほど簡単ではありません。お互によきロータリアンたるために，何とかして一日も早くこうしたものを身につけて世界的なおとなになりましょう。

本日はこのあとにR.I.会長代理ミラー氏によるR.I.会長メッセージや，部門別協議会，会長幹事懇談会等がありますが，どうぞロータリー活動に関する活潑なご検討を賜わり，それを逞しく第365区の今後の活動に資し得ればまことにしあわせに存じます。ありがとうございました。



国際ロータリー第三六五区
ガバナー　平澤興

この原稿は、一九六八年に平澤ガバナーが、ファイナル・レポート(英文)としてRIに報告された原稿からの抜粋です。

II②この地区クラブのロータリー理解は、日本の他の地区に比べて決して勝るとは思われないが、まだ、文字にこだわった硬直のところが少くない。国際ロータリーの基本方針の

(4)にある「その規定制限内にあっては、特に地方的実状に於て、国際ロータリーの方針を解釈して実行するにあたり、最大の融通性を認めるものである」ということに対する正しい内容的理解にはなお一段の努力を要する。ロータリーが身についておらぬ条文通は望ましいロータリアンではなく、望ましいものは何よりもRotary in action Rotary in Life が身についていることであろう。常に周囲に太陽があるようなロータリアンの成長を目ざしている

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 6 November 15. 1967　　ガバナー月信　第6信（昭和42年11月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

奉仕と理解

紅葉も日ごとに深まる季節になりました。ますますロータリーに御精進のことと存じます。私もガバナー公式訪問その他で忙しい日々を送っております。いろいろの事を考えさせられ，教えられしながら，今更ながらロータリー生活の深さと広さに驚いております。

この頃しみじみ感じていることは，ロータリーが理想とする奉仕ということも，ただ善意や意慾だけで正しく出来るものではなく，それにはどうしても正しい理解が必要だということです。それは四大奉仕部門のどれについても言われることです。実行の前に，この正しい理解がないと，その行事はただ形式的になって，最も大切な精神が失われ，何のために時間と金とを費しているのかさえ，はっきりしないようなことにもなりかねないのです。

話を具体的にするために，たとえば，社会奉仕を一つ例にとって見ましょう。社会奉仕には身体障害児，都市安全，文物保存，文化活動，奨学生表彰，学生招待，青少年問題，インターアクト，老齢者への奉仕等，いろいろ様々の面がありますが，これ等をただ機械的，事務的に行ったのでは，各地域における重要問題を重点的，効果的に遂行することが出来なくなる恐れさえあり，それには社会奉仕の理念をしっかり掴み，それに従って先ず各地域の実状を入念に調査して，充分地域の実状に通じ，その上で適当な選択が行われねばなりません。しかし，実際に公式訪問をして見ると必ずしも，そういう風に行われてはおらず，どうも今までの例とか，隣りのクラブに右へならえという式にやっているようなところも少くないようです。

いわゆる社会奉仕は，各ロータリアンがその地域社会に決して無関心でおるというようなことがなく，社会の一員として社会に対して積極的な関心と愛情とを持ち，社会をよりよくし，幸福と不幸とを分ちあうために奉仕をしょうということで，この趣旨を充分に理解せずに，事務的に事を運んでは真に本来の意味を生かすことが出来ないのでありましょう。もっと端的に言うなら，社会奉仕はロータリアンが中心となって地域における社会生活全体によい雰囲気を与え，ただロータリアンのみならず，地域の住民全体に，よき町づくり，よき村づくりの積極的意慾が生れるようにすることでしょう。従って奉仕は，ただに上にあげたような問題のみならず，往来にも，電車の中にも，公園にも，学校にも，地域の全生活面にあるわけであり，すべてのロータリアンの生活に正しい社会奉仕の理想が充実しておれば，どこにも社会奉仕の機会はあると思われます。

奉仕には正しい理解が先行すると言いましたが，これは普通考えられているよりは，はるかに重要のことで，もっと関心が払われねばなりますまい。実際問題としては忙しいロータリアンのすべてに望むことは無理かも知れませんが，しかし，真に地域社会に対する愛情を考えれば，その正しい理解には，ただ表面的の理解だけではなく，各地域にはそれぞれ特殊の事情があることだから，クラブとして，地域の歴史，地理，行政，経済，教育，文化等々，そのあらゆる面に関しての知識や伝統を知ることが望ましく，更にその上に過去に対する理解だけではなく，世界的視野に立って現在と将来を考える広いセンスと高い見識が望ましいと存じます。ロータリアンが地域社会に足を踏みしめながら，同時に常に全世界に思いをはせているということは，そういうことでありましょう。困難ではありますが，ロータリーの意義と各ロータリアンの人間的生長がそこにあります。ロータリアンはよき地域社会の人たるのみならず，よき世界人でなければなりません。

地域社会の問題を具体的にとりあげるにしても，各ロータリアンの，そして各クラブの世界並びに地域社会に対するセンスの広さと識見の高さの如何は，直接問題選択の視野と方向に影響を与えます。われわれは，もっともっと深く広く，しかも一方的に偏せず，各自の地域社会を眺める習慣と意慾を持たねばなりますまいが単に形式的のものとならず，真にその目的を達するようにしたいものであります。

以上は社会奉仕を一例として奉仕と理解との関係について述べましたが，ここで一般的に強調したいことは，正しい奉仕は，ただ善意や意慾だけで出来るものではなく，それには先ず問題の正しい理解が必要であり，しかもこの正しい理解はただに頭脳の明い如何のみの問題ではなく，視野の高さやセンスの広さなどにもかかるということを強調したいと思います。即ち正しい奉仕には善意と意慾，それに正しい理解やセンスなど，一言にして言えばやはりロータリアンの人間全体が関係することになります。ですから正しくロータリーの奉仕生活をするためにも，本当に世界的のおとなになりたいものです。

十月二十四日
岸和田R・C・公式訪問

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 7 December 15. 1967　　ガバナー月信　第7信（昭和42年12月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

歳末にあたって

——ロータリー年度前半の終りに——

あっというまに，今年も年の暮になりました。今年は私にとっては，まことに忙しい年で，4月末から5月始めにかけてのレーク・プラシッドにおけるロータリーの国際協議会，6月下旬におけるニースでの国際大会，6月24日の京都の国際会議場における第365区の地区協議会と8月5日の地区リーダーシップ・フォーラム，10月2日，3日の白浜における地区大会，更に第1組から第8組にわたるインターシティ・ゼネラル・フォーラムと地区内クラブのガバナー公式訪問など，主なものだけを拾って見ても，盛り沢山の行事がありました。

そのどれを取って見ても，やはりそれぞれの思い出と反省があり，それだけ学ぶところも，おそわるところも多うございました。

中でも，ガバナー・ノミニーとしてのレーク・プラシッドに於ける印象は最も強烈なものの一つでありました。私はここで印刷物などからはとても学ぶことの出来ない生きた国際ロータリーの姿に接し，ガバナー・ノミニーとしての心構えを新たにしました。私はここで国際ロータリーがたしかに生きているという実感を体得しました。ロータリーの拡大については，私はそれまで質に重点をおいたやや固い考え方を持っていましたが，この生きた国際ロータリーの姿に接して，質の重要さについての根本的な考えは変らないにしても，同時に数の重要性について新たに強い印象を受け，文字で表現すれば平凡極まることながら，ロータリーの拡大はやはり，質と数の両面で行かねばならぬということを，強く強く感じました。

たしかに停止するところには退歩が始まるのであります。たえず前進を進めながら，質の向上を考えねばなりませぬ。職業に基盤を持ち奉仕を理想とするロータリーは，決して狭義の教育組織ではありませんが，しかし，エバンス前会長が＜ロータリーを通じてよりよき世界を＞と提唱されている如く，それは奉仕を通じてよりよき世界を目指すものであり，そうだとすれば地域社会から出来る限り多くの職業代表者を集めて，これを立派なロータリーアンに育てあげることは，そのまま地域社会の改善にもつながることになり，また全世界的の組織たる国際ロータリーとしては，そのまま世界社会の向上にもつながるのであります。レーク・プラシッドでやや固い閉じた従来の私の考え方は，もっとあかるい前向きの開いた考え方に変ったのであります。これは約変と言えば約変でありますが，私にとっては少しの無理や，わざとらしさはないのであります。

もとより数の重要性についての私の新しい認識は，既にふれたように，会員の質を無視してよいなどということではなく，14段階を経ての慎重の会員選考は，今でもむしろ厳しくしても軽くすべきではないと思っております。だからロータリーの拡大は，それが内的であっても，外的であっても，ロータリー・クラブの増強をというクラブ全体の熱意と努力によるほかはなく，粗末なものでもよいというのではなく，野に遺賢なからしめる，という考え方で，あくまでよきものを，かくれたよきものを一人残らず探し出すということでありましょう。こうして探し出されたよきものは，ロータリー入会によって更に一段と向上し，生長するはずであります。そう考えるとロータリーの拡大は先ず地域社会の，そしてひいては世界社会の改善につながることになり，ここに大きな社会的意義があることになります。各ロータリー・クラブではこの辺のことは充分に了解しておられることと思いますが，以上のような意味で，クラブの拡大には更に格別の御努力を得たいと存じます。

ニースのロータリーの国際大会で最も印象的なのは，文字通り世界の各地から人種や宗教や言語を異にする多数の会員とその家族たちが集まったということ，更にそれにもまして忘れ難い思い出は，こうした人々の表情がいかにも明るく朗らかで，しかもかつては一面識もなかった人たちが一度会えばたちまち十年の知己の如く楽しく，心を許して語りあっている姿であります。ここにはたしかにロータリアンの顔があり，表情があります。恐らくこの顔と表情こそは，最も端的なロータリーの表現で，たしかに人種や宗教や言語を異にしても人類にはこうした社会があるのであり，具体的に之を実現し，世界にこれを示しつつあるということは，ロータリーの大きな功積の一つでありましょう。国際ロータリーの会長ノミニー東ケ崎　潔氏，理事の松本兼次郎氏の国際大会の壇上における姿もまことにりりしく，われわれ日本人にはただロータリーにとってだけではなく，何か日本に大きな明日が暗示されているようで，まことに嬉しく感じました。

地区協議会，リーダーシップ・フォーラム，地区大会などについてのことは，何れもその都度報告しておりますので特にここに触れませんが，しかし，ガバナーとして感謝に堪えないのは，その都度関係者の気持ちよい協力と友情とを得たことでございます。滑らかに進められた会の楽屋裏の話を聞きますと，全く涙の出るようなことが数々ございます。

本年度のインターシティ・ゼネラル・フォーラム (I.C.G.F.) は8組に分けられて開かれましたが，去る11月2日，緒方パスト・ガバナーをゼネラル・リーダーとし，和歌山南クラブをホストとするもので全部終了いたしました。I.C.G.F. については，どうも毎年あまりかわりばえがないとか，形式的とか，マンネリズムに陥っているとか，など色々批判もあり，たしかに之等の批判の中には大いに聞くべきものもありますが，しかし和歌山南のI.C.G.F. などはなかなか活発で，内容も豊富でありました。要は参加各位の熱意と勉強と工夫とによるものでありましょう。過日の地区パスト・ガバナー，ガバナー・ノミニー各位との打合せ会では，明年度は8組ではやや人数等に無理も起るので10組とし，且つ参加者の時間の都合その他をも考慮して多少組み合せをかえようということであり，そういうことになりましょう。

現在行われているI.C.G.F. の型は大体国際ロータリーの指示によってきめられたものでありますが，かなりクラブの経験も多くなったことでありますから，ここらでもっと独創的工夫をこらしたらよいと

思いますが，各クラブでもよく考えて戴きたいと思います。

ガバナー公式訪問は本年内に約60クラブを終了出来ますが，残ったクラブは明年２月中には全部終了したいと思います。国際ロータリーでは原則的には年度の前半に公式訪問をすませるようにとのことでありますが，本地区の如く多くのロータリー・クラブを有する地区ではそれも困難なので明年２月中にとしておるのであります。公式訪問，I.C.G.F. で感ずることは，一応どのクラブもよく準備され，まじめに研究をしておられますが，どうも耳学問が多くて，手続要覧やその他の文献を読んでおられることが少いということであります。従って形式的のことや，行事は習慣的に一応は心得ていても，ロータリーの綱領とか，定款細則など基本的なものの本質的理解が浅いということであります。ロータリーを正しく理解することは楽しくロータリーに参加するという意味からも重要なことで，自ら読書し，更にフォーラムとか，炉辺会合などを通じて意見を交換しあって，是非基本的な理解は身につけて戴きとうございます。

手続要覧などはあるいは，始めは一人だけで読んだのでは，取りつきにくく，また分かりにくいというようなこともあるかと思いますが，それなら何人か組みとなり，経験の深い人をリーダーとして勉強するような方法もあるかと思われます。しかし，何れにせよ，自ら学びとろうという心構えなくしては真の理解は不可能でありましょう。それは既に孔子も「学んで思わざれば則ち罔(くら)く，思うて学ばざれば則ち殆(あやう)し」というておる如く，学んでは更に自ら深く考えて見なければ本当には分らず，こんなことぐらいだろうと思って学ぶべきところを学ばずに，独りよがりではあぶないのであります。

ちょうど年もいよいよ改まることでありますから，われわれロータリアンも更に心を新たにして，来年は更にロータリアンとしても一段と生長いたしたいものであります。真に生長するものには暦年などはないかも知れませんが，しかし，われわれ凡人にはたえず平均に直線的に生長するということはむずかしく，正月とか誕生日とかいうものを生かして，その度毎に覚悟を新にしながら生長することが実際的のようであります。

ロータリーの世界は奉仕の世界であり，楽しみの世界であり，光の世界であります。佐々木信綱さんは正月を歌って「春ここに　生まるる朝の　日をうけて　山河草木　みな光あり」とよんでおられますが，われわれもまたそんな心境になりたいものです。

年を送るにあたり，心から会長，幹事はじめ，会員各位の友情に感謝し，更に会員各位に新しいよい年をお祈り申しあげます。

——12月４日　公式訪問中の旅舎にて——

十一月六日
貝塚R・C・公式訪問

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 8 January 15. 1968　　ガバナー月信　第8信（昭和43年1月15日）

第365区ロータリークラブ
会長並びに幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

山河微笑の一年に

――1968年を迎えるに当って――

新年おめでとうございます。今年こそ山河微笑の年とし，奉仕徹底の年と致したいと念じますが，その根元は深い思索だろうと存じます。先ず今日のわれわれの生活の中にある限りない幸福を知り，心深くそれを味わい，それに感謝いたしましょう。

われわれ人間の生命にはたしかに限りがありますが，その有限の人間に殆んど無限の可能性が与えられているのです。何たる不思議のことでしょう。もとより人間には，誰しも多少は困ることや，不服のこともありましょうが，それも考えようで，実は一見不幸のような事のなかにさえ，深く考える目には幸福が見出されるのです。普通誰も痛みなどには感謝をしませんが，これとても実は危険に対する警報で，これあるがためにたいていの危険は破局的な大事にならぬうちに処理されるのです。孟子は「人は

憂患に生き，安楽に死す」などと言っておりますが，意味深重であります。一病息災などということも，なかなか味のある言葉で，まるで病気を知らぬような人間よりも，一つぐらいは病気のある方がからだを大切にするので，かえって丈夫にもなり，長生きもするというような意味でしょうが，これは肉体についてだけではなく，精神的にもそうだと思います。充分意志の強い人には，自らの欠点を知ることは決して弱さではなく，むしろそれによってどこまでも生長し得る長所ともなり得るのです。

人間は生物の中では最も若く，まだ生れてから5万年前後にすぎないのです。しかし，近頃のように，人間の機械化とか，分裂とか，あるいは人間の疎外とか，ノイローゼとかいうことを聞くと，僅かこの数万年の間に人間はもう若年寄りになったり，疲れたりしたのではないかと疑われもします。しかし，人間に与えられた無限の可能性，いかなる天才と雖も未だ使えつくしてはいない無数の脳細胞などを思うと，決して人間はこんなところで長く停滞したり，疲労状態で終るようなことはなく，必ず精神的余裕を回復して，現在のわれわれには想像も出来ないような人間生活を生み出すでしょう。残念ながら人間は今のところ個人的生活もさることながら，社会，国家，世界という風に大きな集団になればなるほど野蕃になっていますが，まことに悲しいことで，一日も早く互に殺しあう戦争などという動物的状態を脱せねばなりません。しかし，そういう中で，ロータリーのような年ごとに伸びている国際的な奉仕組織があることは，何としてもうれしいことで，人類の明日に大きな希望を与えてくれます。

元来生きるとは，まず第一に生かされることであります。心臓にせよ，肺臓にせよ，どの内臓一つも自ら工夫をして動かしているのではなく，生命とともに直接には父母から授かったものですが，父母はまたその父母からという風に大自然から授かったものであります。そんな風に生きるということが先ず生かされるということだとわかりますと，われわれも何とか世を生かし，人を生かしたい気持ちになります。これは別の言葉で現せば，ロータリーの奉仕にほかなりますまい。しかし，生きることが，先ず生かされるということになりますと，この奉仕は，ロータリーのいうクラブ奉仕，職業奉仕，社会奉仕，国際奉仕というだけではなく，もっと根元的なもの，たとえば大自然に対する奉仕などもあるようで，われわれは地球にも，太陽にも，全宇宙にも，さらにはまた，ただ一粒の砂にも手を合わせて奉仕をしたいような気になります。

今日こうして生きておること自体が，既にただごとではなく，そこには自己の力だけではどうにもならない数々の力が働いているのです。五体整ったすこやかな人間として生れて来たこと，今日元気で働いていること，親兄弟揃った平和な家庭——そんな平凡なことと言う人もあるかも知れませんが，それは見方が浅いので，平凡どころか，この平凡は少し深く考える頭には目を見はるような奇蹟中の奇蹟なのです。われわれはこの幸福の一つ一つを深く味わい，それに深く感謝いたしましょう。真にこれが分れば，おのずから手を合わさずにはおれない気持ちになります。しかし，こういう気持ちは，ただのもの知りとか，知識の集合のみからは生れるものではなく，静かに深く人生を味わい，人生を考えなくては出ないものであります。世の中には辞書の如く何でも知っておりながら，さっぱり味のない人もありますが，できれば味は深いほど望ましいことです。

不思議なもので，こういう人間の味は，自然に表情などにも現われて来ます。昔から「顔は心の窓」などと言われる如く，たしかに顔は裸で，これほど心のようすを，そのものずばりと表わすものはありますまい。これは世間でいう美醜などとは本質的に異なり，どんなに上手につくり笑をしても，数分話をしておれば，とても自然の表情をかくすことは出来ないのであります。深く知ることは，必ず自己の力の限界を教えてくれ，今日無事に生きること自体の中に既に己を超えた無限の力があることを教えてくれ，おのずから感謝への道へ導いてくれます。そしてこうした感謝の心を知り，感謝の心で働くようになれば，必ずそれはまた表情にも現れるようになり，ゆたかな顔にもなります。「四十以上は自分の顔に責任をもて」などと言われるのも，このことは尤もなことだと思います。この心の美がなくては，どんなにいわゆる美しい顔でも何か物たらぬ気が致しますが，反対に心の美があれば普通の意味ではそれほど美しい顔でなくとも，年とともに次第に魅力的なものを具えるようになります。この心の美は，

そとからの化粧では与えられぬもので，化粧の最後のきわめてとなるこの美は，自らの力で心の内側から養うほかはありません。

人間として幸福に暮らすに最も大切なことは，深く考えるということではないでしょうか。幸福は心の状態であります。どの道，どの職業にせよ，真に最善を尽して働くとき，必ずそこには部分的な知識を超えた，もっと総合的な智慧は生れて来ます。この総合的な智慧はなかなかうまく表現できませんが，分かって見れば一見案外平凡のこともあるようでございます。しかし，わかったようなつもりで，ただ機械的に人のあとを真似ごとで歩いていくだけでは，この平凡さも実は分からぬので，人の真似だけの平凡さと，自らの汗でかち取った平凡さとには大きな開きがあり，自らの汗で得た平凡は実はもうただの平凡ではなく，この平凡には古今の大道が含まれているのです。やっぱり平凡一つを身につけるには，ほんものを身につけるのは容易ではないようです。私はやっとこの頃，こんなありふれた事をしみじみと感じるようになりました。恥ずかしいと言えば恥ずかしいことですが，しかし，一生気がつかないよりも，少しはましかなあ，などと自らを慰めております。若い日，すねかじりで楽に学校を出たような者には，自分ではひと通り人生がわかっているように思っても，なかなかそうばかりとは申されませんが，私もその一人で，せめてこれからでも，限りない広さと深さを持つこの人の世を，且つ学び，且つ楽しみたいと念じています。

真に一つの道，一つの職に命を捧げた者には，究めても究めても限りがなく，むしろ出来ることよりも出来ないことが多く，また分かることよりも分からぬことが多いということが，本当に分かります。「最もよく知るものこそ，真にいかに知ることが少いかということを知るものだ」というようなことを言えますが，この言葉の意味も，そういうことを言っておるものだと存じます。

一見これは淋しそうですが，しかし，真に知らぬということを知ることは，決して淋しいことではなく，むしろ内側からたえず未知の世界へ向っての力と希望とを与えてくれます。それほどあらゆるもの，あらゆることは深く，広く，一粒の砂の秘密さえも，その最後の構造にはまだ不明の点があるのです。究めても究めても分からぬところがあるのみならず，むしろ究めれば究めるほど分からぬところが多くなるとは，何という不思議でしょう。分からぬと言えば，小は原子核から大は宇宙の問題に至るまで分からぬことばかりですが，どうして自然にはそれほどの不思議が充ち溢れているのでしょうか。人は簡単に当り前とか，平凡とか言えますが，決して世の中にそんなものはなく，見える目にはみんな神秘そのものであります。

山河慟哭とか，山河微笑などという言葉がありますが，同じ山河も自然もこちらの気持ちで変るということは面白いことです。同じ世界に住んでも毎日つまらぬことに一喜一憂して生きることと，いわゆる平凡の中にも大自然の神秘を感じて悠然と生きることとでは，一生にしたら大変な違いになりましょう。自分の顔は自分のもので，同時に社会のものでもあり，こちらが笑えば相手も笑え，こちらがおこれば相手もおこります。おこられても，どなられても，われわれはやはりほほえみの人生を送りましょう。

地球は狭くなりつつありますが，それでもまだ充分広く，同じ正月でも，冬もあれば夏もあり，また冬とか夏とか言っても所によって，それぞれまた持ち味があります。昨年レーク・プラシッドの国際アッセンブリーで，国際ロータリーでは手紙に時候の挨拶は書かぬことにしている，と聞いて，私は一瞬大きな暗示を受けました。バライティがあるということは，面白いことです。色とりどりのバライティに彩られて，ロータリーはますます楽しく味のあるものになりましょう。われわれロータリアンもいよいよ広い心，深い心になりましょう。一切のものに愛と友情を捧げて，ことしは山河微笑の一年とし，奉仕徹底の一年といたしましょう。

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 9 February 15. 1968　　ガバナー月信　第9信（昭和43年2月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

4つのテストについて

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

凡そロータリアンなら，誰でもこの4つのテストの文句は知っているでしょう。しかし，文句を知っているということと，真の意味をしっかり理解して，日々の生活に生かしていることとは，必ずしも一致はしません。

最初この4つのテストを読んだ時，実は私もそれ程の感動を受けず，極めて常識的のことだと思っただけであります。しかし，後でこの4つのテストが生れたハーバート・J・ティラー氏の物語りを読み，この言葉の意味を深く考えて自らの行動を之に照らして見るに及んで，私は次第にこの4つのテストのすばらしさに驚歎するに至りました。

周知の如く，この4つのテストは単なる言葉ではなく，これによってティラー氏がつぶれかかつた会社を完全にたて直したもので，この言葉にはティラー氏の血がかよい，ちよっと見るとさほどにも思われぬが，実は人生に対するまじめさときびしさに貫かれているのであります。

1. 「真実かどうか」。最初私はこれくらいにはよい点がとれるように思いましたが，公私の生活を深く考えるとどうもむずかしいようであります。正直ということは，子供の時から教えこまれ，特に尊敬する中学の中山校長先生の話は，身にやきつけられています。正直についての先生の話はもう50年以上も

前のことですが，つい昨日のことのように鮮かに思い出されます。ある時先生は穴うめの授業に来て言われました。「ほんとうに正直で生き抜くということは，大変なことである。私も一生懸命に決して嘘は言うまいと努力して来たが，どうもそうばっかりは行かなかった。しかし，これからも頑ばろうと思っている。むずかしいが，やはり正直がいい。一緒に頑ばろうではないか」。いろいろ面白い例をあげて深く自省しながらのお話しは強くわれわれ生徒たちの心をうちました。今でも中学の友達にあうと，よくこの時の話が出るのです。残念ながら日本の社会には，今でもまだ嘘が少なくありません。例えば予算の作製などについて見ても，日本ではまだ一般に多少はかけひきや嘘があるものの如く考えられ，たとえ正直に出しても始んど常にいくらかは削減されるというよな状態で，いきおいそれを見込んで，ある程度のかけひきがはいるというようなことになり易いのであります。よく「うそも方便」などと言われますが，考えて見ると恐ろしいことであります。日本ではまだ公私すべての面で，文字通り真実に生きる，ということにはなお多くの困難があるようですが，しかし，社会の先瑞を理想を以て歩こうというロータリアンは，こういう点でも社会の模範になりたいものであります。

2. 「みんなに公平か」。Fair という訳については，公平とか，公正とか，いろいろ議論があるようですが，そんなことよりも，もっと本質的に Fair ということを深く考え，それを実行する方が，遙かに大切であります。Fair とは公明正大で，かけひきやえこひいきがなく，気持よくことを運ぶことで，Fair PIay の Fair であります。たとえば競走しながらも競走相手が走り易いように気をくばるというようなことですが，これは余程心の美しさとゆとりとがないと出来ません。だが，ここまで考えて生きてこそ，始めて真のロータリアンであり，むずかしいですが，努めてそういうものになりたいものであります。

3. 「好意と友情を深めるか」。これになると更にむずかしうございます。たとえばある問題を上手に処理しても，その結果相手の好意と友情とを得ることが出来なければ，この第3項には及第できないのであります。日本流に考えれば，たとえば，社長がある困難な問題を解決すれば，それだけでたいしたものだ，とほめられるかも知れませんが，この「好意と友情を深めるか」という4つのテストの第3項にかけて見て，ほんとうにそうでなければ，まだこれに及第とは言われぬことになります。ここまで考えると，これに及第することはなかなか容易ならぬことであります。

4, 「みんなのためになるかどうか」。この第4項も，よく考えると大変なことで，問題の処理を，それに関係するすべての人々にとって都合がよく，利益をもたらすようにするということは，余程当事者の間に公平な判断と深い思慮がなくては出来ぬことであります。4つのテストの第3項と第4項とは，社会全般にひがみや偏狭さがとぐろを巻いていてはとても出来ず，どうしてもその前提として，社会に話し合えばわかる良識と判断とが必要であります。たとえば労資間の問題などにしても，その両方に相手を信頼し，相手の立場を理解しようという教養と理解がなければうまくは行きますまい。適当と思われる要求を出すのはむしろ望ましいことでしょうが，しかし，これはあくまでも両者の話しあいによって決められるべきで，要求を出したが最後，後は真の話し合いらしい話し合いも充分せず，力だけで一方的に押すだけでは，とても4つのテストの第3項とか，第4項を満足せしめるような解決は出来ないでしょう。

こんな風に4つのテストを考えると，そこにはただロータリアン個人としての問題だけではなく，それを取りまく社会の，状態や教養なども大きな問題となってくるのであります。もとよりロータリアンは地域社会の職業的代表者のみでありますから，環境だけに責任を転嫁するような無気力や無責任は許されず，地域社会に問題があればますますその先頭に立って悪習の改善に力を尽さねばなりませんが，特にここで強調したいことは，4つのテストを真に生かすためには，深く考えもせずに，ただ盲目的に言葉を暗記したり，分かったような安請け合いをするだけではだめだ，ということであります。そのためには，日本の現状をしっかりと把握した上で，覚悟をして創意工夫を施さねばなりません。

4つのテストを読んで，先ず驚くことは，その個々の項目よりもむしろ人生に対処するまじめさときびしさであります。テイラー氏は社員に求める前に，まず自己に求めておるのであります。広告一つに

しても，嘘や誇大さや，さらには競争会社の悪口など一切を取り去って，高い道徳的立場で事に当ったということでありますが，これは余程の覚悟とまじめさなくしては出来ないことであります。「最もよく奉仕するものが，最も多く得る」と言われる如く，テイラー氏の経営は着々功を奏し，破産しかかった会社も，立派に立ち直り，繁栄をつづけているとのことであります。

更に４つのテストで感心することは，一方では大きな理想を描きながら，他方では極めて具体的，実際的だということであります。１から４までのどの項目を見ても誰にも分かり易く，行うことはむずかしいにしても，目標はまことにはっきりと示されているのであります。

孔子の弟子に曾子という人がありました。この曾子は孔子の道はまことにむずかしいようだが，よく考えれば「忠恕」につきると言っておるのであります。忠とはまっすぐな心，かけひきやごまかしのない心で，大体４つのテストの１と２に当るでしょう。いや，１と２に当るというよりは，１と２もこの中に含まれておると言った方がより正しく，忠にはもっといろいろ広い面があるでしょう。恕とは己れの如く人を思う心で，こういう思いやりのある心で事を処理すれば，４つのテストの３の好意と友情も得られようし，４のみんなのためにもなることでしょう。恕もまた４つのテストの３と４を含み，更にそれ以上に広いものを持っているようです。そういう意味では忠恕というような言葉には誠に深いものがありますが，しかし，それだけに抽象的で，誰にも，どこでも，いつでも，事に当ってすぐ具体的な参考にはなりかねる点があります。具体的の点では，たしかに４つのテストは遙かにまさっております。いつでも，どこでも，誰にでもすぐ応用できるためには，出来るだけ短かく，しかも具体的な方がよく，４つのテストはこういう考え方から短かい具体的の言葉で自らに問う疑問文の形をとっているのであります。

たしかに４つのテストは，いつでもどこでも，我々の言行に対する正しいものさしとなります。もし我々の言行がこれに照らして立派なら，堂々と自信を以て歩けるでしょう。しかし，この４つのテストは先ずその中にある人生に対するきびしさとまじめさとを理解せずしては，とてもその真意は分らぬでしょうし，従ってまたとても言行を之に照らして実行するなどということは出来ないでしょう。机の上に飾るのもよく，会社に飾るのもよろしいでしょう。だが，ただそれだけではたいしたことはなく，時にはむしろ不真面目の譏りさえもうけかねないでしょう。

４つのテストはただ飾るものではなく，心の浄化剤とし，行動へのガソリンとすべきものであります。おたがいに祈りをこめて，この道を進みましょう。

一月二十四日
新宮R・C・公式訪問

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 10 March 15. 1968　　ガバナー月信　第10信（昭和43年3月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

ガバナー公式訪問を終えて

各位ともお元気の事と存じます。私も去る2月16日の京都東ロータリー・クラブ例会訪問を最後として，私がお引き受けした当地区71クラブの公式訪問を終りましたが，本年度新設クラブの訪問はまだ残っております。公式訪問を終えたこの時点で，はっきり申しあげたいことは，私の心に残る明るい残光と深い感謝であります。私自身ロータリーに対する理解や実践にはまだ遠く及ばざるものがあることを誰よりもよく知っておりますが，そのためにこそ是非一人でも多くロータリーの正しいご理解を戴きたく，公式訪問の際は卒直に思うがままのことを申しあげましたが，それは誠にすなおにご理解して戴いたようであります。私はあまりこまかなルールなどよりも，ロータリーの綱領とか，「超我の理想」とか，「最もよく奉仕するものが最も得るところが多い」などというロータリーのモットーとか，あるいは更に「4つのテスト」とか，ホッジスR.I.会長のメッセージなどについて特に力を入れて，時間の許す限り語り合うことに致しました。これは，こういうものの中に，いわばロータリーの精神も歴史も含まれており，この真の理解なくしては，とても正しいロータリーの理解は不可能だと信じておるからであります。そして，これはただ各位に申しあげただけではなく，私自身にも言いきかせているのであります。これらについては，まだこれからも考えつづけて行かねばならぬ点が多く，しかもそれはただ考えるだけでは駄目で，実践を通じて体得せねば分からぬようなことも，いろいろあります。

ガバナー公式訪問の中に，私は多くのことを学び，また多くのことを考えさせられました。たとえば，或る職場訪問をした時，驚いたことがあります。それは案内してくれたそこの社長が，クラブの例会などの時よりもはるかに輝かしい表情をしておられたことです。クラブのアッセンブリーでも例会でも社

長の表情は，たしかに落着いた品のよいものでありましたが，会社で見る社長の顔はとてもその比ではありませんでした。その何倍も明かるく，しかも自信と活気に満ちたものでありました。その後こういう経験は，一度や二度ではありませんでした。一体これはどういうことでしょうか。ロータリーの例会などにおけるよりも，職場における顔がより明かるい，ということは考えようによっては，即ち職場そのものから見れば，たしかに素晴しいことでしょう。しかし，ロータリーの側から見ると，いろいろと考えさせられる点があります。日頃の気疲れや憂鬱さを吹き飛ばして，今日の友情を楽しみ，明日の力を得ることにこそロータリーの一面があるはずでありますのに，ロータリーの例会での表情が職場ほどではないとは，一体どういうことでしょうか。どうも何かそこには無理があるようです。この無理の正しい解析は，私にも今すぐには出来ませんが，お互そういうことがないか，そしてあるとすれば，それは一体何か，などということも静かに考えてみねばなりますまい。あるいは，われわれが世界的に見ると閉ざされた社会に生きて来たため，社会生活に不慣れだなどということも，その一因かも知れません。少くとも私などにはたしかにそういう点がありましたし，今でも充分開いた社会性が身についているとは思われぬ点がいろいろあります。あるいはまた折角出たロータリーの例会があまりにも型の如くで，やかましいことだけを言って，面白くない，などということも，その原因の一つかも知れません。例会の楽しさは言われる如く，スピーチもその重要な要素の一つでしょうが，しかし，それよりも忙しいひとときをさいて多くの友達と会ったり，話をしたりすることに本源的な自然な喜びがあるようにも思われますが，こうした会合の空気が各位のクラブに，どれほどつくりあげられているでしょうか。義理で出る例会であったり，出席のために出る出席では，決してそれはあるべき姿のロータリーの会合とは言われますまい。本当に出るのが楽しい例会——どうしても会員全体の力でそういうクラブをつくりあげねばなりませんが，それは会員すべての楽しい義務でもあります。ロータリーは奉仕を理想とする組織でありますが，ロータリー綱領の示す如く互に相手をよく知りあうことは，奉仕の一つの機会であり，奉仕の始めでもあるのであります。

公式訪問中に，今更の如くしみじみと味あわせられた言葉があります。それは「天は人の上に人をつくらず，人の下に人をつくらず」という福沢諭吉のお言葉ですが，実は私は，こんなことはもう充分わかっていると思っていました。たしかに，そういう言葉はもう50年も前に聞いたし，その意味も一と通りは知っておりました。しかし，公式訪問中にあらためて私はまだこの言葉の最も深い意味までは知っておらなかったということに気づいたのであります。福沢諭吉は「天は人の上に人をつくらず，人の下に人をつくらず」と言っておられるのでありますが，考えて見ると私自身をも含めて，時には自分で勝手に自らも知らぬ間に自分を人の下においていることがあります。ポール・ハリスもいう如く，ロータリーの例会ではその入口で，社会的な名とか，地位などはすっぽりぬぎ捨てて，文字通り一対一で楽しい時を持つようにということですが，日本の社会ではなかなかすなおにそうばかりは行かず，これが無意識の間に一つのストレスとなっているようなことがあるようです。一対一ということは，人間として，ロータリアンとして，人を尊び，自らを尊ぶことで，決して威張るとか礼儀を知らぬとかいうことではなく，実は真に一対一が分らなければ，正しい意味での人間の尊厳などということは分らず，そういう人々の尊敬というものの中には，何か偶像崇拝的なものがあるように思われます。「天は人の上に人をつくらず，人の下に人をつくらず」という言葉の中には，考えれば考える程深いものを含んでおりますが，明治の初期に既にこういうことを言っておられる福沢諭吉のずばぬけた偉大さを今更の如く思わずにはおられません。

ガバナー公式訪問中，もう一つ大きく心にどしんと来たものがありますが，それは法隆寺を訪ねた時，聖徳太子についての感慨であります。聖徳太子は，かねてから私も最も偉大な日本人の一人として尊敬もし，多少は読んだりもしていたのですが，従来はどうも仏教的な立場が主になっておりました。しかしこの度は，私は電気にでも打たれたように実感を以て日本文化全般の偉大な先覚者としての太子を感じとることが出来ました。たしかに太子は日本人としては稀有な大型の人で，外来文化をただ単なる模

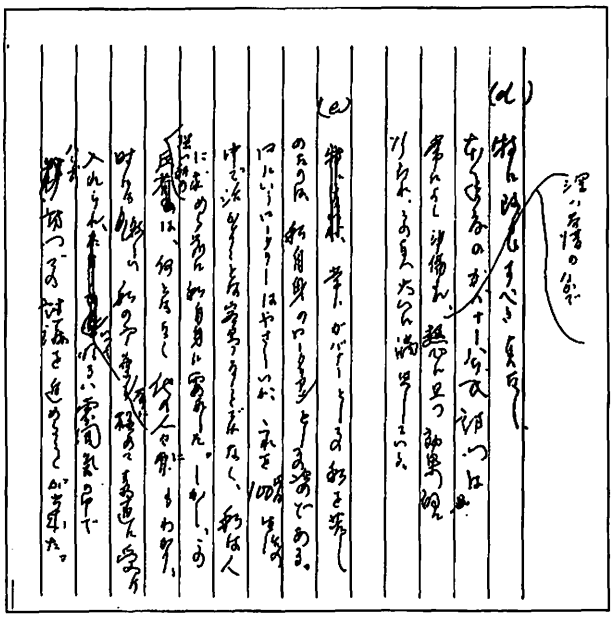
倣として取り入れたのではなく，これに日本の魂を入れ，そこに新しいものを創造されたのであります。私はガバナーとして時には自分でもよく分らぬことをしゃべっている自分が恥ずかしく，何か太子が強く私に「よい加減なことを言うな」と呼びかけておられるような気がしてなりませんでした。

何をおいても楽しい例会を持つということは，ロータリー・クラブに取って，先ず最も大切なことでありましょう。もう40年も昔になりますが，パリーでこんな思い出があります。下宿の食堂で，フランス語を一語も知らぬアメリカの老夫婦と，かなりフランス語のできる日本人の一群とに出会い，老夫婦の方がむしろすなおにおおらかに食堂の空気を和らげていたことを見て驚きました。だからたとえば外国でも言葉を知るとか，知らぬとかということよりも，もっと大切な根源的なものがあるように思うのです。それは身についた血のかよう社会的感覚というか，おおらかな人間的の豊かさではないでしょうか。

私は口癖のように，何処でも申しあげて来ましたが，やはり我々日本のロータリアンに取って最も大切なことは，ものわかりがよくて，ものにこだわらず，奉仕を理想とする〈おとな〉になりたいということでしょう。つい近頃までは直接世界のことなど話題にのぼらなかった日本の田舎で，この頃は外国から来る研究グループの話などをしているのを聞くと，日本も成長したものだなと思います。

ロータリー年度の後半期はどうぞきびしいクラブの自己批判とそれに基く明日への成長の時にして下さい。

この原稿は、一九六八年に平澤ガバナーが、ファイナル・レポート(英文)としてRIに報告された原稿からの抜粋です。



(d)
特に改良すべき点なし。
本年度のガバナー公式訪問は常によく準備され、深い友情のなかで熱心に且つ効果的に行われ、この点大いに満足している。

(e)
常にガバナーとしての私を苦しめたのは、私自身のロータリアンとしての姿である。ロにいうロータリーはやさしいが、これを100%生活の中で活かすことは容易なことではなく、私は人に、求める前に私自身に要求した。しかし、この強い私の反省は、何とはなく他の人々にもわかり、時には激しい私の言葉も常に極めて素直に受け入れられ、いつも明るい雰囲気の中で公式訪問での討議を進めることが出来た。

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 11 April 15. 1968　　ガバナー月信　第11信（昭和43年4月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平　澤　　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

第522区からの研究グループを迎えて

各位にはいつもながら世界社会奉仕や研究グループの仕事などに熱心な御協力を賜わり，厚く御礼申上げます。先ずもって御同慶にたえないのは，世界社会奉仕の仕事が極めて短時間に，立派に実を結んだことでありますが，これはひとえに各位の印度救癩事業に対する深い御理解の賜と存じ，感謝のほかはございません。

次に嬉しいことは，去る3月18日予定の如く伊丹空港にカリフォルニアの第522区からの研究グルー

<写真は来日前，第522区ガバナーAlan D. Christensen（今回不参）とともに撮られたもので，団長のBill Rogersは同地区のパスト・ガバナーです。>

* 前列左より
Jeff Meeks.
Bill Rogers.
(Rotary Leader)
Bob Meyer.

* 後列左より
Bruce Rowlison.
Carl Buxman.
Alan D. Christensen.
(District Governor)
Charles Bloch.
James West.

プの一行７名を迎えたことであります。まさに「朋有り，遠方より来る，亦楽しからずや」という感じであります。空港では研究グループ委員会の委員長絹川淌君を始め奥村竜三君，酒井美智男君，不破治君，井狩弥治郎君等の諸氏，大阪ロータリー・クラブの塚本義隆会長，昨年日本から訪問した研究グループの諸氏や御婦人など多数の方々が出迎えされ，原田ガバナー・ノミニーも私も参りました。いかにもロータリーらしく打ちとけた明かるい出迎えで賑やかでした。一行は直ちに空港から自動車で京都に向い，京都市では先ず京都新聞社に立ちより，簡単に京都訪問の挨拶をし，５時頃パレスサイド・ホテルに到着，殆んど休む暇もなく６時から祇園の「やさか」で第365区の歓迎レセプションに出席，初対面にもかかわらず，十年の知己の如き親しさで，楽しいひと時を持つことが出来ました。

研究グループの各個人についてはここでは触れませんが，何れ一行は各地域に参ることですので，その必要もありますまい。ここではただ短時日の間にうけた二，三の印象について述べるにとどめます。

一行は団長以下まことにすばらしい人々です。第522区で十分厳選された人々だから，さだめしよい人々だろうとはかねて思っておりましたが，嬉しいことに，それはさらに予想以上で短時日の間にすっかりわれわれを魅了いたしました。私はすぐに団長のウィリアム S. ロージャース，通称〈ビル〉とはすっかり仲よしになりました。人生の何もかもを知ったこの善意のおやじ，しかもゆるぎない信仰と真実とで貫かれているまじめなこのロータリアンは，本当によい団長だと思います。彼の目は若者への愛に満ちながらも，何ごとをも見逃さない鋭さを持っています。

一行６人の団員たちも，それぞれ個性を持ちながら，しかも実にすなおで，明るく，研究心が強く，まことに打てば響くというようなものを持っており，年令は25才から32才で何れも大学卒であり，高校の先生２人，実業家３人，牧師が１人で深い教養と鋭い批判力とを持っております。この５日間の若者たちの言葉の二，三を拾って見ましょう。

「日本へ来て驚いたことは，これほど日本が文化的に進んでおる国とは思わなかった。今われわれは日本文化の古さと新しさ，そしてその不思議な融合を自らの眼で見，自らの耳で聞いて正直のところ全く驚いている。」「こういう日本の状態を一人でも多くのアメリカ人に見せたいと思う。こういうことを教養のあるアメリカ人が知ったら，日本に対するアメリカ人一般の考え方は大いに変るだろう。いや，ただ日本に対してのみならず，アジア全般に対しても変るだろう。」「同質の文化だけを見ていたのでは気のつかぬような色々のことが心に浮んでくる。若い間に歴史や習慣を異にする他国を見ることが，どれほど重要かということが少し分ったような気がする。」「どこへ行っても，日本の建物がこわされて西洋式にたてかえられているが，これは一体どうしたことか。我々にはどうも合点が行かぬ点がある。」「表面だけを見て，ものを判断してはならぬ。真の理解には表面的の理解だけでは駄目で，ものの内面とか，民族の心理などまでも知って見ねばならぬ。」

これらの発言でわかることは，一行の若者たちが，ある面ではきびしすぎる程の批判と内省とを以て，鋭くものを見ていることであります。恐らく彼等の鋭い観察は京都でやっとわかったと思ったような現象が，ほかの土地へ行くと再び分からなくなるようなこともあるかと思いますが，どうぞそういう時は出来るだけ親切に説明してあげて下さい。

異なる文明や文化を理解することは決して容易ではありません。世界的の歴史家 A. J. トインビー博士は＜異文明間の邂逅接触＞のなかで述べておられますが，まことに傾聴に値します。

「われわれが文明とよぶ人間歴史の発展段階がはじまって以来今日まで，時代を同じくしていた，いくつかの異なった文明のあいだに邂逅接触 (Encounter) という歴史的現象がつねに見られる。もろもろの局地的な文明は，みな，それぞれの発生地とそれぞれの郷土とをもったものではあるが，それらは全

部，同じ地球の表面を生存の場所とし，自分の領分を拡大しようとし，また生き方を異にしている人びとのあいだに自分の勢力を拡大しようとする傾向をもっている。そのために文明の黎明よりいままで絶えず，局地的諸文明のあいだに邂逅接触が行われて来た。そういう邂逅接触のあり方は親友的だったり，敵対的だったり，平和的だったり，暴力的だったり，多種多様であった。そのあり方がどんな性質のものであっても，そういう邂逅接触は，ほとんどつねに多くの実を結んだ。そのような異文明間の邂逅接触の経験は，技術とか戦争とか，政治，経済，建築，芸術，宗教とか言った，数多くのさまざまな活動分野における創造行為の主たる刺激剤の一つとなったのである。（トインビー歴史の教訓，松本重治編訳，岩波書店）

たしかにトインビー博士のこの観察は正しかろう。しかし，ロータリーの考え方と行動とは独特で，異なる文明の邂逅接触もつねに国際的な友情と理解とを以て行われ，あくまでも平和的でありました。恐らくロータリーの活動の中には，ただ自然にまかせたのでは，とかく異文明間の邂逅接触には不幸な形がとられ易いので，そういうことにならぬようにとの祈りもあったことでありましょう。研究グループなどもそうした国際理解の理想具体化の一つとも見られましょう。

研究グループの諸君はみな卒直の方々ばかりですので，各クラブでもどうぞあまり日本的の遠慮をしないで下さい。一行のロータリー・クラブ訪問には，どこでも親切にして戴き，一行も心から喜こんでおります。ありがたいことですが，しかし，あまり大事にしすぎて一行に固さを与えてもいけませんので，あるがままに各位の友情と親切で気楽におもてなし下さい。ロータリーにはロータリーの心の言葉があり，団長はじめ一行の人々は，みなすばらしい目と頭とを持っておられますから，各位の心はそのまま団員一同にも通じることと存じます。

私は昨年わが第365区からの研究グループの一行がアメリカから帰った時，短時日の間に，よくもこれだけ多くのものを学びとって来たものだと，その素晴しい成長ぶりに全く感心いたしました。しかし，この度第522区からの研究グループの一行を見て更に感歎を新たにし，大きな期待をかけております。

たしかに人類の将来にとって若者ほど尊く，大切なものはないでしょう。それは日本にとっても，アメリカにとっても，否全世界にとっても同じことでありましょう。国際的な正しい理解と深い友情とには，何よりも若人の柔軟さと誠実さとが望ましいのです。国際ロータリーが近年，研究グループとか，インターアクトとか，更にはローターアクト等に格別の力を注いでいるのも，その目指すところは，そういうところにあると存じます。

どうぞ皆さま，第522区からの研究グループ一行を心から迎えて，しかも，できるだけ気楽に，一行が所期の目的を達成できるよう御協力下さい。一行の訪問先クラブからはいろいろ有益な御感想など戴きつつありますが，これらについては追って御報告申したいと思っております。

花の春は今やまさにたけなわであります。初夏の新緑ももう遠くはありません。美と光のシーズン，切に各位の御自愛をお祈り申します。

第五二二区の研究グループと交歓

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 12 May 15. 1968　　ガバナー月信　第12信（昭和43年5月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

ロータリーと青少年問題

目もまばゆいばかりの新緑となりましたが，各位にはロータリー活動のためにいよいよご精進のことと存じます。私もあと残された僅かばかりのロータリー年度のなかで，てんてこ舞しているような状態でございます。ちょっとここ1ケ月の主な行事だけを拾って見ても，4月2日の京都山科ロータリー・クラブの創立総会，4月9日の大阪での万博委員会，4月20日の京都教育大学附属高等学校インターアクト・クラブの認証状伝達式，4月21日の大和郡山クラブの創立5周年式典，4月22日の地区世界社会奉仕事業としての印度救癩事業病棟寄金の贈呈式，4月27日の大阪天満橋クラブの認証状伝達式，4月28日の大津におけるR.I.第522区からのグループ・スタディ・チームの会合，5月1日の信州飯田ロータリー・クラブ第600回例会の記念式での講演等いろいろありますが，しかし，これらのどれ一つを取って見ても，ロータリーの行事は感激的で，楽しいものばかりであり，いわばガバナーはこうした雰囲気の中で活力を与えられ，教育されているとも言われましょう。

この度は，この地区としては第4のインターアクト・クラブたる京都教育大学附属高校インターアクト・クラブの認証状伝達式もありましたので，ロータリーと青少年というようなことについて考えて見たいと思います。この問題は，更に高い立場から見ますと，ロータリーと教育という問題の一つとも見られましょう。ロータリーと教育という風な表現はやや固すぎるためか，あまり用いられないようですが，しかし，情報委員会——Information Committee——を教育委員会などと呼んでおるところもあるように，インフォメーションもたしかに広い意味では教育の一部と考えて差支えなく，ロータリーの組織そのものがあたたかい友情のなかで，奉仕と国際理解とをめざしている教育的組織だと考えても大過

はなかろうかと存じます。元来，長所をひき出して人間を伸ばそうという教育そのものをあまり固いものだと考えるところに無理があるのであって，その理想とするところは，むしろあかるい環境，よい社会をつくりあげて，その中で育てば，おのずからよい人間が出来あがるというようなところにあるのであろうと思われます。しかし，実際にそういう社会や環境をつくりあげることは決して容易ではなく，ロータリーのいう広義の社会奉仕も，その重点は窮極的にはそういうところにあるのではないでしょうか。

ロータリーでは従来から青少年問題を重視してきましたが，しかもその重要性は年ごとに加わるばかりであります。たとえばロータリー財団奨学生は従来は大学院在学生だけであったものが，新しく大学在学生にもその範囲がひろげられたとか，研究グループ交換が年ごとに活発になり，現にわが第365区でもカリフォルニアの第522区から目下団長以下7名のチームをお招きしているとか，青少年の国際的交換として6月から8月まで米国と2名の高校生の交換を行うなどということは，みなその現われであります。

こういう構想の中でも，インターアクト・クラブの結成は国際ロータリーの企画としても特筆すべきもので，ご承知の如く，インターアクト・クラブは大学課程へ進学前の1～3学年に在学の男女学生によって作られ，奉仕と国際理解の精神を養うことを目的としたものであります。日本ではちょうど高校の学生に相当するもので，学校中心でも，学校とは無関係に地域中心につくってもよいのでありますが，会員は従来正式には男子学生のみに限られていたのが，今後は過半数を超えない限り，女子学生の参加もよいことになり，インターアクトの結成もよほど楽になることと存じます。しかし，日本でも他の地区ではインターアクト・クラブの結成も盛んで，第370区は70クラブ，第357区は22クラブ，第358区と第369区は各々19クラブ(昨年11月末現在)等々よい成績をあげておられるのでありますが，残念ながらわが第365区は，いろいろの事情があるとはいい，この点では大いにおくれております。さいわい，この度，関係各位のなみなみならぬ御骨折りにより，京都教育大学附属高校インターアクト・クラブの結成と，これにつづく奈良市立一条高校インターアクト・クラブ――創立総会をすませて目下R.I.に認証申請中――が結成され，はずかしいことながら，これでやっとこの地区にも5つのインターアクト・クラブが成立して，インターアクト・クラブのガバナーを選出することができるようになりました。インターアクト・クラブの理想は，奉仕と国際理解で，ロータリーとその目的を一にするもので，たえずスポンサー・クラブと連絡をとり，その助言をうけるべき立場にはありますが，しかし，ロータリー・クラブそのものではなく，その目的に反しない限り，自主的に運営さるべきものであります。この奉仕と国際理解を目ざす自主的実践の中にこそ，新しい時代の若人の成長があると存じます。奉仕とか，国際理解とかいうことは，言葉の上だけならば，ロータリアンは耳にタコが出来るほど聞いておりますが，しかし，私自身顧みても，それほどからだにはしみついておらず，必ずしもわれわれの日常生活のすみずみにまで浸透しているとは言われません。世界が日毎に狭くなりつつあることは，われわれにもよくわかるのですが，それでもまだわれわれには世界はかなり広く思われます。戦前日本では社会は家庭と国家との間に圧縮されて，欧米諸国で理解されて来たほど身近かのものとしてじかに肌身では感じられなかったようです。こういう日本の社会状況の中ではインターアクト・クラブなどの重要性も，あまりピンとこないかも知れませんが，しかし，人類への奉仕を目ざすわれわれロータリアンは，それだけ，よりよき人類の将来のために，もっと，もっと，こういう仕事に眼を向けねばならぬと存じます。

こういう方面の仕事で，もう一つ新しいR.I.の企画として特に目だつことは，ローターアクト・クラブの提唱です。このローターアクトは，インターアクト・クラブとロータリー・クラブとの間をうずめるいわゆる Young Adult のための企画で，提唱クラブの地域内に居住する就職または勉強中の17～25才までの男女を対象とし，男性が半数またはそれ以上でなければならないことになっております。その目的はやはり奉仕と国際理解を主とするもので，インターアクト・クラブと同じく，学校(大学)単位でも，またそれとは無関係に地域単位でもよいことになっております。いわゆる Young Adult を対象と

したこのローターアクト・クラブの計画もR.I.で長い検討をへて始めて実行に移されたものと聞いていますが，こういう計画を通じて，しみじみ感じることは，いかにR.I.が世界の現在のみならず，将来に向っても着実に，その理想の具体化に真剣にとり組みつつあるかということがわかります。インターアクトとか，ローターアクトとかいうようなものは，ただ近視的，現実的に目前しか見ないようなものには充分にその真意を把握することはむずかしく，実はかく申す私自身もその例外ではないようですが，まあ多少はせのびをしても，一日も早くそういうインターアクトとか，ローターアクトなどのなかにある息の長い理想とか国際性とかいうものに，深く思をいたし，こういう感覚が本当に身についたロータリアンになりたいものであります。

青少年への奉仕の問題はまことに広く，深く何もインターアクトやローターアクトで始まったことではなく，R.I.としても既に久しく社会奉仕部門などで，その重要性を強調して来たのでありますが，地域社会に密着した組織的な企画としては，いろいろ不充分な点がありましたので，近年インターアクトの結成となり，更にローターアクトと進んで来たのであり，更に各方面の経験から女子をも正会員に加入せしめなければ無理があるということで，この度始めて正式に女子の加入も認められることになったのであります。久しく関心を持ちながらも，まだR.I.としても青少年への奉仕の歴史が浅いことは，手続要覧の中のその関連事項を見ても，インターアクトの項がその主要部をしめていることなどからもよく分かります。私がここで，特にインターアクトとか，ローターアクトのことを強調するのは，何も新しいものに飛びつくというようなことからではなく，R.I.が明日の世界の奉仕に如何に苦心し，如何に熱心であるかということを示して，われわれ日本のロータリアンも島国的な偏狭且つ近視的なくさ味をすてて，R.I.のこの前向きの姿勢におくれをとりたくないと思うからであります。

しかし，同時にここで一言触れておきたいことは，青少年問題の解決は決してロータリーの独占ではなく，この問題には多方面の活躍があるということであります。たとえばボーイ・スカウトやガール・スカウトなどのスカウト運動，国際ユースホステルの運動，国際赤十字青少年の運動等は，何れも広く考えれば，直接または間接に自己の訓練，社会奉仕または国際理解などを目ざしているもので共通点も多く，健全な青少年の育成には手を握りあってよい組織であり，また国際的な奉仕組織としても決してロータリーだけが唯一のものではなく，既にわがロータリーの創始者，ポール・ハリスも説く如く，ライオンズやキワニスなども手を握って，堂々とそれぞれわが道を歩きながらもよりよき人類社会の建設に大乗的に協力してよいものだと存じます。

なお，ここに青少年問題を論ずるに当って，どうしても忘れてはならぬものに，ロータリー以前の問題があります。それは青少年の教育における親の責任であり，家庭の責任であります。近頃の日本ではあまりに学校教育に力を入れすぎて，入学試験などには本人のみならず，家庭全体が血眼になりすぎて，何よりも大切で，しかも教育の最も基礎である家庭教育がとかく忘れられがちになっております。しかし，子供の教育にとっては，家庭ほど重要なものはなく，それは教育の基礎の中の基礎であり，人間の真の教育は決して学校で始められるものではなく，就学前の家庭そのものに始められるものであり，この意味では家庭こそは一国の基礎であり，人類社会の基礎だといわねばなりません。「三つ子の魂百まで」と俗言にもいいますが，正にその通りで，人間の基本的な性格，たとえば誠実，努力，親切，忍耐などというようなことは，意識的に口で教えられるというよりも，むしろその芽は家庭で教育以前の問題として，いつとはなしに父母などの日々の行動を通じて自然に子供がまねをしながら身につけるものであります。父や母が自らの過去も現在も忘れて，自らやったこともなければ，また出来もしなかったことや，そして最も悪いことは現在も自ら真剣にやろうと思ってもいないようなことを，ただ口先で子供に説教しても，決してよい効果を持つものではなく，時にはむしろ逆効果さえもたらすものであります。私には現在６人の子供と11人の孫がありますが，この年頃になって，しみじみ思うことは，われわれ夫婦が過去におかしたか，あるいはおかすおそれのあった以外の過ちをおかしたようなものは子にも孫にも１人もなく，どうも子供の過ちは即ち私ども肉身の中にあるものの現れだと言っても過言ではな

いようであります。時には子供の行為に驚いたり，あきれたりするようなこともありますが，それとても静かに考えると，若き日の私どものある一面でしかないのです。

要するに子供の家庭教育では親自身が持たないようなことや，また持つべく真剣な努力をしないようなことを，ただ口先で教えてもだめで，子供をよく育てようということなら，先ず親自身がまじめに考え，誠実に行動することだと存じます。そして規律正しい生活の中で甘やかさず，目のついた愛情の中できびしいけじめをつけ，子供を信じて，決して子供がやけくそを起さずに希望を以て生きられるようにすることだと信じます。家庭教育は言葉ではなく，親の行動がもとになるのです。いや，これは家庭教育だけではなく，恐らく教育一般においてそうでありましょう。

公式訪問の際など青少年の問題を聞いて見ると，どうもお座なりのものが多うございますが，これは一つには問題があまりにも広く，深いからだと思います。非行少年の防止，交通災害の予防，不良少年の善導等，いろいろとあげられますが，思うに私は青少年対策の最も重要なことは，先づ以てロータリアン自身が家庭で，その子女を立派に育てることが先決問題であり，この家庭における青少年教育の経験がそのまま地域社会での青少年指導の基礎となると存じます。何ごともそうでしょうが，特に青少年の指導には，ただの口先きではなく，心からの真実さと，現実社会の正しい把握が必要であります。現在の日本を見て，特に淋しいことは働く青少年に対する配慮の乏しさでありますが，こういう方面には各クラブでも格別のご配慮を賜わりたいと存じます。この意味では奈良クラブの働く青少年のためのスポーツ団結成などは特筆に値すると存じます。

人類の運命は，個人のそれを超越した永遠のものであります。われわれ個人はこの地上ではひと時の旅人で長生きをしてもせいぜい百才ぐらいで地上の生命を終りますが，それをうけついで人類社会を前進せしめるものは，われわれにつづく次の世代であります。こうした見地からは恐らく若人をよりよく伸ばすこと，そしてそれによって次の世代をよりよくすることほど素晴しい仕事はないでしょう。若もの，それはおとなを小さくしただけのものではなく，無限の可能性をその中に潜存し，やりようによってはいかほどにも伸び得る神秘をその中に蔵した不思議な存在であります。R.I.が大きな夢を具体的に実現しようとして，インターアクトやローターアクトを結成していることも，こうした角度から眺めると，実に素晴しいことだと言わねばなりません。ロータリーは大望を描きながら，社会奉仕に生きようという組織です。陽光に輝く新緑のように，われわれロータリアンもロータリーの情熱にもえましょう。

十月十日
京都西京高校のインターアクト（西R・C・）

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 13 June 15. 1968　　ガバナー月信　第13信（昭和43年6月15日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤　興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

ロータリーの歩み

この間あるパスト・ガバナーから月信受け取りの御礼に「いよいよガバナーの仕事もホームストレッチにはいりましたネ」というお言葉がありました。辞書を引いて見ると，Home stretch というのは，本来は決勝点の直線コースのことだそうですが，転じて仕事の最後の部分などというような意味にも用いられるとのことであります。「いよいよホームストレッチにはいりましたネ」というお言葉のなかには，かつてガバナーとしての御体験を通じての御同情と御激励のようなものがあるようであります。

仰せの如く，ガバナーとしての私の仕事はたしかに終りに近づき，月信もこの号を除いてあと一回となり，感慨無量のものがあります。この仕事が終るということは，ほんとうに私にはうれしいことであり，またありがたいことであります。これは恐らく私だけではなく，各ロータリー・クラブの役員理事一同についても御同様のことと存じます。

ロータリーの仕事は，それ自体としては楽しいことでありますが，油断の出来ないことは，ロータリーはたえず前進しつづけているということであります。ロータリーは，仕事の質においても，量においても決して一点に停止したり固定したりすることなく，たえずその感覚において，思索において成長をつづけております。ただ過去のまねをしておるだけならば，過去のあり方や，考え方だけで間にあうでしょうが，たえず考えながらその理想の実現に前進するロータリーでは，何よりも先ず新しい事態に対する正しい理解と人間的生長が必要であり，そのことはまたロータリアンの人間的幸福にも貢献することと思います。

国際ロータリーの今日までの足跡を大観して，つくづく感心することは，そのすばらしい生長振りで

あります。1905年２月23日に始めて集まった Paul P. Harris, Gustavus Loehr, Hiram Shorey, Silvester Schiel なども恐らく僅か63年の間に，ロータリーが会員約63万人，参加国約140ケ国というような大きな組織になろうとは思わなかったでしょう。もともとロータリーはポール・ハリスの優しい頭脳と孤独の心に根ざしたものであります。ロータリーは，もし人間がただ機械的にビジネスの面からだけではなく，もっと人間的に親しく深く交わることが出来たら，はげしい生存競争や混乱の中ででも，人生をもっと明かるく楽しくできようとの素朴な夢から生れたものであります。したがって始めはむしろ友情と相互扶助が目的の主なもので，会員間の関係も自然で，無理や行き過ぎなどはなく，会員の選択にも学力とか，社会的地位などにあまり捉われず，共通の理想に対する情熱と人柄とがすべてであったようであります。ロータリーの４人の創立会員のうちで，大学教育をうけたものは弁護士のポール・ハリスだけでありましたが，しかし，そんなことには無頓着に石炭商のシルベスターが第一次の会長に選ばれております。鉱山技師のローアと洋服生地商のショーレイは何れも火の玉のような人間で，もしこの２人がおらねばロータリーの発足がおくれたのではないかと思われるくらいでありますが，２人とも間もなくその事業が面白く行かず，会員を辞退しておりますが，こういう創立当時の事情は，いろいろと今日のロータリーのあり方にも示唆するものがあるようであります。私がここで言いたいのは，決してロータリーがその創立当時，よい加減に会員を選んだということではなく，むしろその逆で，創立当初にはいかに人選が自然で素朴であったかということであります。

文化社会は一面組織化であり，組織化ということは望ましいことでありますが，へたをすると血のかよった素朴さを忘れることになりますので，やはり心すべきものがあると存じます。綱領第２の第２項には，「総ての有用な職業の価値あることの認識」と書いてありますが，特に日本では世界的の眼で社会を見，職業を見て，世界におくれることなく，あらゆる職業に対する認識をより深くしたいものであります。

ロータリーは前述の如く，創立当初においては友情と会員の相互扶助などに重点がおかれておりましたが，ただそれだけでは利己的にすぎるというような声が起り，会員の鋭い反省もあり，間もなく奉仕ということに重点をおき，これを以てロータリーの理想とするようになりました。この奉仕も始めはまず最も手近のものとして各自の職業を通じてのいわゆる職業奉仕ということになり，「超我の奉仕」とか，「最もよく奉仕するものが最も多く報いられる」とか，「４ツのテスト」などがロータリーの標語となりました。しかし，ロータリーの奉仕は，ただ自己の職業を通じての職業奉仕だけでは狭すぎるので，より広い地域社会の全面に亘ってのいわゆる社会奉仕に展開し，この社会奉仕は国家社会への奉仕を越えて今や世界社会奉仕にまで生長しつつあります。一方クラブが大きくなるにつれ，クラブの自家運営をするための世話も必要となり，ここに世話女房的ないわゆるクラブ奉仕が生れました。このクラブ奉仕によるゆるぎないクラブ内の活動があり，その基盤に立って始めて主として対外的な他の領域の奉仕も出来るわけであります。

国際ロータリーが今日の発展を見るに至りましたのは，もとより決して１人や２人の力ではなく，大きく見れば恐らく奉仕を目ざす世界の全ロータリアンの力でありましょうが，しかし，特に奉仕に徹した偉大な先輩たちに負うところが多いのであります。そしてそういう偉大な先輩たちのなかでも，特にすべてのロータリアンが忘れてはならぬ人は， Chesley R. Perry でありましょう。1960年２月彼が死亡した時．ポール・ハリスは「若し真実私が設計者と呼ばれ得るとすれば．チエスはたしかにロータリーの建築者と称ぶことができましょう」と言いましたが，彼は正にそういう人であります。ペリーは1942年70才で退くまで，前後実に32年間ロータリーの事務総長の職にありました。その後，彼は名誉事務総長とか，国際ロータリー会長などにもすすめられましたが，彼は悉くこういうものを辞退して，最後まで彼の所属ロータリー・クラブの一員に踏みとどまりました。恐らくペリーなくしては，これほど急速な国際ロータリーの拡充発展は考えられなかったでしょう。彼は１人のロータリアンとして偉大でありましたが，１人の人間としてはより偉大でありました。国際ロータリーの大きな骨組で彼が頭や手を全然

触れなかったものは恐らく一つもなかろうと言っても過言ではなく，彼の目は深く，広くロータリーを見，ロータリーを愛しておりました。彼は一面きびしい人間でありましたが，それでいて決してただのつめたい理屈屋ではなく，真に規則を生かして使える人だったと言われています。ポール・ハリスと共に，ロータリーのつづく限りチエスレー・ペリーの名は消えないでありましょう。

ロータリーに限らず，ある一つの組織が発展するうしろには，必ずそこには単なる理想や原理だけではなく，それを動かす人間がおります。邁進するところには，必ず道は開けます。国際ロータリーの今日の発展も偶然ではなく，そのうしろに歴代 R. I. 会長や役員諸氏の無私の奉仕があることを忘れてはなりますまい。

言うまでもなく国際ロータリーの原則は，ロータリー綱領に示されていますが，具体的の活動はその時々の国際ロータリーの会長によって示されるのであります。ここ数年来の国際ロータリーの活動を見て特に気づくことは，ロータリーの内的及び外的拡大，ロータリー精神の普及とこれを次代にうけつぐための各種の青少年教育，世界を身近かに感じて，その幸不幸を共にしようといういわゆる世界社会奉仕などに重点がおかれているということであります。ロータリーと青少年教育の関係については前号にも触れましたが，各クラブにとっての最も具体的な問題としては，インターアクトやローターアクトなどの結成があります。こういう問題はただ目新しい問題にとりつくということからではなく，もっとひろく遠く世界の将来，日本の将来を見るという角度から，じっくりと努力せねばならぬ問題だと存じます。世界社会奉仕についても，全く同じことが言われましょう。実はこういう問題になると，私自身が島国的時代の中に育ったためか，頭では理解が出来ても，まだからだでは何の抵抗もなくうけ入れるというほどには成長しておらず，わかったようなことをいうことはまことに恐縮に存じます。しかし，頭ではわかりながら，まだからだではすなおに感じとれないという私の中にあるこの矛盾とはがゆさはますます問題の重要性を私に迫るのであります。こうした私のロータリーアンとしての未熟の自覚が，たえず私自身によりよきロータリアンを要求しますが，こうしたことがあるいは私の言葉をいつも固いものにしているかも知れません。

ロータリーの拡大は昨日今日の問題ではありませんが，本年度は特にお骨折りを戴いて三ツの新クラブ，即ち大阪天満橋ロータリー・クラブ，大東ロータリー・クラブ及び京都山科ロータリー・クラブができて，大いに感謝しております。新クラブの結成については，会員の選択，地域の割譲など大小いろいろ骨の折れることが多いのでありますが，本当にスポンサー・クラブはよくやって戴きました。新クラブの結成は決してただ外に新しいクラブが出来るというだけのことではなく，そのうしろにはスポンサー・クラブや協力クラブなどのロータリー的理解と人間的成長があるのであり，その意味ではこの外部拡大は実は同時に真の意味における内部拡大をも蔵しておるのであります。

ただ規則を覚えるだけではなく，生活の中にロータリーを生かして一筋の，しかも限りないロータリーの道をどこまでも，どこまでも歩き続けましょう。

二月六日
峰山R・C・公式訪問

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 13 〈Special Issue〉
June 25, 1968

ガバナー月信 第13信 〈特集〉
(昭和43年6月25日)

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平 澤 興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

第522区からの研究グループ交換チームを送って

カリフォルニアからの研究グループの一行が帰ってから，もうやがて2ケ月になります。ビル団長以下6名の若ものは，皆すばらしい人々ばかりで，彼等の帰国以来，何かわれわれは手の中のものを落したようなわびしさを感じております。この度の第522区からの一行は昨年3月から5月にかけて世話になった当地区からの一行に対する交換チームで，本年3月から5月の2ケ月に亘って本地区の各地をまわられたのですが，どこでも温かい歓迎を受けられ，ビル団長以下一行も極めて満足して帰られました。これはわが地区としても，誠に嬉しいことであります。これで第522区と，わが第365区との今回の研究グループ交換計画は一応終ったわけでありますが，その具体的経過については，どうぞ，この計画について並々ならぬ御骨折を賜わった研究グループ交換委員会の絹川委員長の御報告をご覧願います。

私は，今回の研究グループ交換がこれで，一応終ったと申しましたが，わざわざ一応と言いましたのは，この研究グループ交換の影響には大別して2種，即ち研修の間，或はその直後のものと，更に長く尾をひく永続的のものとがあると思うからであります。これはカリフォルニアから来られた一行についても，また昨年この地区からカリフォルニアを訪れた一行についても言われることで，若い日の外国訪問の真の消化と醗酵には，長い歳月を要するものであります。

たとえば私自身について見ても，私が初めてスイスを訪ねたのはもう40年にもなるのでありますが，そこでの1年間の留学はまことに意義深く，未だに私はその時の収獲を完全には消化をし，醗酵せしめておらぬようであります。当時の直接の目的はチューリッヒ大学脳解剖学研究所における神経学の研究

でありましたが，実は私はそこに思わざる拾いものをしたのであります。即ち私はそこで，ただ神経学や，スイスについて学んだのみならず，驚いたことには，それよりも，日本自体について，さらには自己自身についてより深く学び，より深く考えさせられたのであります。どこを見ても日本人ばかりの日本では，それまで気づかなかった日本の欠点や長所が，はじめてしみじみと私にとって問題となり，思索の対象となりました。実はこの私自身についての深い思索こそが，私の最初の外国留学たるスイス留学の最大の収獲のようにさえ思われるのであります。それは，その後の私という人間の人間づくりにも，また学者としての成長にも根本的な要因となっておるようであるからであります。一般的に言って，異なる自然や環境，異なる歴史や遺伝質の下で展開される文化や人間の姿が違うのはむしろ当然ですが，しかし，それだけにそれぞれ本質を持っており，それらを正しく理解するには，あくまでも先入観をすてた深い考察と善意とが必要であります。そうした時，はじめてわれわれは，しばしば表面的には違っておるようで，実はむしろ本質的には同じであったり，あるいは逆に一見同じようで，実はむしろ内面的には違うものがあることなどを発見するのであります。恐らくロータリーの研究グループ交換などにも，きっと，そういう経験がありましょう。さればこそ，自らの目，自らの耳で学ぶ研究グループ交換計画が，ますますその重要性をますことにもなると思うのであります。

ビル団長以下団員のすべてが無事に楽しく，研修の目的を達せられたことは実に嬉しいことであります。一行はそれぞれ各地で，生涯忘れ得ぬ友情を得て帰られた模様であります。そして今は第522区の各地で，あらゆる機会を利用して，この度の研修旅行について，熱のこもった精一杯の善意の報告をしておられるようであります。何としても若ものの純情は尊いものです。一方では鋭い批判を持ちながら，他方ではとろけるような讃美ができるのです。各国の若ものの間における囚われることのないこの全人的な讃美と思索こそは，明日の人類の歩みにとって最も望ましく，且つ最もたのもしいものでありましょう。この点ではこの度の研究グループの米国からの一行についても，また日本からの一行についても，等しく大きな期待が持てるものと，私は固く信じております。

もとよりこの研究グループ交換は，わが地区については，最初のことで，こまかな点については，将来改善を要すべきものがいろいろあると存じますが，これらについては委員会の報告でも触れられておりますので，ここでは繰り返しません。

最後に私はこの研究グループ交換計画に御尽力を賜わった第522区及び第365区のパストガバナーやロータリアンのすべてに対し，なおまた直接この計画に対しお骨折を戴いたこの地区の研究グループ交換委員会や各地のロータリアンに対して心からの感謝を申しあげます。わけても，病気をおして頑ばりぬいて戴いた絹川清委員長，若ものにとけこんだ情熱の名リーダー奥村龍三君及び Willam S. "Bill" Rogers 君，終始当地区と相呼応して労を惜しまれなかった第522区ガバナー Alan D. Christensen 君等の印象は強烈であります。Alan や Bill のからだのぬくみは，きっと生涯私のからだからさめることはないでしょう。日ごとに狭くなりつつある世界が，肌と肌との直接の接触によって，ますます明るく，あたたかいものになることを念じてやみません。ほんとうに，ありがとうございました。

ROTARY INTERNATIONAL

GOVERNOR'S MONTHLY LETTER

OFFICE OF GOVERNOR OF DISTRICT NO. 365

KO HIRASAWA

% MIYAKO HOTEL
AWATAGUCHI HIGASHIYAMAKU
KYOTO, JAPAN

No. 14 June 30, 1968　　ガバナー月信　第14信（昭和43年6月30日）

第365区ロータリークラブ
会長 並びに 幹事殿

国際ロータリー第365区ガバナー
平澤興

ロータリアンとしての あなたの資格を 効果的に

Make your Rotary membership effective

ホッジス R.I. 会長

感謝と祈り

梅雨の晴れまに遠くの東山はかすみ，庭の緑も輝くばかりです。その中でひときわ目立つ白い花，それはクチナシです。去年私がガバナー月信の第1号を書いた時にも，妙に私はこのクチナシの花に心をひかれたのですが，もうあれから1年，私は同じ机で最後のガバナー月信を書いているのです。このガバナーの1年は長いようでもあり，またまるで一瞬のようでもあります。無我夢中で過したというのが偽らざる私の気持ちです。

今ガバナーを終るに当って，私の胸に浮かぶものは，一にも感謝，二にも感謝，三にも感謝でございます。会長，幹事をはじめ，理事，役員，会員のすべてに対し，心から厚く御礼申しあげます。わけても手足となってお助け下さった京都の地元クラブ，ホーム・クラブ，ガバナー補佐の方々の徹底した御奉仕には感謝の言葉もございません。

最後のガバナー月信はロータリー年度最後の6月分の出席報告などがありますので，新年度にまたがりますが，もう新年度が始まっておるのです。御承知の如く，ロータリーでは原則として，1年ごとに役員，理事，委員長などが変りますが，これはロータリーの硬直と老化を防ぎ，たえずロータリーに若さと創造性を与える意味において，まことにすばらしいことだと存じます。これはまた，ロータリアンが互に仕事を分かちあって，出来るだけ多くの会員がよくロータリーに通じるというような意味でも，大切なことだと思われます。

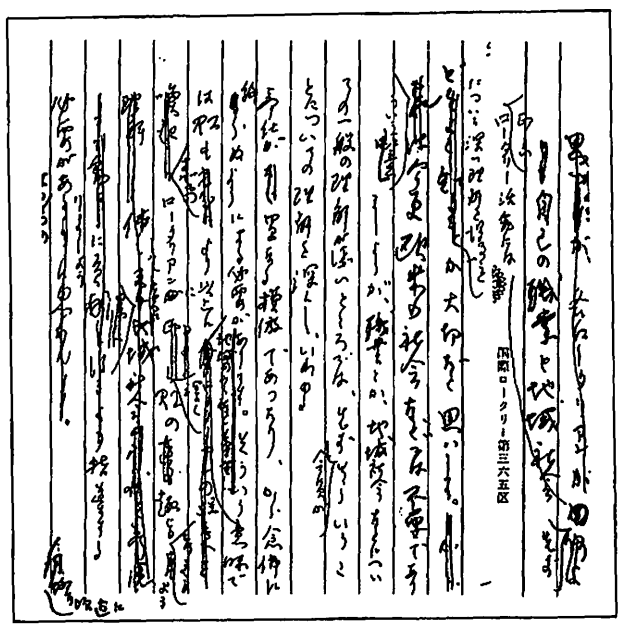
我々は立場が違っても，みな等しくロータリアンであり，年ごとにいろいろ情熱を燃やしてよりよきロータリアン，よりよき世界人になりたいものです。いくつになっても人生には余りにも学ぶべき事が

多うございますが，しかし，さればこそ人生は限りなく尊いものだと存じます。我々個人はいわば地上におけるひと時の旅人に過ぎませんが，しかしその努力のリレー的集積によって人類の歴史も文化もつくられて来たのであり，今後もそうであります。そういう角度から見ると，真の意味で完成された人間像などというものはなく，すべては相対的な当座的の人間像で，長い将来に亘っての完き人間像はいよいよこれからだと思われます。人間を特長づける精神活動の中枢たる大脳皮質の構造もそれを裏がきしており，大脳皮質を占める凡そ140億の神経細胞の全部を利用しつくした人間は，如何なる天才をも含めて過去5万年の人類の歴史の中にはまだ一人もないということであり，神経学的立場からは人類の将来にはまだまだまことに前途洋々たるものがあり，むしろ人類の将来はこれからだとも言われるのであります。

こういう人類の運命を考えると，殺しあうのではなく，互に奉仕の精神で助けあうロータリーの意義はいよいよ深くなります。一日も早く殺しあうような時代を終らせて，互に助けあう時代になるよう努力いたしましょう。そしてこの夢がただの言葉ではなく，之を日々の生活の中で生かすように頑張りましょう。祈りはあくまでも大きく，しかもこれを最も身近かのところから実行いたしましょう。

ありがとうございました。ありがとうございました。

この原稿は、一九六八年に平澤ガバナーが、ファイナル・レポート(英文)としてRIに報告された原稿からの抜粋です。



正しいロータリー活動には先ず自己の職業と地域社会について深い理解を得ることが大切だと思います。こういう注意は今更欧米の社会などでは不要でありましょうが、職業とか、地域社会などについての一般の理解が浅いところでは、先ず会員がそういうことについての理解を深くし、いわゆる奉仕が単なる模倣であったり、から念仏に終らぬようにする必要があります。そういう意味ではRIもより以上に地域の実情を尊重しすべてのロータリアンに深くRIの趣旨考えるよう指導する必要がありましょう。

平澤興先生の詞章

クラブ会報より

NO. 365 DISTRICT

京都東ロータリークラブ

例会日　金曜日

12. 30～1. 30
P. M.

会　場　都ホテル

楠部弥弌君作「色絵盒子」

Bulletin No. 34　April

「皇太子さまの御婚儀に列して」

平　沢　興

このたび私は，皇太子さまの御婚儀とその祝宴に参列する光栄を得，御盛儀をまのあたり拝して，ひとしお感激を深くいたしました。当日の模様は「ラヂオ」・「テレビ」などを通じて，くわしく報道されておりますのでこゝでは細かなことには触れません。たゞひときわ感銘の深かかつたのは，4月10日の賢所の儀の形容の出来ないおごそかな簡素さと，4月15日の祝宴の儀における喜びに満ちたろうろうたる陛下の御言葉でした。

4月10日の東京は一点の雲もない青空で，おそ咲きの八重桜と色とりどりの新緑とを背景にした賢所での古風ゆかしい静かな儀式は私共の血の中にとけこんでいる日本の古さを呼戻すかのように思はれました。4月15日の祝宴の儀での天皇さまの御言葉は今まで何度かお聞した陛下の御言葉の中でも，最も人間的な喜びと温かさとを含むものでありました。このたびの御儀ほど古さと新しさとが渾然と調和したものはありません。

真の新しさはこの古さを内蔵した土壌のうえに成長することを信じて疑いません。新しい日本は静かに，力強く伸びております。

年頭所感　世界家族を！　会員　平沢　興

新年おめでとう。お互に今年も無事にお正月を迎えることができたことは，何としても有難いことです。たとえ大きさから言えば，広大無辺のこの宇宙の中ではとるに足らぬ小さな人間であつても，その知能に於ては全宇宙の中で最もすばらしい人間という生命を持つて，50億になんなんとするこの地球の生命の一年を今年もまた楽しみ得るということは実際考えれば奇蹟そのものと申してよいでしよう。世の中にはいつの時代も明るい面もあれば，暗い面もあります。科学技術の進歩で地球がだんだん相対的に小さくなり，テレビやラジオなどで毎朝毎晩世界中の出来ごとが手に取るように分るものですから，本当に世の中がめまぐるしく，よいことも悪いことも余りに多過ぎるように思われます。しかし考えようによつては，人類の歴史始まつて以来こんなすばらしい時代は，未だ嘗つてなかつたといつても過言ではなく，文字通り世界は今や新しい宇宙時代にはいりつつあり，昨年も人間宇宙船の第１号，第２号が飛び，この地球も２時間足らずで１周できるようになりました。聞けば月旅行の成功もここ５，６年には間違なかろうとのことですが，本当にすばらしい時代だと思います。

宇宙のひろがりにしても従来は20億光年，即ち毎秒30万キロという光の速度を以てしても，その光が地球に達するまでには20億年もかかるという遠距離まで達するといわれていました。ところが昨年12月７日付けの読売新聞の「科学の目」の関口直甫氏の記事によれば，最近アメリカで，ある１つの星雲までの距離が45億光年であることが測定されたとのことである。もちろんこれは，今日まで人類が測定したことのある距離のうちで最大の距離であり，まことに宇宙の広大無辺の広さにはただただ呆れると申すほかはありません。しかも，恐らくこれは宇宙の最後的の広さというのではなく，科学の進歩によつて更にこの距離は拡大し得る可能性を持つているのです。

とにかく，これほど広い全宇宙の中で，大きさから言えばビールスよりも小さい人間が最高の智者だとすれば，人間も，もつともつと考えねばならぬと思います。既に科学は宇宙時代にはいりつつあるのに，その研究をする人間の立場が地球はおろか，それぞれ一国の利害や戦争の武器として宇宙的研究をやつておるとすれば，これほど矛盾に満ちたことはなく，またこれほど馬鹿らしいことはありません。これは決して一国だけでよく処理出来る問題ではなく，またそう考え出したからとてすぐ今日や明日で解決し得る問題でもありません。しかし，宇宙時代においてはせめてこの地球位は，全宇宙に比すれば一粒の砂にも及ばぬこの地球ぐらいは一つの家族とし他の天体に対して共同動作をとるようにならねばならぬことは人類に与えられた義務であります。人類は科学の進歩によつて自らを滅ぼすほど愚かではなかろうし，われわれもまたそうでないことを祈らずにはおられません。しかしそれにはそれだけの人間の努力がいります。最も広い意味で世界の人間教育が先ずこの方向に向かねばならぬでしよう。そして現実の政治も経済もこの方向に向かねばならぬでしよう。とにかく何よりも新しい時代に対処する徳性をもつた人間づくりが最も大切だと存じます。

こういう問題に対しても，わたしは，世界的交友機関たるわがロータリーの使命を考えずにはおられません。ロータリーは何よりもサービス精神をそのモットーとしておりますが，サービス精神とは，自己を超えて他の人々をも自己と同様に考え，他人の幸福をも自己の幸福の如く考えて，社会全般がよりよくなるような精神ではないでしようか。鈴木大拙氏は１月号の大法輪の対談の中で仏教の出発点について，

「(仏教は)　いわゆる絶対矛盾の自己同一というところから出発している。普通に言えば自分は自分，他人は他人で絶対矛盾だ。それではどうしたつて二つになる。誓願は自分を超えて自分の中に他の人を見るのであり，自と他とは相対しているが，そのまま同一なんだ。絶対矛盾に同一性があるのだ。仏教はここから出発しているんだな」と述べておられるが，まことにその通りでありましよう。しかし，これは広い意味では恐らく仏教だけの問題ではなく，キリスト教，またその他の宗教もその根底においては共通のものがあると見てよいのではないでしようか。少くとも教理とかその説明ではなく，生きた宗教的生活ということになれば，余程のあやしき宗教でない限りはそうだと思います。わたしがここで強調したいのは宗教論ではなく，真のサービスは，ただ体裁やきれいごとではできるものではなく，深い宗教的な感覚或は裏打ちなくしては不可能ではなかろうかということであります。

真のサービスは笑われるとか損をするとかいうことを覚悟の上で，高い知性と覚悟とを以てせねばなりませぬ。目には目を，歯には歯では永久に人類は救われません。狭い地球をもつと明るく，自由に，且つ楽しいものにする唯一の方法は正しい意味でのサービス精神に徹し，己の如く人を愛することよりほかにはありますまい。国際ロータリーの使命も大なるかなと言わざるを得ません。今年もみんな仲よく，よい年に致しましよう。

会報　1962年　新春特別号　所収

KYOTO EAST ROTARY CLUB
MONTHLY BULLETIN
No. 93. JUL 1964
事務所　祇園会館　東山区祇園石段下　電56—0163　例会場　都ホテル　東山区蹴上　電77—6001　365 DISTRICT

新年度を迎えて

会長　平沢　興

今日ここにロータリー新年度の第1回例会に当り，京都東ロータリーの新会長として挨拶をすることは，私の深く喜びとするところであります。私は何よりもまづ会員各位並びにその御家族の御多幸と御繁栄とをお祈り申しあげます。そして会員各位とともに，前年度の荻生会長，木村副会長を始め，理事，幹事，会場監督，会計などの各位の御苦労に対し，心から厚くお礼を申しあげます。

なお切にお願い申しあげたいことは，ロータリアンとしてなお未熟な私に対し，各位の心からの御友情と惜しみなき御援助とであります。幸に役員，理事，幹事，会場監督，会計等には当クラブとしてのベテランをお願いすることができましたので，この点はまことに心強く感じております。

さて，新年度のロータリー運営については，まことに素晴しいペッテンギル会長のメッセージがあります。印刷をして差しあげてありますから，ただその文字だけではなく，からだ全体で，ペッテンギル会長の心をお汲みとり下さい。

Live Rotary by sharing Rotary.
Live Rotary in every business relationship.
Live Rotary through your community leadership.
Live Rotary through our world fellowship.

職業関係において，地域社会の指導的任務を通じて，更には世界的友好を通じて，ロータリーを分ち合うことによつてロータリーに生きよう，とは何という響にして，しかも心を魅する言葉でありましよう。いや，これはただの言葉ではなく，会長の長いロータリー生活を通じて生れ出た魂の祈りであります。

論語の中に，孔子は「これを知る者は，これを好む者に如かず，これを好む者は，これを楽しむ者に如かず」と言つておられるが，アインシュタイン，ロダンなど偉大な学者，芸術家などの生き方を見て，これを楽しむなどというなまやさしいものではなく，むしろ全生命そのものを仕事に捧げ尽して，仕事に生きるという意味で，私は数年前更に以上の孔子の語に，「これを楽しむ者は，これに生くる者に如かず」とでも附けたらよかろうと，ラジオで放送したり，新聞で書いたりしたことがあります。私はこの度，ロータリーに生きよう，というペッテンギル会長のメッセージに接して，はげしい共感と感動とをうけたのであります。そしてペッテンギル会長のロータリーに生きようという表現を次の如く，

「ロータリーを知る者は，これを好む者に如かず。ロータリーを好む者は，これを楽しむ者に如かず。ロータリーを楽しむ者はこれに生くる者に如かず」

とも表現することができると思うのであります。ここにはロータリアンとしていろいろの段階があるのでありますが，ペッテンギル会長は長い体験を通じてロータリアンとしての最後のあり方を，そのものずばりと言いきつておられるのであります。空念仏のロータリアンではなく，生活

の中でロータリーを生かし，あらゆる面でロータリーに徹して生きよと言つておられるのであります。ゲーテは，人は自らの知ることのみを見るものだ，と言つておりますが，ロータリーに生きるなどということも，一見分りきつておるようで，実はペッテンギル会長の理解されるように深く理解することは決して容易のことではありません。自らの乏しさを深く意識する私などは，ペッテンギル会長の言葉に電撃的感動を受けながらも，同時にその及ばざることにおののく者の一人であります。しかし各位とともにペッテンギル会長の心に応えるよう，最善をつくそうと固く自らに誓つております。

ロータリーに生きるまでには，(イ)これを知り，(ロ)これを好み，(ハ)これを楽しむというようないろいろの道程がありますが，すべてのロータリアンはある程度までは既にそういう覚悟でロータリーに入会しておられる筈であり，少くともある程度までは，ロータリーの規則とか，ロータリアンのあり方については承知の筈であります。しかし残念ながら，私自身を省みても，なかなかそういう風にはなつておりませぬ。殊にわれわれ日本のロータリアンとして反省を要することは，ロータリーのルールの理解には理知的な頭だけではなく社会とか，義務とか，サービス等々について国際的感覚を身につけねばなりませぬが，これは実にむずかしいことで，かく申す私自身なども極めて怪しいものであります。しかしそれに気づいておるのはまだ恕すべく，最も恐ろしいのは，日本的感覚で文字だけを読んで，それでルールが分つたような錯覚を持つことであります。お互いに心からの友情の中で戒めあつて，我流に陥らぬよう心がけたいものであります。何としてもよきロータリアンたるためには，その感じ方や考え方が国際的になるよう，人間的に生長せねばなりません。

Live Rotary—ロータリーに生きようとは実に無上の標語であり，一見まことに簡単のようですが，実はそこに達するにはいろいろの道程があることを深く認識して，大いに頑ばりましよう。

Shake Rotery—ロータリーを分ちあう，ということも実に意味深長であります。ロータリーを分かち合うということは，ロータリーの心を，ロータリーの仕事を，ロータリーの生活を分かち合うということであり，ロータリー生活の中で，ひとつ心になつて喜びも悲しみも分け合つて生きるということであります。ロータリーを分け合うということは，何ごとも一つ心で力を合せてやるということで，そのためにはそれぞれの立場における各部の，各人の積極的の結合と協同作業とが必要であります。ロータリーに生き，ロータリーを分ち合うために，最も恐ろしいことは，いわゆる無関心であります。どうぞ各位は，みんなが役員であり，理事であり，委員長のようなつもりで，出席を始めロータリーのすべての面の活動に体当り的な積極的関心と深い友情とを以て協力して下さい。

真に明かるくて楽しいロータリー

会員一人残らず，心と心の通じたロータリー

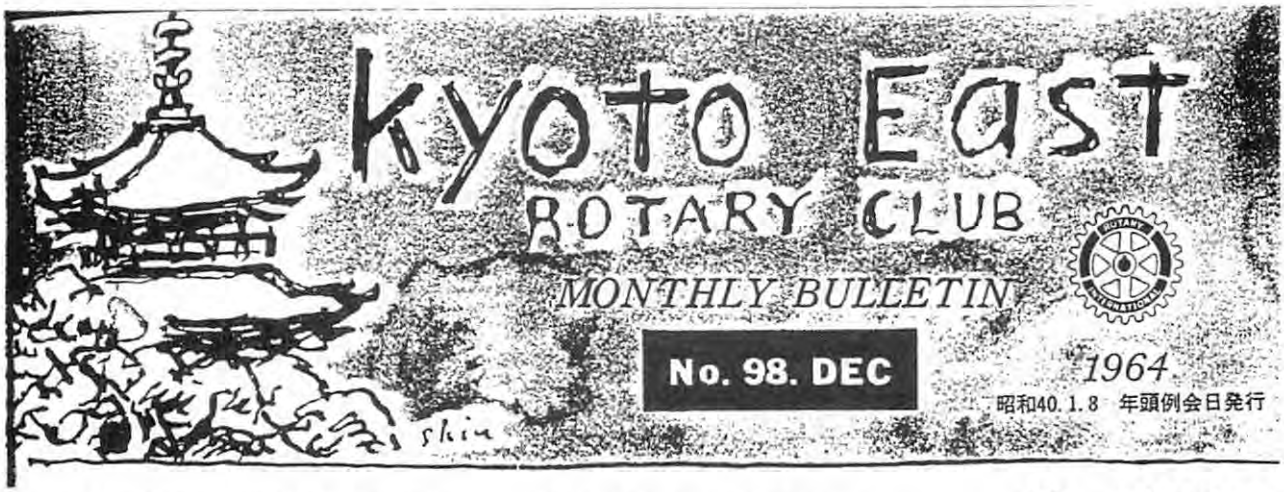
ルールを知るのみならず，国際感覚を身につけて真にルールをこなしたロータリー

みんな手を握つて，堀内ガバナーの下で，こういうロータリーをつくるよう頑ばりましよう。これにはロータリーを分かちあつて，ロータリーに生きることが最も近道なのです。

Live Rotary by sharing Rotary.

昭和四十五年（一九七〇）頃

右の写真は、この本の編集時に収録したものです。（以下同じ）



事務所 祇園会館 東山区祇園石段下 電56—0163　　例会場 都ホテル 東山区蹴上 電77—7111　　365 DISTRICT

新年のごとば

会長 平沢 興

新年おめでとう。いくつになつても，やはり新年は森羅万象ここにあらたまると言つた感じである。信網先生は数年前「春ここに生まるる朝の日をうけて，山河草木みな光あり」とよまれたが，まことにそのものずばりと言つたさわやかさである。さらさらと新年の大自然を詠じて，しかもその中に己の心までもよみこんでおられる。新春の朝日に照り輝く山河草木の姿は，そのまま信網先生の心の姿でもある。

さすがに新春は，われわれにもそんな感じがする。それはどこかに Live Rotary の心にも通ずるものがあるようである。リブ，ロータリー，このRIペツテンギル会長の言葉は，われわれにことしのロータリー年度の初頭，文字通り衝激的感動を与えたが，これは考えれば考える程，すばらしい言葉である。思い出すごとに新しい希望と身のひきしまる感激を与える言葉である。仕事に生き，友情に燃え，奉仕に徹するロータリーの心を心として生きる生活は，正に人類理想の窮極とも言われよう。しかし，ここで最も大切なことは，そう考えるだけではだめで，それをそのまま日々の日常生活の中に生かすという事である。完全にそれを実現することはとてもなかなか出来るものではないが，しかし，容易でないからこそ，そこに夢があるのであり，容易でなければない程，われわれロータリアンは少しでもそれに近づかねばならぬのである。考えてみれば孔子のような人でも「吾日に三たびわが身を省みる」とのきびしい生活を生きられたのであり，また「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」などと，激しい言葉をも叫んでおられるのである。

「汝のうちなる火を燃やせ」というラハリ前RI会長の言葉も，私はほんとうに好きである。人間は内なる火を燃やしておる限りにおいて永遠に若人であり，輝く山河草木とともに，輝く英知の人間になれるのである。ことしは巳の年だが，巳は英知の表象だとも云われる。心から会員各位の御精進と御多幸をお祈り申し上げる。

京都東R.C.十周年記念

限りなき道ロータリー

奉仕の理想　胸にひめ
友情花と　咲かせつつ
生きよう今日も　にこにこと
ひとすじの道　ロータリー
限りなき道　ロータリー

こころあわせ　手をつなぎ
平和と幸を　祈りつつ
生きよう今日も　にこにこと
ひとすじの道　ロータリー
限りなき道　ロータリー

作　詞

会員
平沢　興

どうした風の吹きまわしか、昨夏琵琶湖畔で当クラブのアッセンブリーが行われた際、木下会長から私にクラブソングを作れとの話があり、始めはまあ軽い気持で聞いていたのであります。ところがまだ作詞もできぬうちに、何事にもまめな木下会長から、作曲はもう知人の藤山一郎さんに頼んで快諾を得たとのことで、とやかく言ってはおれず、作詞に及んだ次第であります。作曲に当っては藤山さんからまことに懇ろな御指示を戴き、深く感謝をしております。

歌そのものについてはもうくどい説明は必要なかろうと思いますが、果して私の気持が素直にあらわれているかどうかについては内心忸怩たるものがあります。

真の奉仕はただ真似ごとではなく、家族をも世界をも含めた広義の社会に対して、おのずから胸にわく報恩感謝の念と奉仕の理想がなければ出来るものではなく、たえず生活のまっただ中でそれを胸におさめておかねばなりませぬ。「奉仕の理想胸にひめ」とは、そういう気持を歌ったもので、「生きよう今日もにこにこと」というのは、ただ観念だけではなく、日々の生活そのものを明るくロータリーの精神で生きぬこうという気持を歌ったのであります。「ひとすじの道ロータリー、限りなき道ロータリー」はくりかえしにしてありますが、これはロータリーの道は奉仕ひとすじの一本道であり、しかもこの一本道は身辺のことから始まって全人類に及ぶもので尽しても尽しても尽しきれぬ限りない道だということを歌って、我々自身にロータリアンとしての覚悟を促したものであります。手を携えて友情の花を咲かせながら、楽しくがんばりましょう。

作　曲

東京西 R.C.
NHK音楽部
藤山一郎

“限りなき道ロータリー”の作詩を頂いたのは、昨年の暮でしたか、平易な詞だけに、日常会話と同様のアクセントで作曲せねばならぬと心掛け、1番と2番との字数を揃えて頂いたり数回に亘って速達の往復、最終決定の詩を頂いた瞬間、スラスラと書き上げる事が出来ました事、御報告申し上げます。

こう簡単に書いてしまうと御期待に背く様ですが、日数をかけても駄目な場合が多く、淀みなくさらさらとお玉じやくしが出る方が又歌い易い曲を生み出す結果にもなり、1月30日ピアノ伴奏譜も書き上げて完了致した次第であります。

10周年を御記念なさっての制作に、一員として参加させて頂き心から感謝申し上げます。そしてその上にお願い申し上げたいのは、曲が出来て発表されます事は、いわば子供が生れた誕生日の如きものです。どうぞ皆々様によって立派にこの歌を育てて、一人前のロータリーソング集の仲間に入れてやって下さい。

終りにのぞみ、会長はじめ、幹事皆々様の御熱心な御努力に包まれ作曲させて頂けました事、心から嬉しく存じ居ります。

3月20日

会報　1966年　3月号　所収

ROTARY CLUB OF KYOTO-EAST
MONTHLY BULLETIN

No. 162 1970・4
DISTRICT 365 事務局 祇園会館 Tel. 561—0163 例会場 都ホテル Tel. 771—7111 昭和45年5月22日 発行

"REVIEW and RENEW" 「再検討し刷新しよう」 **SMILE and HARMONY**

ロータリーの心

平澤 興

周知の如く、本年は国際ロータリー創立65周年、日本ロータリーの創立50周年に当るが、この年のロータリー創立記念日に改めて会員諸君とともに「ロータリーの心」に就て考えることはまことに意義深いことと思います。1905年2月23日の夜 Paul Harris を中心としてSilvester Schiel, Gustavus Loehr, Hiram Shorey 等僅か4人によってシカゴに創立されたロータリーが、今日、国際ロータリーとして世界の隅々にまで及び、現在148カ国、14,055クラブ、660,500人の会員を有する巨大な組織にまで伸び、更に日々発展を続けていることは誠に驚歎すべきことで、恐らく之は当初 Paul Harris を初め何人も予想しなかったことであろう。この予想を超絶する巨大な発展には、種々の原因もあろうが、何よりも先ずそれは創立者 Paul Harris の神に通ずるロータリーの心と、之を受けついで来た優れたロータリアン達のおかげであろう。そういう意味では、われわれはただその時々の流れに動かされず、常に先師の源流にかえって深くその心を味わい、天をわれわれロータリアンの心とするよう、たえず心がけねばなるまい。

Paul Harris の写真に接して驚くことは、弁護士を業としながらも、全く垢のぬけきった清純な聖者のような相をしていることである。だが、そうした清純な人がとかく世俗に対して感ずるように、Paul Harris もいわゆる淋しがりやで、一面どうにもならぬ孤独感を持っていた。しかし、そうした理想家肌にもかかわらず、彼において特に感心することは、他面極めて常識的で、人に対

カットは 会員楠部弥式君画「季朝水滴」

して甚だ寛容なことで、決して無理をせず、従って人との肌触りが柔かく、天衣無縫的な組織力を持っていたことである。われわれ日本人として特に注目すべきことは、こうした場合、日本ではとかく淋しがりやは孤独感に囚われて、之を消極的に楽むような傾向さえあるが、Paul Harrisにおいては然らず、常に淋しさに対しては積極的に対処し、自ら淋しいが故にいよいよ友を求め、温かい友情によって社会を明るく、楽しく、意義あるものにしようという奉仕的態度に努めたことである。ロータリー綱領の第1に「奉仕の一つの機会として、知り合いを拡めて行くこと」と書かれているが、これはこうした明るい積極的態度で、これこそロータリー綱領の基本中の基本ともいうべきもので、この気持ちが真にわかれば、他のことはおのずから身につくとも言われよう。かく申す私自身も分かっておるようで、果してその体得がほんものか否か、自ら恐れている次第である。

Paul Harris は弁護士としての職業柄いろいろの人に接したが、どうもそうした表面的関係だけでは、彼が望む心温まる友情を得るまでには至らず、何とかそうした友情の会を持ちたいという願望を以て、石炭商のSchielや、鉱山技師の Loehr、洋服生地商の Shorey などに話を持ちかけたのである。当時シカゴは混迷その極に達し、職業的にも全く弱肉強食の時代で、彼等もそういうものを望んでいたので、これら同志の心からの賛成を得て、ロータリーの創立となったのである。当時はまだアメリカでも大学教育はそれほど普及しておらず、創立会員4名中大学を出たものは Paul Harris 1人だけで、他の3人は何れも高い学校教育は受けていなかった。しかし面白いことには、それだけ彼等は教育によるよごれも少なく、何れも情熱と純情にはひけをとらぬさむらい達で、Paul Harris への彼等の絶対の信頼はむしろロータリーの門出を容易ならしめたとも考えられるようである。とにかく創立会員のすべてが火のような存在であった。不幸な経済的事情で、Loehr と Shorey の2人は間もなく、ロータリーを去ることになるが、しかし Paul Harris の彼等に対する友情はかわらず、その思い出の中にも彼等について切々と語っている。

もとよりシカゴクラブ創立の当初には、人数も少ないことで、あまり面倒な規則などはなく、週1回まわり持ちに自分のところで会を開き、情報を交換しながら友情を楽しんだ。当時は弱肉強食時のはげしい生存競争の時代なので、同業者が多くては軋轢などの起る恐れもあるので、会員は1業1人制として、そのかわり初めのうちは互いに職業上の便宜などをも計りあっていた。しかし、そのうちに会員同志だけの助け合いでは少し利己的過ぎるとの反省なども起り、地域社会全体の幸福を考え、これへの奉仕ということになり、いわゆる社会奉仕が始まった。そして自己の職業もただ自分の利益のためだけにではなく、労働に対する正しい報酬は之を受けながら、同時に社会のためにもなるようにとの考えで、之が職業奉仕となった。更にロータリーはその視野の拡大とともに、社会奉仕はただ地域社会に対するものだけではまだ不十分だということになり、之を国際的視野にまでひろげて、今日のいわゆる国際奉仕にまで発展するに至ったものである。ところで、こうしたロータリークラブの活動にとっては、クラブはいわば活動の根拠地ともいうべきもので、その運営如何は直接クラブ活動の成果にも影響を及ぼすので、奉仕の重要な仕事としてクラブ奉仕が生れたわけである。

クラブの4大奉仕部門についても、いろいろ考えるべきことはあるが、今日は之には触れない。ここでは分かりきったことながら、ロータリー活動の根本はやはり友情と奉仕であり、奉仕もよく考えて見ると、世界的に拡大された友情とその実行にほかならぬと言われるようである。もとより世界的に拡大されたこの友情には、どうしても高い視野に立つ愛と認識がいり、また常に変動する世界と共に前進し、之に適応し得るだけの弾力と適応力とが必要である。これは楽しいことだが、しかし、惰眠を許さない。「ひとすじの道ロータリー、限りなき道ロータリー」と私が歌ったのもそのつもりである。今日も明日もニコニコとして、楽しく、しかも逞しく一筋のこの道を進もうではありませんか。

頬ずりをされる先生

ROTARY CLUB OF

KYOTO-EAST

DISTRICT 365

MONTHLY BULLETIN

No. 206 1973・12

A TIME FOR ACTION

"今こそ行動のとき"

(R. I. 会長ターゲット)

"心のこもった活動"

Whole-hearted Activity

(京都東 R. C. 会長ターゲット)

おめでとう

新春随感　　平　澤　　興

正月はいくつになっても良いものである。もとより年をとってからの正月の喜びは子供の時のようにうずくほどのものではないが、それはそれで自然でありそれでもよいのであろう。

私は越後の片田舎に生まれたが、六、七〇年前の越後は正月には殆んどいつも雪がありそれも多くは1メートル以上もの深雪があった。正月の晴れ着姿でご馳走を頂き、雪の静かな夜こたつで聞いた祖母の昔話などは遠い昔のことながらつい昨日のことのように思われ、いまだにその当時の雰囲気をあつく肌に感じるのである。もうその話の一つ一つはくわしくは覚えていないがそうした天地に溶けこむような心のあたたかさとゆとりは今も私の体質の一部となって、現在の私をつくってくれているように思われる。

中学の二三年頃から、どうしたことか私は年末には過ぎた1年をふりかえって反省し新年の新しい計画などをきめ、正月にはそうした新計画の実行にかかることにしていた。それだけに年末年始は私には大きな意味を持つようになり、またいろいろの思い出などもある。今最も大きな感激をもって思い出されるのは大学1年の時の年末年始のことである。私は大正9年9月京大医学部に入学し、当時の荒木寅三郎総長の入学式辞には全く身ぶるいするような感動を覚えた。しかし、その後の大学の講義はどうも思ったほど面白くもなく、それに大学では、ただ講義を聞く受け身の勉強だけではなく自らも原書の参考書なども読んで積極的且つ徹底的に勉強しようという私の計画も思うようにはいかず、9月に始まった講義も1か月ばかりで欠席がちになり、さりとて下宿で勉強するというわけでもなく、だんだんひどい神経衰弱になり、ついには眠れぬ夜がつづくようなことになった。それでその年はもう冬休みにならぬ前に早々と越後の郷里へ帰った。私を絶対的に信じていた家

人たちは、くどくそのわけを聞くこともなく安心した。ここでは一歩外へ出れば、私を取りまくものは雪に埋れた白皚々たる広野のみであった。私は毎日そうした広野を歩いたが、そうしているうちに調子のくるった私の心も次第に平静をとり戻し、ある日散歩の途中で突然ベートーベンのことを思いだした。そして私は私自身に言ったのである。「何をお前はそんなに苦しんでいるのか。お前はまだ、何もやるだけのことをやっておらぬではないか。まず命をかけて、やるだけのことをやってみるべきだ。人生には迷いはあろう。だがやるだけのことをやらずにそんな迷いに負けてはならぬ。とにかくやることだ。やがて新年が来る。スタートの新年が来る。」私はこの時、かつて読んだロマン・ロランのベートーベン伝を思い出したのである。この偉大な、一見強情我慢にさえ見える楽聖ベートーベンも、その耳の病にへこたれて倒れかかり、25才のある日自らにむかって叫んでいるのである。「さあ勇気を出せ、たとえわが肉体にどんな弱点があろうとも我が魂はこれに打ち勝たねばならぬ。25才、そうだもう25才になったのだ。今年こそ男一匹全き人間たるべく決心をせねばならぬ。」もとより音楽家たる彼にとって耳の病は致命的ともいうべきものであったが、彼は遂にこの困難を克服して偉大な足跡を残したのである。おかげで私の神経衰弱も治り大正10年1月からは毎朝2時の起床を実行して勉強しどうやら大学1年の危機は脱却した。やはりやれば出来るのである。もちろん私の指導者はベートーベンだけではなく私にはそのほか実に数多くの先達がある。親鸞・聖フランシス・ミレー・ロダン・パスツール・コッホ・キゥリー夫妻・エジソン等々あげれば限りがなく、またロータリーの創始者ポール・ハリスなどもその一人である。私は伝記が好きでことに若い時は伝記らしい伝記は片っぱしから読んだものである。尤も伝記と言っても「せんだんは双葉よりかんばし」などと始めからその長所だけをあげて感心しているような伝記は縁がなく興味もないのである。人間は本来動物と神との間にあって、へたをすれば動物にもおち鍛えあげれば神にも通じるような不思議な存在でいかなる人間にも長所も欠点もあるはずである。我々が先人として仰ぎ見るような人々はそうした弱点をももちながら、それに負けず、次第にその長所を伸ばして偉大な存在にまで成長したもので、ただその長所を知るだけではそれほど面白くなく、むしろいかにその欠点を征服したかにより大きな興味があるのである。しかし偉大な先人をその内面的成長の過程からくわしく見ているような伝記は案外少くことに日本の伝記には少いようであるが、しかしたとえばパスツール、キゥリー夫人、コッホやロダンの伝記などにはそうしたすばらしいものがある。

伝記を読むなどというとどうも何か窮屈らしく聞えるかも知れないが、しかしそれはたとえば劇通がすきな人生劇を探し廻るようなもので、誠に楽しく面白くそれに教わるところも多いものである。楽聖などと言われるベートーベンにしても時々下女と喧嘩をしたり面倒くさくなると部屋の中から鍵をかけたりしているが少しもそれは真の偉大さを傷つけるものではなく、むしろ私などには彼に近づく気やすさにさえ感ぜられるのである。

時は正に新年、世の中は決して安泰などとは言われまいが、しかしのんびりしすぎた後のある程度の厳しさにはまたそれだけの意味があり、緊張一番、ここで気をひきしめて再出発するのも面白いではないか。さあ、みんなで元気を出そう。

子供たちに囲まれて

あすの太陽に燃える夢を

パスト・ガバナー
平澤　興

会報　1976年　5月号　所収

わが京都東ロータリークラブでは去る5月21日都ホテルで宮本正清会員の新ロータリソング「同じ理想に」の発表と共に創立20周年を迎えることが出来た。何たるしあわせであろう。国際ロータリーそのものの歴史はまだ比較的若く、今年でやっと創立71年だから、それを思うと、わがロータリークラブの創立20周年は決してそれほど短かくはなく、改めてその存在意義を考えさせられる。

私はチャーターメンバーではなく、創立の翌年の昭和32年4月15日の入会だから、私は個人的には19年のロータリー歴しかないのである。だが、この19年は私にとっては誠に重大な歳月で、考えれば考えるほど、ただ感謝のほかはないのである。この間に私はクラブ会長や、地区ガバナーなどをやらされたが、ロータリー経験の少い私が何とかして、こうした関所を通過出来たのは役員として直接お助け戴いた方々はもとより、更には会員すべての方々の温かい御支援のおかげで、私は会員のすべてに手を合わさずにはおれないのである。ロータリーの理想に共鳴し、何とか真実にそうした道を歩きたいとの願いは始めから心深く持ってはいたが、なかなか自らの生活の中でそれを実現することは容易ではなく、私は夢見るロータリアンとして唯とぼとぼと歩いて来ただけである。だが、とぼとぼとしながらも、強くそれを念じていることだけは今も変りはない。

わがロータリークラブの10周年の時、私が作らせられた、ロータリーソングもそうした私の願いを述べているのである。「奉仕の理想胸に祕め　友情花と咲かせつつ　生きよう今日もニコニコと　一筋の道ロータリー　限りなき道　ロータリー」なる歌は、ある意味ではあまりにも素朴かと思われる。しかし、「生きよう今日もニコニコ」という以下の句は、ただ観念の遊戯としてではなく、今日の生活の中に、奉仕と友情なるロータリーのひとすじの理想、しかも、やればやるほどいよいよ奥深いこのロータリーの理想を生かしながら、にこにこと逞しく歩きつづけようではないかと呼びかけているのである。しかも、これは誰よりも先ず至らぬ私自身に対する呼びかけであるが、私は生涯之を私に叫びつづけて行くつもりである。

東ロータリークラブに入会した前年の昭和31年12月に、私は京大医学部長になり、対外関係も次第に多くなったが、研究室生活に終始した私は、社会的知識の不足に大いに悩んだ。ちょうどその頃チャーターメンバーだった親友の青柳安誠、山本俊平両君から、京都東クラブへ入会のすすめがあり、ロータリーの目的や綱領を知るに及んで大いに心が動いた。殊に綱領の第一たる「奉仕の一つの機会として、知り合いを拡めて行くこと」という一条には、よく分らぬながら、全く心を奪われたのである。それぞれ職業の違う人々が集まって奉仕をするために知り合いを拡めて行くという生き方は、実にすばらしいことであり、こういう考え方でゆけば、経験不足の私にも、あるいは学部長の仕事もやれるのではないかというような希望も出て、ついに入会を決意した。

入会に際しての御指導は岡林事会員から受けた。これは私のロータリー生活において生涯忘れることの出来ない感動的のものであった。実に分かり易く、しかも心から湧き出る誠実さと熱意とを以て、ロータリーについて本質的の御説明をうけたが、この時私は「ロータリーへ入会してよかった。こういう方々が会員としておいでになる会なら、すばらしい会に違いない。しっかり一つ勉強して、私もよいロータリアンになりたい」と心から喜んだ。こうした入会時の説明は極めて重大であり、しかも、それはただ事務的だけの指導ではなく、出来ればロータリーがそのからだに融けておる人からの心の指導が願わしい。私のロータリー生活は、実に岡林先輩による入魂に始まり、今日に及んでおるのである。

ロータリーは言わば世界的な親類づきあいであり、自分のクラブはいわば家族づきあいのようなものである。私のような世間知らずの人間が、今日まで楽しく、無事にこのクラブの会員としてやってこれたのも、全く会員各位の温かい友情のおかげで、そのことは年と共にいよいよ強く感ぜられ、ますます各位の姿に頭がさがるのである。世に友ほどありがたいものはない。私は相変らずとぼとぼとしておるが、願わくば今日は昨日よりも、明日は今日よりも、もっと人間らしく、もっとよきロータリアンになりたいものである。明日の太陽に燃える夢をかけて元気に生きようではないか。

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 365
MONTHLY BULLETIN
No. 244 1977・2

"SERVICE" I BELIEVE IN ROTARY
"奉仕"ロータリーを私は信奉する
(R. I. 会長メッセージ)

ロータリー創立記念日に因んで

平　澤　　興

人間の出合いほど面白く、またふしぎなものはなかろう。1905年2月23日のポール・ハリスとほかの3人が集まって第1回のロータリーの夕を持った出合いなども、正に世界史に輝く出合いの1つであろう。当時シカゴは不況のどん底にすさみきっていたが、そうした味気ない世の中で、何とか利害を超えた心からの友情を楽しみ、明かるく助け合って生きようとの願いをこめたのが、この会合であった。何んとそれが非常な勢でまたたく間にシカゴから全米へ、更にはヨーロッパへ、そして遂には殆んど全世界に拡がるに至ったが、それはロータリーが人間にとってそれだけの価値と理想とを持っているからである。

翻って思うに、この世界的組織は何と素朴な姿で始められたことか。最初に集まった四人というのは、ポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターバス・ローア、ハイラム・ショーレーで、その場所はガスターバス・ローアの何の飾りけもない事務室であったが、これこそは後年すばらしい発達を遂げる国際ロータリーの発現地となったのである。

ポール・ハリスは本来内省的だが、しかし明かるい性格の人であった。彼は4人の創立会員中では唯1人の大学出であるが、大学を出ると5年間、人と社会とを学ぶために欧米の各地で新聞記者、演劇家、農夫、運搬者等殆んどあらゆる職業に従事した後、シカゴで弁護士を開業したのである。だが、すさんだシカゴの生活は、淋しくてたまらず、何とか明かるく正しく生きようとの願いをこめて集まったのが、このロータリーの最初の会合である。ポール・ハリスも田舎出であるが、この点は他の3人も皆同じく田舎出で、内心淋しさをどうすることも出来ず、ひそかにそういう友を求めていたものばかりであった。

シルベスターは石炭商でドイツ人を両親とし、天性誠に親切で、友に会うや満面歓喜で迎えると

いう風の人で、第1回のロータリークラブ会長であった。彼は高等教育は受けておらず、あくまでも自成の人で、シカゴにおける生活は終始苦難に満ちたものであったが、常に誠実と奉仕とを以てその生涯を貫いた。

ガスターバスもまた独乙人を両親とした田舎出の人で、その特徴とするところはすぐれた総合的性格で、鉱山技師を職としたが、病的な不景気的波瀾は彼をして長くその会員たることを許さず、ポール・ハリスはこれには非常に心を傷めていた。

ハイラムも田舎出の洋反物商で、実に敬愛すべき人であったが、大都市の生活には完全には満足出来ず、それだけロータリーの会には格別の熱意を持っていた。だが恐ろしい不景気のあおりで彼もまた長く会員として留まることを許さなかった。

既に述べた如く、これら4人のシカゴ、ロータリークラブの会員中、大学教育を受けたのは、ポール・ハリスだけで、他の3人は何れも高等教育などは受けておらなかったが、しかし、これらの創立会員にはむしろそのためにこそ、われらにより深い感謝と反省とを促すべきものを持っていたように思われる。それは彼等がすべてややもすると、長い学校生活で失いがちなはげしい情熱とけがれなき誠実さをもっていたということで、このことはそのまま新しいロータリーの発展には、燃えさかる獅子奮迅の力となったのである。不幸にして創立会員中、ガス・ローアとハイラム・ショーレーは、困難な職業事情のために退会のやむなきに至ったが、初期ロータリー発展のために尽くした両氏の功蹟と感謝とを忘れてはならぬ。

もとよりロータリーの組織は始めから今日の如く、整然たるものではなく、最初はお互に知り合いをひろめ会員間の商売上の便宜を計ったり、生活の援助をしあったり、激烈な商売上の競争をさけるため各職業からの会員は一人にしぼったりする程度のことであった。しかし、そのうちに会員間だけの利益を計るだけでは、高い立場から見ればやはり利己的会合にすぎぬということになり、より広く社会への奉仕という考が次第にロータリーへ導入され、「超我の理想」とか、「最もよく奉仕するものが最も多く利益を受ける」などという標語も生れることになり、奉仕は友情を共にロータリーの指導理念となり、今やこの奉仕は職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕などと次第にその活動分野を広めつつある。この奉仕の理想は、また青少年育成の問題に逞して展開され、ロータリー財団、米山財団、地区またはクラブ単位の青少年交換なども、いわば広い意味での特別の奉仕活動の一部とも考えられる。

ロータリーとは何か、ということはよく新入会員などの間に問題になるが、一面これは尤ものことだと思われる。これについては国際ロータリー50周年記念として出された「奉仕の冒険」の中には次の如く述べてあるが、誠に適切な意見と思われる。

『その発展のどの過程においても、人々は「これがロータリーだ。これがわれわれの停止することの出来る処であり、そして世界は独りでに進むことが出来る」ということはできませんでした。何故なれば世界は進んで行きます。そしてロータリーも世界を動かす人々と共に動きます』。ロータリー創立後30年以上もたった頃、創始者ポールハリス自身も、「世界は変遷しつつある。われわれはそれとともに変るよう準備しなければならない」と述べているが、これには変動する世界に適応しながら、たえず、前向きにロータリーを発展せしめようという強い積極性が見られ、頼もしい限りである。

たえざる世界の進歩発展の中で、その採るべきを採り、捨てるべきを捨てて、何よりも真理に忠実に、言語、宗教、民族、国家などを超越して、しっかりと自らの職業に自信を以て立ち、世界の友情と奉仕とに最全を尽そうということこそは、基本的にはロータリアンにとっては変らざる一筋の道であり、近くして、しかも限りない道であろう。思うにロータリアンはその職業の代表者たるのみならず、願わくば更にひろく社会一般の代表者なり得たらばと思われる。それでこそ、最も高い意味における社会奉仕の文字通りの実現とも言われよう。ロータリーは頭で動く前に、先ずあたたかい心とからだで動くところであろう。

ここ数年来、ロータリー一般、わけてもわれわれのクラブに対する私の感謝はただ増すばかりである。年甲斐もなき不甲斐なさを感じつつも、例会へ出ると、また生きる元気が出るのである。われわれの間脳には生命中枢があって、愛はその働きを弱め、喜びは之を強めてその生命力を増強するが、わが京都東ロータリークラブには、たしかにそうした生命力を強める力を持っている。何ともありがたいことである。

会員各位、ロータリーが今日あるのは、その創立者ポール・ハリスが偉かったことはいうまでもないが、しかし、今日まで無事に発展し、更に明日の前進を約束する状態にあるということは、国際ロータリーの役員を始め、世界のロータリアンすべての努力と善意の賜であろう。

各位と共に今日ロータリアンたる幸福を喜び、明日はもっとよいロータリアンになるよう祈りたいものである。

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265
MONTHLY BULLETIN
No. 256 1978・2

"SERVE TO UNITE MANKIND"
全人類を結びつけるために奉仕せよ
(R. I. 会長ターゲット)

ロータリーの創立記念日に因んで

平澤　興

1905年2月23日に創立されたロータリーの創立記念日に因んだスピーチをホームクラブでやれることは、誠に嬉しいことで、その原点や基本的性格などの二三に触れて、会員諸君と共にロータリアンとしての思いを新たにしたい。

弁護士の Paul Harris を中心とし、石炭商 Silvester Schiel、鉱山技師 Gustavus Loehr、洋服商 Hiram Shorey の合せて僅か4人で始めたロータリーが、現在152の国家及び地域にひろがり、クラブ数17,499、会員数814,000名に達するとは果して誰が想像したことか。日本でのロータリーの発展も誠にめざましく、クラブ数1,382、会員数75,513名に達し、そのすばらしい成長ぶりは世界でも注目されている。

ロータリー創立当時のシカゴは不況のどん底で、儲けるためには手段をえらばぬような時代であり、まじめな人間にとっては誠に苦しく、淋しく、心あるもの、殊に地方からシカゴへ出て来たような人々にとっては堪え難い時代であった。ポール・ハリスは大分前から心を許しあえるような色々の職業の人々が集まって会をつくり、1週間に一度でもよいから会って話しあったら、どんなにか楽しかろうと考えていたが、前にあげた創立会員はみなそういう気持ちの人たちであった。この4人は、ポール・ハリスが大学を出ただけで、他の3人はそうした高い教育は受けておらず、何れもひと働きしたいと地方からシカゴへ出て来た庶民たちで、決してエリート的な人たちではなかった。

しかし、ある意味ではそれだけ純情で、一途であり、心から信じ合え、助け合うことができ、例会日には子供がお祭りにでも行くような気持ちで出かけて、ロータリーを楽しんだ。

ロータリーは現在は四部門に分かれ、それぞれ定款や細則によって営まれているが、もちろん始

めからこんな整然たるものがあったわけではなく、こうした定款細則などはロータリーの発展につれて次第に整えられて今日に至ったものである。シカゴ・ロータリーの創立当時などは、なにしろ不景気のどん底なので自然に商売上の助け合や情報交換などに力を入れていたが、しかし、こうしたことで次第に友情も深まり、また自分のためよりも人のためにというようなことで、ロータリーは次第に会員を増し、創立の年末には会員は既に30名にも達した。なお、そのうちに奉仕はただ会員間だけでは、ある意味ではやはり利己的だというような反省から、奉仕はただに会員間だけではなく、次第にあらゆる面で之を行うこととし、奉仕の理想こそがロータリーを貫く理想だということになった。

ロータリーの創立とその後の発展について、絶対忘れてはならぬ人に、ポール・ハリスのほかに、もう一人あるが、それは Chesley R. Perry その人である。ペリーは1908年シカゴ・ロータリークラブに入会し、1910年 R. I. の前身であるロータリー全国連合会の幹事となり、1942年まで R. I. 事務総長を務めた。ポール・ハリスが「ロータリーでは私を創立者と言うが、実は私が設画をし、之を実際につくりあげたのはチェスリー・ペリーである」と言っている如く、彼は文字通りその一生をロータリー発展のために捧げた。彼はその後 R. I. 会長や名誉事務総長などにも推薦されたが、こうしたすべてを固辞して受けず、ロータリアンとして終始した人である。たしかに彼は今日のロータリーの輝しい成果を考える時、ポール・ハリスと共に名をつらねるべき人であるが、時間の関係でここには深く触れぬ。

後になって分かったことだが、職業代表でつくられて、ある程度ロータリーに似たような会合はロンドンやその他にもあったそうだが、しかし、その後特に発展もしないのに、ただロータリーだけが世界を驚かすほどの発展をつづけているのはそもそも如何なる原因によるのであろうか。これにはいろいろあろうが、その最も主なものは、恐らく(1)会員が職業代表的に選ばれていること、(2)その理想が奉仕と友情におかれていること、(3)毎週1回の例会開催と、それへの出席が厳重なこと、(4)原則的に役員の任期が1年で、毎年変ること、(5)会員推薦が庶民的に、人物本位に行われて来たこと、(6)会員選考が宗教、言語、民族などに束縛されず、その決定に大きな包容性のあったことなどではなかろうかと考えられる。この一つ一つについては、ここでは詳しく論じないが、お互にこういうロータリー創立記念日などによく考えて見ることも無意味ではあるまい。たとえば役員の1年性などは一見非能率的かとも思われるが、しかし、ロータリーの積極的前進性や全会員の前向きの成長などから考えると、誠に合理的であり、また会員選考がより庶民的に行われるためには、日本のロータリーでは「あらゆる有用な職業は尊重さるべきであるという認識を深めること」という綱領(2)はもっと素直に理解さるべきものだと思われる。特にロータリーの発展を見て感心することの一つは、決して固定されず、たえず世界の変動を見ながらゆとりを以て之に対応して来たことである。これには創立者たるポール・ハリスの人となりが、特にその初期に大きくものを言っておるようである。彼には生れながらにして徹底した善意と実行力のある哲学性があった。彼は大学では法学を勉強し、将来は弁護士になるつもりでいたが、しかし、自ら顧みてあまりにも世事に疎いことを知り、弁護士たるためには、自らの目で生きた社会を見る必要があることを認め、大学卒業後5ケ年間、生きた社会の修業のために旅をして暮らすことをきめ、その費用はゆく先々で稼ぐことにした。この旅はひろく北米の各地から中米及び欧州諸国にも及び、彼はこの旅行を「放浪」と呼んでいるが、決して単なる放浪などではなく、これこそは彼を一人の若者から逞しい社会人につくりあげたのである。彼はこの旅で農夫、カウボーイ、舟のり、新聞記者、俳優、会社の代理人など各種各様の仕事をやり、多くの知人をも得ることが出来た。大理石と花崗岩の採掘業者ジョン・クラークなどもその一人であるが、クラークは何とかしてポールを自分のところに留めたいと思って、「私と一緒にここにおれば、もっとお金を儲けることができるはずだ」などと言って、しきりに翻意を求めた。だがポールは、「あなたのおっしゃる通りでしょう。でも私は金儲けをするためにシカゴへ行くのではありません。人生を生きるために行くのです」と答えて、ついにクラークの許を去った。

ポール・ハリスがこの5ケ年の「放浪」の旅を以て彼の人生をスタートしたことは、実にすばらしいことだと思う。確固たる信念ならでは不可能なことであり、これだけのゆとりと忍耐性とがあればこそ、彼は如何なる場合にも屈せず、断固として、わが道を行くことが出来たのであり、それはまたロータリーの成長にも大きな意味を持ったと思われる。19世紀における文化史上、その影響するところ最大の業績たる生物進化の法則の発見者たるチャールズ・ダーウィンもまた大学卒業後直ちに22才から27才まで5年間、南米、オーストラリアなどの各地への旅に出かけているが、こうした先輩たちの心には何か共通のものがあるよう

である。

会員諸君、ロータリーの創立記念日はただ過去の追憶に耽るだけでは申訳がないようであります。今日は、われわれロータリアンはポール・ハリス、チェスリー・ペリーをはじめ、多くの偉大なロータリーの先人たちに心からの感謝と敬意とを表し、併せてお互にロータリアンとしての今日及び明日の歩き方に思いを致し、R. I. がいよいよ人類社会の宝となるよう、心を新たに致したいものであります。有難うございました。　(1978. 2. 24)

りくつぬき

会報　1966年　3月号　所収

平　沢　　興

私どもは新潟から京都へひっこす時、数日間、それまでは交際もしていなかった同村の先輩Y氏のお宅にお世話になることになった。氏は貧農に生れ、小学校も3年位でやめてやくざの世界に入り、44才迄は暴れに暴れた人である。ところが44才を境にして全く生れかわられた人で、私どもがお世話になった頃はもう70を相当こしておられた。この数日の同氏宅での滞在は、私にとって全く生涯の感激であった。氏の柔かい物腰、それでいて頑としてものに動じない鉄の信念、そして臭味というものはもうみじんもない透明さ―私は文字通り生きた聖者を目の前に見るような気がした。

生れかわられたのには動機がある。44才の年の暮に、高利貸しのM氏から借りた金が返せないので、氏はたまたま東京へ出ていたM氏の所まで、新潟から草鞋ばきでお詫びに出かけられたのである。これには高利貸しも驚いた。M氏の長い高利貸し生活の中でも僅かの金が返せないというので、わざわざこんな遠路を詫びに来るなどという人はかって1人もなかった。感激したM氏は言った。「Yさん、あなたのお心持には全く感心しました。その金は失礼ながらあなたに差し上げましょう。そしてあなたが本気で仕事をしようというのなら、その金も無利子無期限でお世話しましょう。」Y氏感激した。長い間曇っていたY氏の心に新しい光明がさした。その日から神に誓って氏の新しい生活が始まり、やがて産も成し、人間の中の人間になられた。私がお世話になったのは敗戦の翌年で、Y氏の所へは殆んどあらゆる種類の人々が出入していたが、氏はそういう人々に温い心で奉仕の生活を捧げておられた。文字といえば新聞も満足には読めない程の人であるが、到達された心の世界は、すねかじりの私などにはとてもまねのできるものではなかった。大学は出ても、私が得たものはとかく断片的な知識で、周囲を照らす高い智慧ではない。Y氏宅の数日の滞在でしみじみ私は何とかして氏のように香り高い智慧を身につけたいと思った。道は遠いが、私は今もそんな夢を抱いて生きている。

カットはロータリー創立75周年記念マーク

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265
MONTHLY BULLETIN
No. 280 1980・2
ロータリー創立75周年記念号

LET SERVICE LIGHT THE WAY
奉仕の灯で道を照らそう
(R. I. 会長テーマ)

おおらかな心 さわやかな奉仕
(京都東R. C. 会長モットー)

ロータリー創立75周年を迎えて

パストガバナー　平　澤　興

1905年2月23日に呱々の声をあげた国際ロータリーは今や154の国家及び地域に及びクラブ数18,374、会員数853,000に達し、ここにその創立75周年を迎えることになった。何たる光栄であろう。何よりも先ずわれわれはポール・ハリス及びほか3人の創立会員に深い敬意を表し、更にこの75年間、己を虚しくしてロータリーの発展に尽された先輩各位に心からの感謝を捧げよう。国際ロータリーの75年の歴史は決してただ坦々たるものではなく、その間にはいろいろの迂余曲折もあったし、また全人類に対するロータリーの奉仕組織としてのあるべき理想を考えると、向上発展の途上にある今日と雖も、手離してただ喜こんでばかりはおられず、更に一段の創意工夫が必要である。

創立会員4名ということを思うと、確かに現在の会員数853,000は驚くべき数字だが、しかし、目を転じて世界人口40余億と対比すると、その率はまだ余りにも低く、ロータリーの真なる理想の追及と実行とにはいよいよ今後の努力が望まれ、新クラブの開設とよき会員の獲得こそは、ロータリーにとっては永久に古くして新しい問題である。

確かにロータリーはその独自の4奉仕部門を通じて人類に多くの貢献をして来た。これら各部門の活躍は何れも、ロータリーを特長づけるものであるが、こうした創立75周年記念などという節には、更にその原点に深き思いを致し、自らのあり方を反省して見たいと思う。そして改めてそこに新しきものを発見して、之を身につけてこそ、初めて真の記念となるのであろう。

職業奉仕は、会員選考が1業1人となっているロータリーでは最も基本的のもので、ロータリアンは何よりも先ず身を以て之を自覚し、良心的善意的に、しかも誇りと喜びとを以てその職業に当り、之によって社会に奉仕したいものである。こうした職業人は、ふえればふえるほど世の中を美しくし、明るくする。うわすべりのうぬぼれでな

く、自らの職業に心からの誇りと喜びを持つことは決して容易ではなく、そこには如何なる場合にも乱れることのない誠実と倒れてやまぬ根性とがいる。

国際ロータリーが近年最も力を注いでいる問題に一般青少年の問題、ロータリー財団奨学生の問題、インターアクト、ローターアクトの問題などがあるが、何れも極めて重要な問題で、今後ますます努力をせねばならぬ。一般青少年の問題では、近年クラブ単位或は地区単位などで行っている高校生交換などは特筆すべきものだが、幸いに着々その実を挙げていることは嬉しいことである。こうして濁りない若者に高い世界の目、世界の心を開くことは、極めて重要なことである。同じ意味でロータリー財団の諸活動、即ち種々の教育補助金による大学生や大学院学生の奨学及び研究グループ交換なども、誠に有意義のことで、こうして選ばれた若人たちによって世界文化に美しい新しい花が咲きつつある。幸いにロータリー財団への寄附では、日本殊にこの地区、このクラブは堂々と世界の王座をしめていることは誠に嬉しく、いよいよ今後もこの方向にご協力を願いたい。米山奨学財団は日本独自の国際奨学組織で、その点では特筆すべきものだが、その成果もまた次第に向上しつつあることは嬉しいことである。しかし、どうも日本の社会一般はこうしたことにまだ充分理解があるとは言いかねる面もあるようだが、何とか一般社会のより深い理解と協力を得るよう、一段とロータリアンの精進が望ましい。

人類の地上における国際関係などを見ると、人類社会はまだ余りにも自己中心的で、ロータリーの目ざす国家、民族、言語、宗教などの束縛を超越した人類社会とは余りにも開きが大きい。そんなことまでロータリーは関係がないと言えば、それまでだが、しかし、私はそこまで考えても決してロータリアンとして越権ではなく、そこまでの長い夢を持つことこそ、真のロータリアンではないかとさえ思うのである。

友情と奉仕に基いて自己と社会の向上を計るというロータリーの理念は誠にすばらしい。しかし、ただ規則や手続を覚えて濁す程度では真のロータリアンとは言い難くロータリアンの最も重要なことはロータリーの心と実行で日々の生活を生きることである。何とかしてただ口先きのロータリアンではなく、心と実行のロータリアンになりたいものである。実は私の「限りなき道ロータリー」は、そんな気持ちを素朴に表わしたいと思ったものである。これは決して単なる言葉の羅列ではなく、本当にそういう気持ちをそのまま文字にしたのである。ロータリアンの行くべき目標が友情と奉仕だとは、はっきりしているが、しかし、これは決して簡単なことではなく、１人の人間として真にロータリーの理想を考えると、それは一筋の道に違いないが、行けば行くほど奥ふかい限りない道である。だが、そこには人間としての無限の夢があり、憧れがある。

人間―地上のこの人間こそは、現在の天文学を以てしても未だその限界を掴み得ないこの全宇宙においても、高度の精神作用を有する文字通り唯一つの存在であり、その意味では人間こそは、地球はもとより、全宇宙よりも重く、且つ尊い存在である。

われわれロータリアンは、ただ日々の雑事に追われて自らを見失うことなく、一方においてはその人間としての尊さを意識し、他方に於ては１業１人の選ばれたロータリアンたることを自覚し、ロータリーの綱領をしかと身につけて、今日も一日ロータリー心で、堂々と生き抜きたいものである。

壇上に立って

創立25周年紀念に寄せる

会員・パストガバナー　平澤興

去る５月22日、京都東ロータリークラブは、その創立25周年を盛大にお祝いして、静かにその過去を省み、更に将来への夢を新たにした。森田福男会長、奥村忠実行委員長を始め、関係各位に心からのお礼を申しあげる。

25周年の事業は、その紀念式典も祝宴も、また紀念事業の行事そのものも全くすばらしく、京都東ロータリークラブらしく、垢のつかない清らかさと雑音のない静けさの中に執り行われ、私自身もこのクラブの偉大な成長ぶりに全く心からの感激と興奮とを感じた。個々の事柄については、それぞれ擔当者から報告があると思うので、重複をさけて、ここには触れない。

国際ロータリーは1905年の創立以来、驚くべき成長を示して来たが、わが京都東ロータリークラブも25年間それと喜びを共にして今日に至った。幸いに当クラブも熱心に活動をつづけ、ロータリー財団への貢献を始め、種々の点でその特徴を示し、地区的にも国際的にも見るべき貢献をして来たが、これ偏えに歴代会長を始め、会員各位の積極的協力の賜にほかならぬ。

京都東ロータリークラブの創立10周年紀念の時、私は当時の木下伊平会長の命をうけて、「限りなき道ロータリー」を作ったが、その気持ちは今も全く同じである。ロータリーの心棒をなしているものは、何としても広義の奉仕と、友情とである。しかも、この奉仕は、先ず自らの職業を通しての奉仕であり、これが更にのびて社会的、国際的な奉仕と友情につなが

るものと思われる。世界の現実に混乱が多ければ多い程、いよいよロータリーのこの考え方と行動はその国際的重要性を増してくるのである。

最も恐ろしいことは、奉仕とか、友情とかが、ただ目先きのきまり文句に終ることで、われわれは何としても、このロータリーの心を、日々ニコニコと生活の中に生かしてゆきたいものである。クラブの創立25周年の紀念としては、この「ロータリーを日常生活の中へ」などは最も望ましいものの一つであろう。その進むべき道や方向はわかっていても、その理想の到達は限りなく遠く、且つ広いのである。「生きよう今日もニコニコと、ひとすじの道ロータリー」という言葉の中には、今日の行動を含めて、その限りなき理想への祈りが秘められているのである。

京都東ロータリークラブの会員諸君！　時は容赦なく流れる。この瞬間もやがては過去となるが、悔なき今日を送り、限りなきロータリーの明日のために新しい夢をもやそうではないか。わがクラブは何としても恵まれている。いや、恵まれ過ぎている。千余年の古都京都の東北部に位して日本文化の粋を呼吸しながら、国際ロータリーの新しい姿に燃えているのである。何としても一日も早く国際ロータリーの創立者ポール・ハリスが心から喜こんでくれるようなクラブになりたいものである。しっかりと手をつないで頑ばろうではないか。

東ロータリークラブ創立25周年記念誌　所収

記念式典祝宴のフィナーレ

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265

MONTHLY BULLETIN
No. 328 1984・1

Share Rotary — Serve People

みんなにロータリーを — みんなに奉仕を

R.I. 会長ターゲット

謙虚のうちに、プライドを持とう

満田会長ターゲット

漆二曲屏風　パトラスの月より　　服部俊夫会員

〔巻頭随想〕

近頃思うこと

私はここ十数年、毎朝一つの感動を以て目をさましている。その感動とは、「よくも人間に生れて、今日も無事だ」ということである。「何だ、そんなことか」と言われる人もあろうかと思われるが、私にとって、それは決してそんな平凡なことではなく、考えれば考える程、不思議なことであり、ありがたいことである。それは過去40年間も生命について研究して来た私の驚きであり、一見尤もらしい説明はできるが、しかし、考えれば考えるほど不思議なことが多く、とても完全に説明などできるものではなく、分からぬということが分かれば分かるほど、いよいよ私には大きな驚きとなるのである。

人間は全宇宙の中でも、深い思考力を有する唯一の存在である。他の動物のそれとは比較にならぬすばらしい脳を与えられ、各自の努力精進に応じてそれぞれ高い精神生活が保証され、本能的に生きるだけではなく、各自の習練によってそれを昇化して、文学、芸術を始め、いろいろの文化活動、職業活動などに生かして生きておるのであり、いわゆる天才なども科学的に見れば決して別種の人間ではなく、ただ厳しい精神の産物にほかならぬのである。

人間が他の動物と異なる特徴の一つは、自らわが道を選び、如何なる苦難に当っても、徒らに挫けることなく、断固としてわが道を進み得ることである。ダンテもその「神曲」の中で、「汝は汝の道を行け、人には人の語るにまかせよ」とうたっておるが、決してこれは簡単なことではないが、真に人間が人間たるには何としても必要なことである。

人生に夢を持つことは誰にも許されたことである。夢を真に実現することは決してそう簡単なことではないが、しかし、そういう中で自ら選んだ道を堂々と歩くことは、またそれだけの面白さがある。ロータリーなども、そうした夢の一つのように思われる。ロータリーには決して人並はずれた非凡さとか、超俗的などということはなく、むしろ一見平凡でさえある。だが、この平凡さの中には世界に開かれた広さと明るさがあり、人類愛と誠実さとがあり、いつ、どこで、誰が行っても間違いのない道である。われわれは皆自ら進んでロータリアンとなったのである。何とか自らの夢としてロータリーを身につけて、よきロータリアンになりたいものである。

私は近頃、よくポール・ハリスが数人の会員と共に心から楽しんだ初期のロータリーのことを、私が幼き日、雪深い故郷越後のこたつの中で聞いた祖母の昔ばなしのように、たまらない懐かしさを以て思い出すのである。説明の多すぎるロータリーではなく、心の底から楽しく反応し合うロータリー、そういうロータリーを持とうではないか。

（平澤　興　1964〜65年度会長）

クラブ創立30周年記念に思う

パストガバナー・会員
平　澤　　興

会報　1986年　5月号　所収

1956年に発足したわが京都東ロータリークラブは、今年で創立30周年を迎える。何たる感激ぞ。私はチャーターメンバーではないが、創立の翌年4月に山本俊平君、青柳安誠君両会員の推薦により入会したので、私のロータリー歴も既に満29年を過ぎた。その間、私は各位のご友情により、1964年―65年度の当クラブの会長と、1967年―68年度の当地区のガバナーを勤めたが、各位のご友情には心から深く感謝している。

この30年間の当クラブ会長は、第14年度の前半が野村元次君、後半が日下公平君の2人のため31人になるが、既にその過半数の18名が逝去され、残っておられるのは13名で、その最年長者は山本俊平君である。有難いことに当クラブの会長はみな、それぞれ確固たる信念の持主で、その思い出などを書いても書き足りない。だが、そうしたことはここでは、一切略する。いや、略するというよりは、与えられた紙数では、とても書けない。しかし感謝すべき方々は、ただ会長だけではなく、当クラブ会員のすべてにである。人ごとに、それぞれ、趣きも味も違うが、それがまた当クラブの特長の一つで面白く、そこには常に、バラエティの潑剌たる刺戟と、面白い調和とがある。

「夢に生きる」などという言葉があるが、私も、恐らくそういう人間の一人で、いろいろの我がままもあったであろうが、皆さまの愛情により、今日までロータリーを楽しませて戴いたことは何とも有難い極みである。年ごとにいよいよしみじみと思うことは、よくも生物の長たる人間に生まれ、しかも国際奉仕組織たるロータリーの会員にして戴いたということである。

いつ頃からか、はっきりしないが、何とかして私もほんもののおとなになりたいとの熱願を持つようになった。しかし、80余歳になってしみじみ思うことは、どうも私は真の意味のおとなにはなれずに、子供のまま年寄りになったような気がしてならないのである。真に味と豊かさと深みのあるおとなになることは、なかなか容易なことではない。

私が当クラブへ入れて貰ったのは56歳の時であるが、このロータリーへの入会は改めて私にいろいろと考えさせた。何よりも先ず感動したのは、この組織の目ざす高い目標である。その目ざすところは、先ず自らの生活の基礎たる職業を大切にし、奉仕的情熱を以てその自立をはかり、更に出来るだけ多くの知人をつくって、国家とか人種、言語とか宗教などの障碍を超越して奉仕と愛情でこれに接し、何とかしてこの地上の人間生活を真に人間の名に値する楽しく、美しいものにしようということである。だが、世界の現実はまだまだこれらは遙かに遠く、いよいよわれわれの逞しい覚悟を促してやまないのである。

現在の世界はまだ一般的に、あまりにも、対抗的であり、戦闘的でさえある。しかし、ロータリーのめざす人間生活は、各自の職業に対し、友人に対し、更には社会一般に対する奉仕と友情であり、こういうロータリー精神が、世界に広がれば広がるほど、世界の文化も政治も経済も単なる競争や対立的のものではなく、もっと友情的、奉仕的となり、握手の文化がつくり出されるようになるであろう。

だが、もとよりこれは一朝一夕には出来ない。ただいい加減に夢を述べるだけではなく、われわれは高い精神的意欲を持って、わがままな本能的自己に打ち勝ち、自らが目ざす高いロータリー的目標に向って前進せねばならぬ。

ポール・ハリスがロータリーをつくってからは今年でまだ81年だが、その中でのわがロータリークラブの創立30年には意味深きものがある。どんな片隅におろうとも、われわれはみな世界のロータリアンであり、人類生活の理想に生きるロータリアンである。

創立30周年記念はただのまねごとではなく、逞しくわが心の改革記念の日にし、よき家庭人、よき社会人、よき世界人たる夢の実行にその全情熱を傾けようではないか。

ロータリーのこころ　I

燃えてほんもののロータリアンに

平 治 典

1986年7月、それは正に国際ロータリーの新年である。私は今でも新年という言葉だけで、わくわくするような老いたる子供である。

ロータリアンは世界のどこにいても、どんな隅っこにいても、世界人なのである。今こそわれわれは、世界の心を心とした、のびのびとしたロータリアンのほんものになろう。

ロータリーは、国家や民族を超え、言語や宗教を超えて、唯人間たることだけで互いに結び、互いに奉仕をする世界組織である。ロータリアンは、この奉仕を先ず向う三軒両隣から始めて地域社会に及ぼし、更にはそれを母国の全体に、そして遂には世界全域に拡げたいと願っている。世界の現状は、まだこうしたロータリーの夢からは遙かに遠いが、さればこそ、ロータリアンはこの夢を忘れず、いよいよ世界の平安と理解とに努めねばならぬ。

人類文化の歴史は、人類の発達史から見れば、まだ決して長いとは言われず、釈迦、孔子、ソクラテスなどの世界三聖人の存在も、今から僅か2500年ほど前に過ぎず、人類文化の発展はいよいよこれからである。

人間には、精神中枢たる大脳皮質に、生まれながらにして約140億の神経細胞が与えられておるが、天才を含めても、未だこの全細胞を完全に利用した人は一人もないと言われている。われわれロータリアンも、この無限の可能性を忘れてはなるまい。やれば出来るのである。「仁に当りては師に譲らず」と孔子も言っておるが、人が人たるの道を実現するには、何人にも遠慮はいらぬのである。

ほんもののロータリアン！　それには先ず、何よりも自らの仕事に燃えねばならぬ。日々の生活を友情と奉仕の中で楽しく生きねばならぬ。よき子供であり、よき父母であり、そしてよき社会人であらねばならぬ。

会員諸君！　今こそ燃えに燃えよう。そしてほんもののロータリアン、ほんものの世界人になろう。

年忘れ家族会にて（一九八六年）

ロータリーのこころ　II

ロータリーのスピーチ

平　洋　興

ロータリーのスピーチはロータリーの例会に一つの雰囲気を与える大事の花である。スピーチの目ざすところはいろいろあろうが、だいたい次のように要約されよう。

一　互に自己の経験や職業のことなどを話し友情と理解を広める。

一　スピーチを通じて社会の現実を知り知性を高める。

一　話し合うことにより、ロータリーの共通の理想を求め、真に世界的感覚を身につける。

この30年余のわが京都東ロータリークラブの流れを見て嬉しいことの一つは、年ごとにスピーチが形式的にも、内容的にも、よくなりつつあることである。しかし、よくなることは、いくらよくなってもよいことだから、更によくするために二、三のことを述べてみよう。

先ずスピーチの時間であるが、スピーカーの紹介は出来るだけ短くし、出来るだけスピーカーに予定の時間を与えるように努めよう。

スピーチの内容は全く自由で各自の好むところでよかろうが、しかし、なるべく唯のうけうりのような話しではなく、自己の職業とか経験とかを基礎とした独自性のあるものが望ましい。ロータリーはそれぞれ職業を異にする会員から成るので、そうしたスピーチにより、各会員から異なる社会の知識を得、生きた社会の現実を知って、自らの知性を高め、人間的向上を遂げることが出来る。

なお、スピーチは唯ダラダラと述べるだけではなく、なるべく要所要所にアクセントをつけ、聴く人の理解を容易ならしめるようにしたい。

ところで、スピーチの効果が実際に挙がるのは、唯スピーカーの努力だけではなく、聴者の態度や聞き方も大変に重要である。それは表面上それほどでないようなスピーチにも、実は屢々内容的にはすばらしいものがあるからである。特に注意を要することは、真に分かると分かったつもりとは決して同じではなく、大切なことは分ったつもり程度の聞き方ではなく、真に分かるまで聞くよう努力することである。話すこともむつかしいが、正しく分かるように聞くことは更にむつかしいと思う。

クラブでのスピーチ（一九八四年）

ロータリーのこころ　III

友情と奉仕

平 治 興

ロータリーは友情と奉仕の会だというが、いかにもさらりとして分かりやすい。だが、友情と奉仕などというと、ちょっと対立するようにも響くが、決してそうではなく、友情を形で現わせば奉仕になり、友情とか愛情のない奉仕などというものはないのではなかろうか。

奉仕という言葉にも、いろいろ議論があるが、He profits most who serves best. を最初に提唱した Arthur F. Sheldon によれば、奉仕とは「他人の立場を考えて、その人のためになるように尽すことである」と言う。

昔、孔子は子貢が「人生でたった一語でそれを守っておれば、生涯何とかやれるというような言葉がありますか」と尋ねた時「それ恕か」と答えておるが、恕は今は「ゆるす」などとも読むが、本来は「わが身を思うが如く、相手のことを思う」ということで、広義での思いやりであり、東西時と所を異にするシェルドンと孔子との間に何か共通のものがあることは面白い。

ロータリーでも、1905年のポール・ハリスほか3人の初会合では奉仕などという言葉は全くなく、ただ友情ひとすじのもので、混乱しきったシカゴで、純心の田舎出の四人が、せめて1週間に1度でも腹をわって話し合いたいという会であった。そのこと自身が互に元気づけ、助けあうことにもなり、期せずして奉仕になるのである。従って、その奉仕は始めは友人同志だけのことであったが、次第に非ロータリアンにも及ぶことになるのである。

ロータリーでサービスをやかましく論じるようになったのは、どうも1908年頃からで、シカゴ・クラブのシェルドンなどがその中心をなしているようである。前述の彼の言葉がロータリー標語に採用されたのは1911年、ポートランドでの第2回全米ロータリークラブ連合会であり、同じくその時ミネアポリスの会員 Frank Colin の超我の奉仕 (Service above self) もロータリーの標語となったのである。その後シェルドンの言葉の中の profit なる語に多少文句をいう人もあるが、しかし、ポール・ハリスなども言う如く、この語はただ物質的な所得だけではなく、精神的な修得をも意味するもので、やはりシェルドンの言葉はよい言葉だと思う。

「いつでも、どこでも、人のために」というように生きる奉仕の人は、絶えず人間的にも成長の機会を得るのである。

一九八八年六月六日
京都洛東R・C・の認証状伝達式にて

ロータリーのこころ　IV

ああロータリアン、故青柳安誠君！

平澤興

人生にはいろいろの宝があるが、しかし、心を許す友ほど尊い宝はなかろう。かつての当クラブ会員・故青柳安誠君は私にとってそういう人であった。

君は秋田県の生れで、鹿児島の七高を経て1920年京大医学部に入学した人で、それ以来の友であった。君は京大のいわゆる青柳外科の教授であるが、鳥潟隆三教授の愛弟子である。君はよく「俺は鳥潟先生にほれこんで先生の教室へ入ったので、外科が好きで選んだのではない。もし先生が内科なら内科へ行ったであろう」などと話していた。この恩師への君の傾倒にはただ驚くばかりである。鳥潟教授の頭脳の明敏さと学的情熱には、われわれも敬服していたが、しかし、とてもこわい先生で、われわれは君ほど、先生の内なる情熱と誠実はよく分からなかった。そこには君の先天的な鋭い感性と、逞しい明敏とがあったのである。

君については書くべきことが無限にあるが、ここでは、こよなき深い友情と鋭い職業意識について述べるに止める。

君は私が同じく心を許す山本俊平君と共に、私のロータリー入会の時の推薦者であるが、入会の時の紹介は君がやってくれたのである。その時君は「平澤君は京大総長選挙の時、否を入れた親友です……」と言って、人々をまどわせたのであるが、これは本当の話である。私が京大総長に始めて当選したのは、1957年であるが、その前の総長選挙の時は君などが私に否を入れてくれ、おかげで私は数票の差で敗れて、助かったのである。

落選を喜ぶのは、一般の人々にはおかしいかも知れないが、これは出来るだけ長く研究室にいたいという私の真実の心を君は本当に知っていて、恐らく他の数名の誠実の友と共に、否を入れてくれたのだと思う。これは唯の表面的な友情ではなく、一見常識に反するようだが、真に友の心を知っての友情で、友情の中の友情である。

もう一つ驚くことは、君は手術執刀の前の一瞬、静かに「どうぞ手術がうまくいくように祈った」ということである。天下無双の国手が手術の前に祈るとは、何ともすばらしいことである。これは、その仕事に全力以上のものを捧げることで「仕事は祈りである」と言えば、そのままロータリーの職業奉仕などにも通じよう。青柳君、天国で元気かな。

一九六一年十月七日
第三六五区年次大会で
出席率優秀賞を受ける
青柳会長

ロータリーのこころ　V

職業奉仕について

平 治 典

ロータリーでは、一業一会員が原則で、会員選考の時、それ迄の社会的活動が問われ、ある程度までは職業奉仕の如何なども吟味されて、入会が決定されているのである。

ところがどうしたことか、よく職業奉仕はむずかしくて分らぬなどということを聞くのである。確かに職業奉仕と言っても具体的には各職業ごとに異なる面があり、之を完全に解き明かすことは決して容易ではない。

だが職業奉仕に共通の原理は決してむつかしいことではなく、恐らく各自がそれぞれ、その職業に最善の情熱と工夫とを尽し、しかも唯自己中心的の利益だけではなく、最も広い意味でどこかで世のためになるように努めることであろう。

その実行は決して口でいうほど簡単ではなく、職業にもいろいろあって、別に奉仕などと言わなくとも、その仕事そのものがそのまま奉仕になるようなものもあれば、そうではなく奉仕には特別に気を使わねばならぬようなものもあり、誠に千差万別である。

真に職業奉仕をするためには、幾つかの基礎条件がある。第一に先ず職業に対する正しき認識であり、第二には認識以上の誇りであり、第三には職業に対する心からの感謝である。

各自の職業には、自ら選んだものもあれば、父祖から継いだものなどもあり、様々であろう。だが、その何れにせよ、各位はロータリー会員に選ばれる程その業を励んでおられた方々であり、自らそこには、職業に対する認識とか、誇りとか、感謝などはあると思われる。

だが、職業奉仕はロータリーでも最も重要な基本的のものであるので、ロータリアンになられた以上は、更に逞しく意慾を燃やして、世のため、人のために職業奉仕をして、ロータリー入会以前より更に業績をあげて貰いたい。入会後、成果が落ちるようでは、それは決して望ましいロータリアンではない。

にこにことした、命をかけた職業奉仕、そこにこそ、火と燃える生き甲斐がある。

楽しい語らいのひととき

ロータリーのこころ　VI

四つのテスト

平　治　典

四つのテスト、即ち
(1)真実か　どうか
(2)みんなに　公平か
(3)好意と友情を　深めるか
(4)みんなのためになるか　どうか

は周知の如く、ハーバート・テイラー氏 Herbert Taylor が破産に瀕した、家庭用アルミ製品会社の再建を頼まれて、その仕事に当った時に考え出したものである。

テイラー氏は1932年、製茶会社の社長候補であったがそれを断り、破産に瀕した会社の復興を頼まれて、それを引き受けたのである。

だが、決してそれは簡単なことではなく、いろいろ考えた末これには自分だけではなく、全社員の覚悟と協力とが必要であるとの結論に達し、会員中の各宗各派の神父などにも相談をし、誰から見ても妥当と思われるような座右の銘を作りあげた。

始めは文章として書いたが、文章では如何に立派でも、いざきめねばならぬ、とっさの判断を要する時には間に合わぬので、更に工夫に工夫をこらして、現在のような短い四つのテストにまとめあげたのである。

四つのテストは英語では Four-Way-Test で、これは『四つのテスト』と訳するよりも、『四つ角(カド)テスト』と訳すべきものであり、これは四つ角でどちらへ行ったらよいか迷ったような時に、すぐにこの言葉を思い出して参考にすべきものである。

長い文章と違って、四つのテストなら簡単に思い出して、参考に出来るもので、そこまで作りあげるには、いろいろの工夫と独創とが加えられているのである。

実行は決して簡単ではなく、ハーバート・テイラー氏自身でも、とても満点などはとれぬと言っているが、私が心から氏に感心しているのは、そこに如何に考え、如何に行動すべきかという真実が溢れているからである。

ここではいちいち各項について説明しないが、如何に努力しても満点をとるなどということは、殆んど不可能であろう。

しかし、ハーバート・テイラー氏は確かに、そのテストの実行に真剣に努力し、また社員にも実行させて、破産に瀕した会社を数年かけて、立派に復興したので、決して説教のための説教ではなく、現実に大きな効果をあげたのである。

私がここで最も感動するのは、先ずテイラー氏の燃える情熱であり、愛と誠実でこれを貫いたその実行である。やろうという仕事に対する燃える情熱と実行――これこそが生きた人生の真の道である。

なんとしても、四つのテストに対する燃える情熱を持とうではないか。満点はとれなくとも、先ずやれるところまでやろう。そして、成長するほどに、いよいよ逞しく伸びよう。敢えて四つのテストと言わず、真実を目ざした燃える人生とは、そういうものではなかろうか。

ロータリーのこころ　VII

四つのテスト(2)

平 治 典

私が四つのテストで、もっとも心をうたれることは、そこにテイラー氏の燃える情熱と、実行に対する徹底的な創意工夫があることである。

だが、四つのテストのどの項にも、ほとんど無限の幅があり、ただ言葉を覚えるぐらいでは、まだ真の実行はむつかしく、言葉とともにさらにテイラー氏の燃える情熱を、じかに共感しうる真剣さが望ましい。そして四つのテストはほんらい四ケ条のテストという意味ではなく、迷い易い四つ角でのテストという意味なのだから、その四つに各自が、自己にもっとも望むことなど一、二を加えるのも実行成就への一策であろう。

たとえば迷い易い人は「百策一忍に如かず」とか、克己心の弱い人は「自己との約束は絶対に之を守れ」とか、失敗に弱い人は「失敗に失敗せず、成功への道とせよ」など、いろいろあろう。

四つのテスト知るのは、多くの人はロータリアンになってからであろうが、私もそうである。それまでにすでに私という人間の骨格は出来ていたが、それは無数の人々からの教えと、自らの経験とによるもので、例えば、論語などもその重要なものの一つであり、孔子の教える「忠恕」などは、私にももっとも基本的なものである。

忠とは、生まれたままのまっすぐな心、即ち真心であり誠実であり、恕とは、自分のごとく人をいたわる心、即ちおもいやりであり、愛である。

この真心と愛、たしかにこれはすばらしいもので、四つのテストのうしろにも、必ずそういうものがあると思う。例えば四つのテストの(1)(2)などは主として忠の心であり、(3)(4)などは、主として恕の心のように思われる。真心とは、自己に対し、人に対し、社会に対し、仕事に対して、誠実・公正であることで、例えば自己との約束なども勝手に破って、自分をだましたりなどしないことである。

実は私は、大学入学の一年一学期、自分に約束した勉強が、思うがままできなくてノイローゼになり、自分との約束が守れぬようならもう蒸発しようかなとまで腐り、冬休み前に郷里の越後に帰り、雪の野原をさまよい続けたようなことがあった。

そのある日のことである。ふと幻聴として、耳の病に悩むベートーベン25歳の自戒の言葉が、ドイツ語のまま聞えて来たのである。

「たとえ肉体にいかなる欠点があろうとも、わが魂はこれに打ち勝たねばならぬ。25歳、そうだ、もう25歳になったのだ。今年こそいよいよ覚悟をして、ほんものにならねばならぬ」この瞬間、目がさめ、心機一転、大学1年の2学期、即ち大正10年1月からは2時起床、10時就寝を実行して、やっと自分との約束を果して立ち直ることが出来たのである。やれば出来るのである。やればである。

四つのテストでもっとも大切なことは、ただ言葉を覚えるだけではなく「よし、やろう」という真剣さと情熱である。夢はつねに人々に若さを与える。四つのテスト実行への夢を燃やして、われわれも若々しい世界人になろうではないか。

文殊菩薩の図

ロータリーのこころ　VIII

ロータリーの例会について

平 治 興

週一回のロータリーの例会は、ロータリーの各種の会合の中でも、最も基礎的なもので、多くの下部委員会を持つ、クラブ奉仕の代表的な行事である。

この例会は、ただ集まるだけに意味があるのではなく、友情と奉仕とをめざすロータリアンの、楽しい語らいの場であり、また学習の場である。

ここでは、会員はすべて平等で、互いに年齢や、職業や、地位など、すべてを忘れて、裸になり、あるがままに自由に語り、互いに意見を交換しながら成長するのである。それはまた、その度ごとに行なわれるスピーチなどで、毎週何かを学び、限りない人生の深さと味とを知り、改めて、我と我が身を顧み、いよいよ伸びる意欲を焼やす場である。

これこそは夢を持つわれわれロータリアンの、夢実現の場である。硬くならず、のびのびとした世界の自由人として、明るい例会を持とう。

「生きよう今日もニコニコと、一筋の道ロータリー、限りなき道ロータリー」である。

ロータリーの例会は、それぞれ選ばれた人人の集会で、言わば芸術的な人生の場であり、何よりもそこには、心を溶かすほんのりとした香りが望ましい。

ロータリーは、狭義では、いわゆる「教育」の場ではなかろう。だが、それは教育についての考え方にもよる。

広い意味での教育は、人生の至るところにあり、例えば酒の場でも、踊りの場でも、また市場にも、往来にもある。それは、受けとる人の目と心によってきまるのである。そう言う広い視野から見れば、ロータリーは、確かに、すばらしい教育の場であり、特に毎週の例会などは、その最たるものであろう。

しかし、ロータリーは、ただ受けるだけではなく、同時に与える場で、若者は年寄りに、また年寄りは若者に、互いに受けつ、与えつして成長する場である。

ロータリーで最も大切なことは、ただの理論ではなく、友情と奉仕とを、日々の生活の中で生かすことで、これは家庭生活から始まって、国際生活にまで及ぶものである。

ロータリーのクラブ奉仕には十余の委員会があるが、ここではその一々には触れない。要するにこれらは、ロータリーの例会を如何ように楽しく、且つ有意義なものにして、よきロータリアンをつくるかということのためのもので、ここで絶対に必要なことは、ただまねごとではなく、各自委員会の真の意義をよく弁え、心から協調することである。

そこには、わが大西会長が強調されるユーモアもある。例えば会場監督の S.A.A. などがそれである。 これは Sergeant at Arms の略で、直訳すれば、「軍装の曹長」であるが、楽しかるべき会場に、わざわざ「軍装の曹長」など、いかめしそうなものをおくのはおかしいようだが、これこそはユーモアであろう。

笑いのある会、そして夢のある会、我が京都東ロータリークラブは、いつもそういう例会を持とうではないか。

羅漢寺の柵

ロータリーのこころ　IX

青少年奉仕について

平 塚 興

青少年問題とロータリーとの関係は極めて深く、且つ遠い。最初の少年週間行事が行われたのは1920年で、1946年には世界的規模でのロータリー財団奨学制度が確認され、この制度は次第に拡大され、現在では５種類の奨学金がある。

その後1961年度にはインターアクト・クラブ、1967年度にはローターアクト・クラブの制度が定められ、青少年問題に対するロータリーの熱意は年ごとに強まり、それは最近の４半世紀ではロータリーの活動中、最も顕著なものの一つである。

そうしたことから近来、青少年奉仕は従来のロータリーの四奉仕部門とは別に、新たな独立部門としてはどうか、という声も強いが、まだ、そうはなっていない。しかし、以前は、青少年問題は一部は社会奉仕で、一部は国際奉仕で行われていたが、現在は取扱いの上では、青少年奉仕として、まとめて考えられている。

何れにせよ、青少年奉仕の基本構想は原則的には共通であり、それはよき世界をつくるために、人類の将来を担う青少年に、ただ頭で理解するだけではなく、人類愛的な社会性や国際性などを、真に骨身につけて、なかば本能的なものにして貰いたい、ということである。

私なども、社会性や国際性の重要なことは、頭ではよくわかるが、それが本能的に肌身についているかといわれると、どうも怪しい。この肌身についた、殆んど本能的な社会性や国際性に、私が初めて触れたのは、若い日、スイスに留学した時である。27歳の私は、それまで日本でも経験しなかったほど、ここで温かく待遇され、特に二家族では真の親子のような愛情を受け、大いに感激した。だが、残念ながら、こうしたものは、まだ私の肌身にまでは、ついていないようである。

私などの青少年時代の日本は、世界的にはまだ極東の一孤島で、その国家観や世界観にも何となく、狭さや一人よがりなどがあったが、その点、世界の日本になった今日は大分事情が違い、日本の青少年の感覚にも昔とは違うものがあろう。

だが、この日本の世界性も、主として経済活動などによるもので、その社会性、国際性、文化面などでは、国際的になった今日でも、なお考えねばならぬものが多い。

国際性は言わば世界的の社会性で、それを深めるには先ず国内で明るい社会性を高め、とかく見落とされがちの、日本社会の偏狭性や閉鎖性を改めねばならぬ。日本の政治、経済、教育の面などでも、これを原因とするひずみが少なくない。だが、こうした問題の解決には時間がかかる。ゆっくりいそげ (Festina lente) である。あまり急ぎすぎて、ただ形式的のまねだけでは駄目である。

真に必要なのは、将来を見透す長い目と実行への燃える情熱である。青少年をロータリーが考えるような方向に育てることは、重要中の重要事であるが、忘れてならぬことは、それに対する成人側の真剣さで、今こそ我々ロータリアンは、「各ロータリアンは青少年の模範」なる標語を真剣に考えよう。

聖母像の絵

ロータリーのこころ　X

青少年奉仕について㈡

平　洋興

青少年奉仕の個々の項については、手続要覧に詳しく述べてあるが、不要なことは一つもなく、経験上必要最小限のことのみである。ここでは私が経験した二、三のことに触れるにとどめる。

まず第一は、ガバナーの時、九州地区で聞いたことである。それは、高校生などの短期の交換学生についてのことであったが、驚いたことには、交換学生が最も早く親しくなるのは、多くは、どうなることかと、始め最も心配したロータリアンのご夫人だと言うことである。これを聞いて私は嬉しく、またすぐに納得できた。

それは若い日、私自身がスイスで経験したことであるからである。恐らくそれは、本質的には何も特殊のことではなく、むしろ普遍的のことであろう。国が違い、風俗習慣が異って、感情の表現などにいろいろ相違があっても、人間の自然感情そのものにはそれほど違いはなく、互いに温い心がありさえすれば、何よりも先にそれを感じあうのではなかろうか。もとより、だからといって言葉などはいらぬ、と言うのではなく、言葉が出来れば更によく、言語の重要性は決して忘れてはならぬ。

だが、ここで一つ強調しておきたいことがある。それは、日本人はとかく情緒的だが、外国人は一般に、より知的、より合理的だということである。

それから、ロータリー財団にせよ、米山財団にせよ、外国から日本へ来る青少年に対してのことであるが、そういう若ものへの影響は、ただ直接それに接するロータリアンだけではなく、日本人全体の問題だということである。

この点については、日本ではまだ遺憾のことが少なくなく、せっかく学校などでよい友達が出来ても、下宿に帰ると思わぬ不快に遭うなどという話は、よく聞くことである。これは日本社会が、まだ充分に、国際的な社会性を身につけておらぬためで、その改善には、ロータリアンは特に大いに努力せねばならぬ。

インターアクトや、ローターアクトなども、日本ではまだいろいろの困難があるが、これも日本の社会性や教育制度の窮屈さなどによることが多い。特にインターアクトのように年齢的に高校生を対称とする若者では、その困難さが更に大きい。だがこういうことを改善するためにも、長い目で見れば、インターアクトやローターアクトの意義はいよいよ大きい。

こうした真の国際感覚を身につけた若者が次第に多くなり、これが日本の社会に常識化された時、初めて日本社会は、真に世界に開いた生きた国際社会になるのである。こう考えると、前にも述べた如く、青少年奉仕こそは、将来の日本にとり、更には将来の世界にとり、緊急事中の緊急事であり、我々ロータリアンは、いよいよ青少年奉仕への理解と情熱とを深めねばならぬ。

『二十一世紀』は偏狭な愛国心や功利主義の時代ではなく、殆んど距離がなくなる密接な接触時代で、相互関係はいよいよ深くなり友情と奉仕がますます望ましくなるロータリー時代である。

普賢菩薩の相

ロータリーのこころ　XI

ロータリアンとして心に火を

平 治 典

ふしぎなことだが、私に対するポール・ハリスの魅力は、年ごとに強くなるばかりである。それは彼に備わる独特の近親感で、例えば私の同郷の聖者、良寛に対する燃える情感にも似たもので、抱きつきたいような魅力である。だが、そこには自ら厳として、冒し難い尊さがあるのである。

シュワイツァーは若き日、30歳以後は不幸な人々への奉仕をしようと自らに誓い、30歳にして改めて医学に志し、38歳にして医学博士の学位を得た後、アフリカに渡り、途中幾多の困難をへながら、90歳そこに没するまで生涯の奉仕を実行した。彼は晩年「生命への畏敬」なる思想に到達したが、ポール・ハリスの尊さに対する私の情感は、たとえば、このシュワイツァーの「畏敬」の心に通じるものであろう。

周知の如く、ロータリーは、1905年3月23日ポール・ハリスと共に集まった4人の会がその始めであるが、これこそは荒れ狂うシカゴの中で、人間の清さと温かさを求める独特の会で、人々はこゝで心に溢れるものを吐き出し、新しい希望と力とを見いだし、嬉々として一夜を楽しみ、その前の晩などは嬉しくて眠れなかったと伝えられている。

かくして真の友情は、更に一般への奉仕にひろがり、しかも、この奉仕は、地域社会の奉仕から、次第に国際社会の奉仕へと拡大して、今日に及んで来た。

組織が大きくなれば、自然にこれを括(くく)めるため、いろいろの約束や規則が出来るが、これは何もロータリーに限ったことではなく，尤も至極のことである。こうした規則も、その歴史をよく理解し、自主的に守ってゆけば問題はないのだが、必ずしもそうばかりは行かず、ロータリーの心をよく知らぬ人には、とかく規則などが先きになり、窮屈になったり、形式的になったりする。だが、この点は先人の苦労をよく知らぬ我々は、心して深く考えねばならぬ。

去る4月下旬のある日、私は新緑の東山へ登り、尊い暗示を与えられた。一言で新緑などというが、そこにはただ緑だけではなく、紅の紅葉などもあり、また緑と言ってもその緑には限りないバラエティがあるが、そこには何の対立もなく、総合的に新緑という極致の美を呈していた。個性を生かしながら、全体としての調和を求めるロータリーにも、何かそうした広々とした道があるような気がする。

元 R.I. の会長ラハリー氏は、そのターゲットに「内部に火を燃やせ」(Kindle the spark within) と唱えたが、その実行方法として3D、即ち

(1)自己を発見せよ (Discover yourself)
(2)力を伸ばせ (Develop your power)
(3)目的を表示せよ (Demonstrate your purpose)

を挙げた。ここでは一々説明しないが、深く考える価値ある言葉である。

友よ、人間として伸びられるだけ伸びよう。ロータリアンとして伸びられるだけ伸びよう。そしてあくまでもポール・ハリスの心を心として生きよう。我々はみんな国際的なロータリアンなのである。

宮崎部の柳

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265

R.I. 会長のターゲット

ROTARY BRINGS HOPE

ロータリーは希望をもたらす

京都東 R.C. 会長のターゲット

ゆとり、ユーモア、ヒューマニティ

MONTHLY BULLETIN No. 369 1987・6

ロータリーのこころ XII

ロータリアンの夢

平 治 典

「ロータリーのこころ」も約束の1年になる。最後に言いたいことは、みんな手をつないで、よいロータリアンになろう、ということである。ただロータリーの例会だけではなく、いつでも、どこでも、日常生活の中で、ロータリーのこころを心として、よいロータリアンになるということは、決して簡単なことではない。

私も当クラブへ入会以来三十年余、それを心がけて来たが、なかなかそうはゆかず、今もって自ら許せるような、よきロータリアンにはなっていない。この「ロータリーのこころ」の中でも何度もそういう夢を述べたが、この夢の実行は、決して口でいうほどなまやさしくはない。しかし、私は決してその夢を忘れず、命の限りそれを追及して行きたいと思う。

「ロータリーのこころ」については、まだ述べねばならぬことが数々あるが、しかし、ロータリアンとして最も基本的なことは、概括的ながら、だいたい述べたように思う。舌足らずの点は、いろいろあろうが、しかし、いい加減のことや、ただ人まねをして書いたものは一つもなく、何れもあくまでも自らの体験を基にして、考えて書いたものばかりである。論語の中で曾子は「吾日に三たび吾が身を省みる。人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざるを伝

うるか」と言っているが、いま「ロータリーのこころ」を終るに当って、しみじみ考えさせられる言葉である。中でも特に「習わざるを伝うるか」という項は恐ろしく、この原稿の中でも、時にはまだ充分自分自身でも、修熟しておらぬようなことが述べられているが、しかし、これは決してでたらめを言っているのではなく、何とか自分でも、そういう望みを果したいという気持からである。

ここで一つ考えねばならぬことは、反省などと言うと、従来は弱点のみを考える傾向があるが、しかし、反省とは、本来ふり返って見ると言うことで、とかく外の方しか見ない人間が、ふりかえって、わが身を内側から見ることで、何も弱点だけを見る陰性のものではなく、自らの長所をも見逃してはならぬということである。

私などは高校以来、自己の弱点のみが目につき、若い時は、とかく陰性の自虐的な反省のみをしていたが、これは余り感心したことではなく、体験を積むにつれて、反省にも従来の陰性的のものとは違う、明るい陽性のものがあることを知り、しかもこれが極めて重要であることに気づいた。

問題は、あくまでも積極的に伸びることである。植物などでも、小木の時は曲がっていても、伸びるにつれ、ゆがみは小さくなり、大木になれば必ず真っ直ぐになるのである。徒らに弱点に囚われて、くよくよするよりは、むしろ積極的に自らの長所を知って、伸びられるだけ伸びることである。

だが、現実的には、いつまでも伸びるということは、決して簡単なことではなく、これには真に内から燃える情熱が必要である。これはよきロータリアンになるということにおいても、決して例外ではない。

もう一つ、最後に触れておきたいことがあるが、それは国際性ということである。ロータリーが国家・民族・宗教・言語などを超越して、人類そのものを対象とした、国際的組織であることは、今更いうまでもないことだが、ここで一つ強調しておかねばならないことは、真の国際性とは、単なる模倣ではなく、各民族がそのよき独自性を、いかように他民族のそれと調和して、より高い文化をつくりあげるかということである。

心をむなしくしてみれば、いわゆる先進国にも直すべき弱点があり、逆に発展途上国などにも、学ぶものがある。私などは、若い時は日本を知らず、世界を知らず歩いて来たが、つくづく思うことは、せめて日本の特殊性ぐらいは学び、世界文化の向上に貢献せねばならぬということである。

世界は、いまや正に歴史的な大転換期で、至るところに考えねばならぬことが溢れている。だが、それを改善するのは、人間以外にはなく、それはわれわれ人間の共同責任である。特に、友情と奉仕とをその基礎とする、世界組織たるロータリーなどの責任は大きい。しかも、この責任は、ただ外からの力によって受身的に果すべきものではなく、内なる自らの情熱によって自発的に果すべきものである。

特に嬉しいことは、ロータリーは前にも述べた通り、世界文化の弱点を正す組織でもある。望ましい文化とは、頭の文化（科学的文化）と心の文化（情緒的文化・芸術・道徳・信仰等）との調和のとれたものだが、残念ながら今日の文化は前者は強いが、後者はあまりにも弱く、いびつである。ロータリーの友情とか、奉仕とかいうことは情緒的のことで、心の文化を強めることになり、そういう意味ではロータリーは、現代文化の弱点を正す組織でもあり、いよいよ意味深きものがある。

先日奥西会員と、弟子の許六が師たる芭蕉に別れをつげて、国もとの彦根へ帰ろうとした時、芭蕉が許六に与えた言葉を話しあった。それは「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ」という有名な言葉だが、何ともすばらしく、これはまた、ロータリアンにも通ずると思われる。

ただポール・ハリスのまねごとだけではなく、その限りない偉大な夢を偲び、変化してやまない世界の現実に対応しつつ、友情と奉仕を心として、限りないロータリーの道ひとすじを、歩み続けようではないか。

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265

ROTARIANS——
UNITED IN SERVICE
DEDICATED TO PEACE

ロータリアン——
奉仕に結束—平和に献身
国際ロータリーのテーマ

身近な奉仕
真の友情
ひたむきに新しい友をさがそう
京都東 R.C. 会長のテーマ

MONTHLY BULLETIN No. 375 1987・12

世紀末に向けて

パスト・ガバナー
平　澤　　興

本世紀も余すところ、僅か12年になった。文化の発達はいよいよ加速度的に増し、本世紀には、特に曾てのどの世紀にもないほどの驚くべき進歩があった。注目すべき2、3を拾って見ても、原子力学の発達とその平和的及び戦時的利用、関連科学の発達による宇宙船の発達と宇宙の研究並びに情報及び交通等の異常の発達などがあり、この瞬間にも、これ等の研究は分秒を争うて行われており、明日の変化は容易にこれを予測し得ない。

世界の歴史は、戦争の歴史だなどとも言われるが、本世紀にも広範囲の第一次及び第二次世界大戦の後をひく大平洋戦争では、われわれも古今未曽有のみじめな敗戦を経験した。第二次世界大戦のあとで、1945年10月には国際連合がつくられ、国際間の交渉は出来るだけ武力によらず、話し合いで解決し、更に積極的に世界の平和と繁栄に協力することを誓い、ユネスコ、ユニセフなどの補助機構の協力をも得て教育、経済、文化などの面からも極力平和に努力して来た。だが、国際関係は初め予想したほど簡単ではなく、国連に発展途上国などの加盟国が多くなるにつれ、その関係がいよいよ複雑になり、なかなか思うように行かず、現にイラン・イラク戦争、その他世界の各所に紛争があり、今日もなお世界は決して真に平和ではない。だが、あくまでも現実は現実として、しかと見つめる必要がある。しかし、徒らに現実のみに囚われず、われわれは与えられた無限の可能性を生かしながら、常に逞しい理想を持ち、この目標に向って努力せねばならぬ。

人類の文化が進んだと言っても、神経学の示すところによれば、人類はまだ与えられた無限の可能性を完全に利用してはおらず、その大脳表面の精神中枢にある約百四十億の神経細胞を完全に全部利用した人は一人もいないとのことである。文化の発達はまだまだこれからであり、われわれはその将来の文化を、何とか国際平和の向上に貢献するよう、努力せねばならぬ。

こういう角度から見ると、1905年2月のロータ

リーの誕生は世界史的にも大きな意義を持つものであり、世界の人類がその友情と奉仕によって、世界平和をもたらすことは、何ともすばらしいことである。このロータリーも、まだ完全にその夢を果しているなどとは、とても言えないが、しかし、いろいろな困難にうちかちながら、ひたすらに一筋の理想の道を歩き続けて来たことは特筆すべきことであり、今後もその理想達成に向って、邁進したいものである。

だが、われわれもただ徒らに夢を語るだけではなく、ロータリーの過去82年の活動を反省し、改めるべきものはこれを改め、ただ過去のまねごとで終ってはならぬ。

近頃はよく、近づく21世紀についての希望などが述べられているが、残念なことに、とかくその流れには、思索なきおめでたき夢が多いようである。21世紀が来たからと言って、急に人間の脳力とか、体力とかが変るわけではなく、21世紀の現実は、むしろそれを迎えようとする本世紀末の今日の姿そのものにあるのである。人間の将来の運命は、普通考えられるが如く、将来にあるものではなく、実はむしろ、その基礎をなす現在にあるのであり、すばらしい今日の生活こそ、すばらしい将来を約束するのである。今や人間生活は、正に転換期の絶頂にあるが、今こそ過去のあらゆる経験を生かして、これを将来望ましい方向に生かすべき最も重要な時期である。それはたゞ国家や世界についてのみならず、個人生活においても全く同じことである。

新しい世紀へ向って、私にも夢がある。それは新世紀が、たゞ力の競争だけではなく、より深く人間の内面生活に心が注がれ、人間は他を幸福にすることによって、自らもより幸福になれるという哲理を知るような文化をつくることである。これは容易なことではないが、しかし、面白いことには、現在も地球の縮少化と情報化などにより、国際政治も、ある程度この方向への転換が強制されつつあるということである。160余にものぼるすべての独立国が衣食住にことかかなくなるのはとても大変なことであり、種々の事情で自力だけでは自立不可能なような国も少なくなく、こうした国際状勢を如何ように高い視野と温かい調節によって、自立せしめるかは、誠に重大である。だが、日々飢餓に苦しむ国があるようでは真の世界平和はむづかしく、どうしても今後の人類の努力は、その改善の方向に向けられねばならぬ。これには教育による世界人類の心的改革が必要であり、この先まだ長い時間を要する。こういう意味ではロータリーの友情とか奉仕はいよいよ世界的意義を深めるが、何とか形だけではなく、心と実行のロータリアンになりたいものである。

谷川徹三氏と

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265

MONTHLY BULLETIN
No. 387 1988. 12

PUT LIFE INTO ROTARY-YOUR LIFE
ロータリーに活力を…
あなたの活力を
国際ロータリーのテーマ

“みんなで楽しむこの一年
みんなが尽くそうこの一年”
京都東 R.C. 会長のテーマ

故 山本俊平君

畏友山本俊平君を偲ぶ

平　澤　　興

山本君、君は死んだのか。若い頃「朝臣俊平はこのクラスで一番長生きするぞ」などとよく冗談を言っていた君だ。その君が死んだのだ。君の死を聞いたのは1月2日の午後2時頃だったが、私は全くびっくりした。一瞬立てない程の衝撃をうけた。早速、宇治木幡の君の家を訪ねた。そして仏になった君の顔を拝んだ。ああ何たるおだやかな顔か。この安らかな表情に接して、やっと少し私の心も落ちついた。

君は1898年11月に静岡県の田舎に生れ、私より

2つ年上だが、ちょうどクラスの平均年齢、90歳であった。高校は鹿児島の第七高等学校造士館で、われわれの京大入学の大正9年には医学部の入学総員75名のうち、12名が七高からであった。驚いたことに、七高からの諸君はみなすばらしい人たちばかりであった。これはいいかげんのことをいうのではなく、私はしみじみと、七高出身者の人間性のすばらしさに感心したものである。私はクラスの誰とも仲よくしていたが、しかし、その中でも、七高出身の山本俊平君、青柳安誠君、木村潔君などは私の生涯の心を許す親友であった。たしかに七高出身者には七高出身ならではの独特の風格があり、それぞれ異なる個性を持ちながらも、そこに何か共通のもの、例えば誠実、勇気、温情、無私、明朗などがあり、しかも、バラバラとしてではなく、これらが渾然一体となった香り高いものであった。

山本君などは、そういうものがからだにとけこんでおり、学生時代からクラスのすべてからそれを認められて、心から親しまれて来た。あまり理屈っぽいことは言わぬが、どんなややこしい問題でも、君が一人はいると、自然とうまく話がすすみ、和やかに解決した。随分とやかましい理屈家もいたが、どうしたわけか、山本君には歯がたたなかった。私は山本君の父君には、ついにお会いする機会がなかったが、君が時々語る父君についての断片的の話の中に、何かそういうものを感じさせるものがあった。しかし、あの山本君の柔かで、しかも筋の通った強さが、どこから来ているのかは、今もなお私には、よく分らぬものがあるが、とにかく、私などから見ると、むしろ不思議な人であった。

山本君は私らと共に大正13年(1924)京大医学部を卒業、直ちに皮膚科の松本信一教授の許に残り、助手、講師を経て関西医科大学の前身、大阪女子高等医学専門学校の教授となり、ここで抜群の好評を得て昭和20年教授として母校に帰り、その後は京大病院長や京大医学部長などをも勤め、常に優秀な成績を挙げた。また京都東ロータリークラブのチャーターメンバーで、その第二代目の会長であり、私なども君と青柳君の推薦で1957年4月、当クラブの会員になったのである。昭和37年定年退官、定年の前年から特別の事情により大阪の北野病院長となり、更に昭和40年、偉大な理想をもって新設された天理教の病院、“憩の家”の準備に当り、続いて初代院長となり、逝去まで院長、名誉院長などを勤め、教団の病院としては歴史的運営の実績を挙げた。

山本君はどこへ行っても、その周囲にはいつもほほえみと人の和があり、必ずうまく治まった。あえてむづかしいことを言うわけでもなく、また説教するわけでもないが、談笑の間に、山本君の周囲は明るくなり、笑が生れるのである。

昭和21年の京大解剖教室は、戦後いろいろの事情で3人の教授がすべておやめになり、一時教授が1人もおられなくなり、後任教授の選考が始まり、当時新潟医科大学にいた私が、その後任に内定し、私を京都へということで、先ず山本教授が新潟へ見えて、いろいろとすすめてくれた。しかし、新潟医科大学は断固として、私の京大転出を拒否し、私にもいろいろの事情があり、その実情を述べて京大復帰をお断わりした。もの分りのよい山本君は、京大とは板ばさみになり、さぞ苦しかったと思うが、よく了承してそれを京大医学部へ伝えてくれた。しかし、京大ではなかなか諦めず、更に木村廉医学部長、ついには学部教授の選考としては前例のない鳥養利三郎京大総長と医学部長と同道で新潟まで来られて、新潟医大へ厳しい懇願があり、新潟医大もついに諦めて私の京大復帰を認めて話がまとまり、山本君には随分とご迷惑をかけた。こうした間における山本君の情理を尽した、心のこもった友情には、唯々感激があるだけである。

私には山本君と共に生涯の無二の親友として、やはり同級の京大外科教授青柳安誠君がおる。この2人はお互い同志、また文字通りの親友だったが、しかし、その人間的肌合いは大分違い、一口に言うと青柳君は如何にも外科的で、言いたいことは、ハキハキと思う通りに言った。私が京大へ赴任して先ず驚き、且つ感心したことは、2人は個人的には親友でありながら、ある教授の選考に当り、選考委員として堂々とそれぞれ自らの意見を主張して一歩も譲らなかったことである。公私の別とは、こういうことをいうのかと私は改めて教えられ、2人に対する私の尊敬は更に深まった。

もう一つ青柳君、山本君の友情について伝えておきたいことがある。それは昭和28年の京大総長選挙の時、青柳君は山本君などと相談して、心を許すごく少数の友人と共に、総長候補になった私に否の投票をしてくれたことである。当時は私は

そんなことは少しも知らなかったが、私を本クラブの会員に推薦した時、平澤君は総長選挙の時、私が否を入れた人だと紹介したので、私も始めて知ったのである。この時は僅か数票の差での落選であったので、この落選こそは、研究室に残りたいという私のほんとうの気持ちをよく知っていた青柳君達数名の友情の賜で、しみじみと感謝している。しかし、こうした心のこもった否の数が何人であったかなど、その詳細は今もよく知らぬのである。ところが、私が当選した昭和32年の総長選挙の時には、もう否を入れても、とても当選はさけられまいとの考えで、どうせ当選するなら賛の多い方がよかろうと、青柳君は遠い出張先から夜行で帰って、「賛」を入れてくれたとのことである。４年おくれただけであるが、しかし、この４年は私には研究、その他の点で大変有難い４年であった。ロータリーではやかましく友情などと説くが、こうした青柳君や山本君の友情こそは、ほんとうに心のこもった、真の友情だと、思い出すごとに感動している。

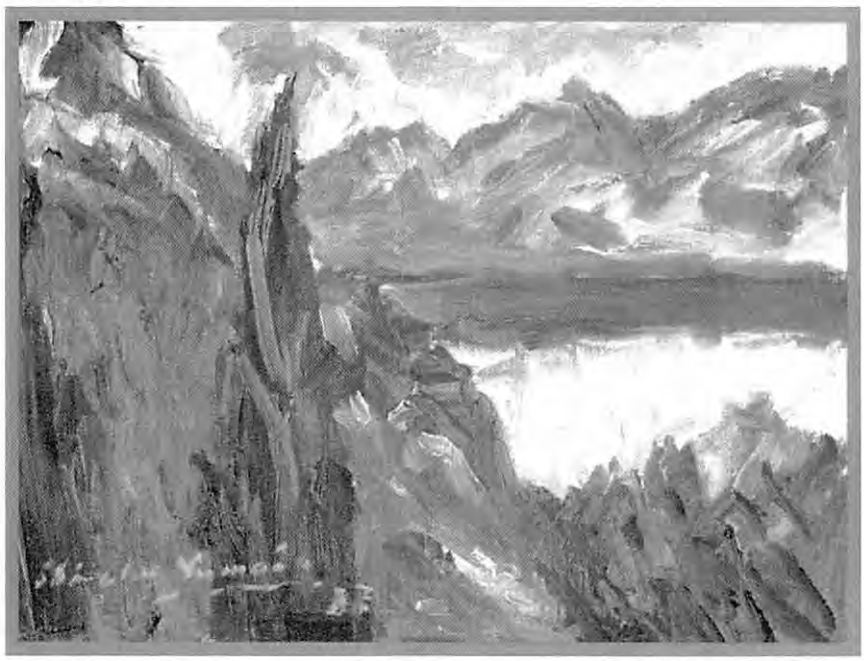
若い日の私などは、余りにも解剖学的で、固くて窮屈であったが、山本君や青柳君などから教えられ、その友情から得たものには無限のものがある。特に山本君には山本君ならではの独特のものがあった。それは、人間全体としてのおおらかさであり、総合性である。恐らく君のその一部は先天的、遺伝的であり、一部は後天的のもので、君自らの精進によるものであろうと思われる。だが、私は先天的一部に就いても、また後天的一部に就いても殆んど云々するだけの充分の材料を持たぬのである。しかし、君が心から敬服していた松本信一先生から受けたものが、何としても最も大きなものであったであろうと思われる。私も松本教授からは学生として教えを受けたが、先生にはそれぐらいではとても分らぬ深いものがある。私も四高の先輩としてそのごく一部を伺うことが出来たが、とにかく先生は人間離れのした偉大な存在で、接し易いが、しかし、悦はしめ難い人であった。山本君は、こういう先生に長く誠心誠意お仕えしている間に、いつとはなく、この偉大な先生の一部を体得したものと思われる。

山本君！君の姿はもう見たくとも見えなくなったが、君の心はいついつまでも、私の心の中に生きている。これからも頼む。１人の人間として、明るく、楽しく、生き生きと生きられるよう、導いてくれ――。これが来年90歳になろうとする私の心からの願いである。

山本俊平会員と御家族

ROTARY CLUB OF
KYOTO-EAST
DISTRICT 265

MONTHLY BULLETIN
No. 388 1989. 1



PUT LIFE INTO ROTARY-YOUR LIFE
ロータリーに活力を…
あなたの活力を
国際ロータリーのテーマ

"みんなで楽しむこの一年
みんなが尽くそうこの一年"
京都東 R.C. 会長のテーマ

平成元年を迎えて

パストガバナー
平　澤　　興

昭和天皇の崩御により、年号が平成と変ったが、私はこの新しい年号が大好きである。その文字もよく、響きもよく、あかるくて、しかも軟らかい。しかし、年号の真の評価はそんなことによってきまるものではなく、その時代の実績によってきまるもので、具体的には、国民の象徴なる天皇と、政治的主権をまかされている国民の努力によるもので、今こそわれわれは覚悟を新たにせねばならぬ。

何としても忘れてはならぬことは、時代と共に世界の動きが次第に変ることである。私は明治を最後の12年、大正・昭和は完全に之を経験し、今新しく平成時代を迎えたわけだが、それぞれの時代にはそれぞれの姿があり、色々と時代による変化があったが、しかし、今迄の国政の主流は、日本国中心というところにあり、それはそれでよかったと思う。しかし、第二次大戦以後は、国内政治もその国だけを考えるのでは不充分で、国内政治にも世界的動向が次第にその重さを増し、今後の日本の政治は国際的考慮なくしては不可能にな

ってきた。幸いこうした考え方は国民の間にも次第にひろがりつつあるが、特にここで注意せねばならぬことは、こういうことはただ理知的理解だけではだめで、これには身体にとけた日常生活での国際感覚とか、人類愛が必要だということである。こうした国際愛が真に日常生活の心の中にとけこむと、もはや国際的などという言葉も不必要になってくる。残念ながら、私自身もまだ、そこまでは達していないが、外国などにおける今迄の経験から、その筋道は確信を以て断言できる。これが日常生活の感情にまで成長するには、どうも家族の一人だけではまだだめのようで、できれば一家全体がそうなることが望ましく、それには長いこの国の習慣や、社会の在り方なども変えてゆかねばならぬ。

私は27歳から29歳まで欧米、特にスイス国に留学したが、ここで私は解剖学の研究以上の大きなものを体得した。それは特にスイス人の中にとけこんでいる温かい国際愛であった。スイスで私は、それまで日本でもまだ経験しなかった程の、うちとけた心からの愛情をうけた。やがて90に近い私だが、今も私はそれに涙が出る程感激している。私を実の子供のように世話して下されたのは、貿易商のリットマイヤー家と、薬剤師のフィッシャー家だが、この２家族では私に「お前言葉」で話して下され、始めて訪れた時には歓迎門をつくったり、また旅行などをすると、その先々までホームメードの菓子を送ったりして下さった。私がいたのはスイス北部でドイツ語地区であったが、「お前言葉」の独逸語は動詞の働きが、普通の「あなた言葉」とは違い、始めはむつかしかったが、私もすぐそれには慣れて、スイスでの日曜日は殆んどこの両家でおくった。両家とも、その家の一番よい部屋を鍵などは一切かけず、私に貸して下され、朝なども私の早起きをとめてコーヒーはベッドで飲めと言われて困ったことや、旅行中送って下さった菓子が途中でくさって勿体ないと思ったことなど、思い出はつきない。考えて見ると、こうしたことは、若い私の人間づくりに予想以上の大きな影響があったと思う。

去る１月27日のクラブアッセンブリーで、いわゆるファイアサイド・ミーティングの苦労話しが出て、世話された方々の並々ならぬお骨折に心から感激した。しかし、ファイアサイド・ミーティングは、本来ストーブにあたりながら、一杯のみながら、思うがままに話し合い、思うがままに楽しみ合う会で、あまり気苦労のいるような状態では、とても本来のファイアサイド・ミーティングではなく、何とかもっとザックバランに話したり、飲んだりする、楽しい会が持てないものかと思った。そしてその時も言った如く、深く考えると、これはただ京都東ロータリークラブだけの小さな問題ではなく、平成時代の日本を今後いかに国際的に成長させるかという大きな問題の一つで、ただ理知的に考えるだけではだめだということ、せめてもの分かりのよいわが京都東ロータリークラブ位では、いつでも、どこでも、気楽に真のファイアサイド・ミーティングが出来るようになりたいものである。

中国の古典、大学に「身修(マリテ)而后(トトノエ)家斉(シカルノチ)、家斉而后国治(マリ)、国治(ブチ)而后天下平(タイラナリ)」とあり、略して屢々「修身斉家治国平天下」などと書くが、これは真の政治家のあるべき姿を書いたもので、如何にも自然で、その根本精神は今でも通じるように思われる。「天下平なり」とは、当時は中国全体ぐらいのことであろうが、世界を平和にすると読めば、この言葉はそのまま今も生きているように思われる。何としても、世界を平和にするための第一のものは、先ず各人が自分自身を正しく修めることで、それによって次には家庭を、更には国を治め、遂には世界に平和をもたらすということは、ごく自然のことで、先ず近きより次第に遠きに及ぼすということで、心理的には遠心的な働きである。だが、情報化時代の今日では、この遠心的の働きだけでは不十分で、どうしても逆に遠くから近くを見る心、即ち世界から日本を見るような求心的な心の働きも大切であり、むしろこの求心的見方が漸次その重さを増してくる。終戦までは日本は日本の日本であり、せいぜい東洋の日本だったが、欲すると欲せざるとにかかわらず、今では文字通り世界の日本へと成長しつつある。

幸いにロータリーは国際的組織で、国家、言語、宗教、民族などを超越して、人類そのものに焦点をあてた友情と奉仕の組織で、これも今迄は遠心的に近くより遠くに働き、地域社会から国際社会へと成長して来たが、今後は我々は逆に遠くから近くを見て、求心的にも成長しながら、更に互いにその親密度を加えて、ますます世界の理解と幸福に奉仕したいものである。

ああ、人間何としても伸びられるだけ伸びよう。人生を讃美して、これを楽しもう。表も面白く、裏も面白い。平成元年――期は正に熟している。日本人として、世界人として、真にあるべきロータリアンの姿を夢みつつ伸びよう。夢はいくら大きくてもよい。全宇宙にまたとない尊い人間、ふしぎな人間だ。

天を拝み、人を拝み、己を拝んで伸びよう。

平成元年２月１日　薄化粧の東山を眺めつつ

平澤 興 先生の
フォーラムでの発言集

発　言　集

先生の、いろいろな会合での、主な発言を、抜き出したものです。

東R．C．月報100号記念

歴代編集者座談会

月報#100　1965年3月号所収

平澤

〈記録について〉記録と言うものは、その当時こそ大したこともないと思うが、後になって読む時、面白いですね。日本人は記録に対して無頓着だね。例えば、大学で登山とか探検した当時の記録、その時はそれ程のこともないと思うが、10年もたってみると、その時に使用した装具、わらじや脚絆の記録等、如何に進歩したかと言うことがわかる大変大事なことだそうだ。

平澤

〈会報のあり方〉100号ということは大変なことですね。たとえば、写真が載っとるとか、載っとらんとか、形式も色々違うようだが、その違うところに面白味があるのでー違うということを裏から見れば、絶えず委員会が努力して下さったと、言えると思うのです。始めになかったことが後に出来たこと、0から作ったこと、これは大変ですから、この意味で後の完全なものより、かえって値打ちがあるとも言えましょう。また、クラブに体臭があるように、会報にも夫々の委員会の体臭があり、否あるべきものと言えましょう。

〈東クラブの程度が高いと言われることについて〉東クラブが程度が高いと、もし言われているとすれば、それは考えもので、仮りに本当に程度が高いとすれば、すべての会員が満足出来るように、話が出来ねばならぬし、難しい話をして、わからぬ人があるとすれば、わからぬ人が悪いのでなく、そのスピーカーの見当のつけ方が間違っている。何故なら、あらゆることにクラブ全体としての、活動を考えていかねばならぬのであって、このようなことでは、決して程度が高いとは言えないのである。もしこのような評判があるとしても、空よろこびは出来ないのである。もし本当に高いのであれば、それは誠に結構であるが、それをこともなげに、高い様に見せないための努力を、お互いにせねばならぬとも私は思います。

あまり評判にこだわることもないが、程度が高いと言われることは、決してほめられてばかり、いるのではない。これは吾々として、反省せねばならぬことではないかとも思います。そうかと言って、殊更程度を下げる必要もないが、下げないでいて、高く見られぬようにするにはどうしたらよいか。これ即ちロ

ータリアンとして、生長あるのみであります。

会報としては、うまく出来ているということよりも、どこを見てもロータリーの精神があふれているということ、冗談を言っても批評をしても、妙なセンチメンタリズムにならず、どの記事にもロータリーの気分があること、これこそロータリーの活きた、会員の会報であることが大事だと思います。

お互いは、義務で会員活動をしているのではないのだから、楽しい、そして本当の意味のロータリーの追究が出来れば、これにこしたことはないと思う。会報も100号になったこと、これは委員会だけの喜びではなく、クラブの皆の生長の賜であって、現状大いに結構。更にこれをよくするのは、これまた会員全部の、今後の努力と精進にあると思う。とにかく世界的の笑いを笑えるような、そして世界的胃袋になるような、ロータリーとその会報がほしいと思います。

1967～68年度　国際ロータリー　第365区

地区協議会－研究討論会

昭和42年6月24日

次期ガバナー平澤興

〈会員増強について〉…（前略）…ロータリークラブの増強に、いかに協力するか、これは明年度だけの問題ではありません。また、365区だけの問題でもありません。日本のロータリークラブの、全体の問題でもありますし、同時に程度は違いましても、世界のロータリークラブ、全体の問題だと思います。

いわゆる外部拡大、会員の数をふやすとか、クラブの数をふやす、ということ等々の問題と、もうひとつは内部拡大、ロータリーの質の上の拡大、各職業があまり一方に偏しない、調和のとれた成長、個々の会員から申しますと、ロータリアンとしてのあり方、そういうような問題があります。

いちばん願わしいのは、内部的にも、個々の会員がお互いに努力をして、よりよきロータリアンになる。そういう質的の問題。同時に、外に向かっての増強と申しますか、会員なり、クラブを増すこと。この二つが相携えていければ、それに越したことはない。この問題は地域ごとに、まだ職業分類なんかで、残っておるようなところ、ほとんど出つくしておるところ、それに近い状態のところなどと、それから、またクラブの歴史がありますから、そう簡単ではないと思います。

実は、先程言い落としましたが、今度のアセンブリーや国際大会で、しみじみと思いましたのは、日本のロータリーの成長であります。日本におけるロータリーの成長は世界の驚異であります。

そして、ごく卒直に申しますと、質ということになりますと、きびしい会員詮衡を経ているのでありますから、会員がロータリーの規約に背くような、そういう人は決していないのであります。しかし、世界的に考えました場合、質的にも確かに、ある程度の目標に達しておるが、今後の日本の、あるいは、365区のロータリー活動というものを考えますと、質の面でも格段の努力を要する。つまり、ロータリアンということで、ただいい気持になっておるのではなくして、いかにもロータリアンらしい、そういうように、努力しなくてはならんと思います。

次期ガバナー平澤興

〈会員の呼称について〉どこで会ってもヤアーというということ、現実とだいぶ離れておることは事実ですが、せっかく、ああいう場がありますから、そういう気持になりたいと思います。

外国のロータリーでは、ご承知のように、みな平澤というようには呼ばない。興です。公式の場合は手続要覧をみますと、名前を呼ぶようでありますが、実際は、例えば、今度の会長はルーサー・ホッジスですが、ルーサーというふうに呼びかけておる。むこうでは、すこしも不自然では、ないのであります。興と呼ばれても、日本で興といわれたら、誰のことをいっているんだろうかと、思うかもしれませんが、むこうでは興というのは、いいやすくもあるわけですね。すこしも不自然ではない。

このことは、日本では国情が違うので、あまり頭がはげたりしていますというと、平澤ぐらいのところが、適当らしいんですが、クラブの中では、堅苦しくならないで、もっと裸でつきあえるように、できたらと思います。

〈社交性について〉私は今度アメリカ、フランスへ行って、はじめて行ったわけではありませんが、しみじみと感じましたことが、二つばかりあります。ひとつは、クラブ生活というようなものに対する、われわれの経験の浅さと申しますか、社交性の乏しさといいますか、それは、何も会員になるとかならないとか、そういうことではありません。

ほんとうにハラを打ち割って、裸になってつきあうということ、そういう社交性、社交性という言葉は多少疑問がありますが、もっと人間としての、自然性といったほうが、かえっていいのかもしれません。

もうひとつ、体力の問題、短期間の頭の働きの競争や芸術の競争ならば、日本人がいちばんと、いうことではありませんけれども、どこに行っても、立派にやれるだろうと思われるわけでありますが、長期間の体力を要する仕事にはどうもよくありません。

さて、社交性といいますと、お互いがほんとうにその気持になってやりませんと、むずかしいんです。むずかしいから、ますますがんばって、お互いに信頼し合う。

いうなら、兄弟たちですから、そういうものはもっと気楽に、明るく、裸でつきあえるようになりたい。私もその気持ですから、そのことは強調したいと思います。

それには、例えば今日は会長、幹事、クラブ会報委員の方がお集まりになっていますが、およそ、綱領の第1にありますように、奉仕のひとつの機会として、知合を広めるということですから、この会はこのままお互いが、名前を全部いちいちおぼえるわけには、まいりませんでしょうけれども、せめてきょう集まった人は、きょう以後は、そんなむずかしいことをいわず、信頼できるというように、これからひとつ勉強したいと思います。

次期ガバナー平澤興

〈例会運営とスピーチについて〉これには、二つの面があるんじゃないかと思います。ひとつにはクラブの団体生活というようなものに慣れられないと言う問題。ロータリークラブには、ロータリークラブのあり方がありますから、そういうこと自体が窮屈だというのであれば、それはクラブの生活に慣れないというか、そういう組織の生活に慣れないということであって、もしそれなら、そういうことを教育する必要があるんじゃないか。

もうひとつは、実際に1時間の会で、いろいろの型はあるが、その中でいかに楽しく、有益に過ごすか。これも例えば、レークプラシッドでやかましい話がありました。スピーカーを、どうも外部から頼みすぎるじゃないかと、いう意見がありました。結局、それは地域によって、いろいろ事情がある。

ドイツのロータリーでは、スピーチがいちばんうまくいっておるようだ。というのは、ある会員が話をする。なるべく会員が話をする。そのあとで討論会がある。ドイツ式のありのままの批判がとぶ。それをドイツ人はどうこう思わない。やりこめられたとは思わない。それが日本などでは、ちよっと批判が出ると、賛成なら結構ですけれども、何か揚げ足をとられたように思う。そこらのところも社会的な訓練だと思います。

だからスピーチをおもしろくといっても、ドイツの場合と日本の場合、また日本の場合でも、地方と都会とで違ってくるわけです。そういうところは、だんだん、お互いに成長していくより手はない。だから一方では教育をしながら、一方では楽しい会合。なかなかむずかしい、相反する要素ですが、やはり国際的な組織にまで成長させるには、緩めることのできないものと、もうひとつは、その中で楽しむ、どうも、そういうことになるんじゃないか。時間がかかると思います。

〈若いロータリアンに〉若い者は、ただ求めるだけでは、いけないのであって、若い者自身が、自主的にやらなければならないと思います。そのことで、私はフォアウェーテスト（four-way test）のすばらしさを思うわけです。読んでみれば何でもないようですが、これをほんとうに問題を解決する場合にあてはめてみたら、なかなかこの四つのテストに合うようにはできません。

真実か、道理に合っているか、道理に合うだけではだめ、フェアーか、フェアーだけではだめだ。結果において好意と友情に合っているかどうか。それから第4に総ての人にそれができるかどうか。第3、4はいかように、こちらがしたくともその社会の高さといいますか、民度というようなものが問題になってきます。

これは同時に、ロータリーの活動を考える場合に、すぐに地域社会の、共通の高さというものが問題になる。これはロータリーの中でも、同様だと思いますが、現実の問題としては、それに反するものをふまえて、指導していかねばならんと思います。とくに、幹事が若い幹事であるような場合には、正しいことをやっているんだが、一方から反対が出る。しかしそれは、やらなければならないということで、大変ご苦労だと思います。

そういうような場合には、あんまり鉢巻姿にならないで、全部の賛成をえないにしても、大多数の人が賛成するような方向に、指導して頂くより、ほかないんじゃないかと思います。これはひとりの人が、どれだけ努力しても限度がありますから、クラブ全体としての成長ということだと思います。ロータリーの精神に通ずるということになる。

次期ガバナー平澤興

〈公式訪問について〉公式訪問があるということで、十分準備をして頂くことは、大変ありがたいのですが、いかにも、試験の準備でもするような気持ちで、やっておいでになるならば、それは無駄な労力であります。そういうつまらん心配をしないで、もっと積極的に内容的に、ご準備を願いたいと思います。

決して、公式訪問は、あげ足を取るとか、点数をつけるとかいうようなものでは、ないのであります。

皆さんとガバナーの仕事は、各クラブごとに、いかように、そのクラブがよりよくなるか、ということを、いっしょになって、勉強することであります。

ただそれはガバナー１人ではもちろんできません。会長、幹事だけでも、できないのでありまして、各クラブの会員すべてが、そういう気持ちで、ガバナーのくる日は楽しい日だ、というようなことにしていただきたいと、お願いいたします。

〈情報について〉ロータリー情報でありますが、ロータリー情報は内部拡大にしましても、すべてのロータリーの活動に、必要なのでありますが、これには、ここで、細かなことを申すよりも、手続要覧があります。それからロータリー問答がございます。

また一般会員ならば、ロータリー手帳の情報で足りるかというとそうではありません。あれぐらいのことは、常識であります。そして、その規則を文字通りに覚えるということよりも、規則の気持ちに通じて、これを生活の中で生かすことが大切であります。

ロータリーは頭だけで理解したのでは、まだ、決してロータリーの全活動ではないのであります。われわれの体につけ、肉につけて、日々の生活に生かしていくことだろうと思います。そういう意味では、どうしても情報というものも、ロータリアンとしては必要でありますので、なんとか、そこを皆さんのほうで神経質にならないで、手続要覧とかロータリー問答などをご覧願ったらと思います。それを読んでもピンとこないところがあります。

たとえば、人の呼び方にしましても、実は日本の社会生活の断面が、そこにあるのであります。ただ呼び方が「君」だとか「さん」だとか「先生」ということではなく、日本人の精神生活の中に、そういう要素があるのであります。これは、実は表現以上に、もっとむずかしい、もっと考えさせられる、いろいろな要素があります。

それは、先ほど申しました、東洋的なやや消極的な、西洋的な積極的な、しかし、消極的とか積極的とかということも、実は表面的な観察であります。より深く考えますと、そこには、われわれの歴史、東洋や西洋の歴史がありますが、そういうものを越えていかなくてはならぬ。これはほんとうに、なかなかむずかしい問題であります。

今のような名前の呼び方ということは、具体的でありますから分かりますけれども、そういう具体的でない問題に、同じようなものが含まれておるのであります。その点はまた公式訪問のときに、私自身が気がつかないようなことを、よく教えてもらいたいと思います。…（後略）…。

次期ガバナー平澤興

〈情報について〉広い意味の情報というのは、情報委員だけの仕事ではございませんね。これは理事、役員なんかはもちろんでありますが、経験の深い人は全部、情報委員であろうとあるまいと、そのクラブのロータリアンとしての歴史の深い人は、私は情報係だと思うのです。そういう意味で、ご協力を願うよりほかないのです。

これ実際、一朝一夕には自分自身でも分かることはできませんから、ほかの人にお願いする場合は、口で言ったからすぐ分かると、いうものでもありません。情報というような

場合には、どうも、何度いってもよく分からんなあ、なんていう話もないわけではありませんが、それは分かるまで、頑張るより手はないのであります。

情報については、個々の問題では、ロータリー問答とか手続要覧などに書いてありますが、ロータリーは、これで完成したのではなくて、やっと今は、ワールド・コミュニティーというところまできた。今まではインターナショナル。インターナショナルは、いうまでもなく国際でありますから、国なり国民というものがありまして、そのお互い同士が、うまくやろうというふうな、感じだと思うのです。

ワールド・コミュニティーのほうは、そうではなくて、国境というようなものを考えないで、お互いがもっと身近なものとして考える。これはもちろん、考え方でありますから、それは飛躍しているという見方もありましょうが、私はここには、単なる飛躍ではなくて、62年のロータリーの歴史があると思います。まず国というものを考えて、その中を良くするという丈ではなくて、もう少し身近に世界を考えようじゃないかと言うことです。まことに、現実とは離れておりますけれども、その現実と離れたことを考えていくところに、ロータリーの明日があるんじゃないかと、そんなふうに考えております。

そういう意味で情報は無限にありますから、ロータリークラブのすべての人、とくに、古い人はみな情報委員のようなつもりになって、ご協力を願いたいと思います。…（後略）…。

次期ガバナー平澤興

〈新クラブ結成について〉新クラブ結成ということについては、ざっくばらんの話を申しておきます。日本で私が考えておりましたのと、レイクプラシッドの現場で世界中のノミニーが集まった場で、自然に考えるのと感じ方が少し違います。十分なる行為をしないで、ただ増すということはどうかと。しかし、質は先ほど申しましたように、しかるべき基準があってやっておるのであります。

ものは、そこで止まったときには、必ず退歩するんですね。ロータリークラブが世界の組織として進むためには、止まってはならんわけです。

そのことを、私は医学をやった人間ですから、早く新陳代謝がなければ、どうしても前進ということはむずかしいと思うのであります。そういう意味で、質の問題は、きわめて重要でありますが、同時に、それだけにとらわれては、いけないのであります。やはり、前向きに数をふやすということも大事です。

大きく、世界の組織として考えた場合に、それは大事なことです。それは、後退をしないために。同時に、その場合には、質の問題も考えねばなりません。入ってからの教育と申しても、ロータリーは教育機関ではありません。けれども、なんとなしに、ロータリーのふん囲気の中に、大人になれるような、そういうすばらしい空気を作りあげること。良い人を入れるんだが、ロータリーへ入れば、ますます良くなると、そういうふうになったらそれは大変結構です。そんな感じがいたしました。

外部拡大も非常に重要なんだということ、これは、皆さんはそう思っておられるでしょう。私自身はこのたびとくに、そういう感じを現地で強くして帰りました。そういう意味で、決してただふやせばいい、ということではありません。質を考えながら、しかし、外

部拡大をやらないかん。まことに、きまりきったことでありますが、私としては、きまりきってはおらんのであります。

1967～68年度　国際ロータリー　第365区

地区協議会－本会議

昭和42年6月24日

平澤次期ガバナー

〈ロータリーの内的外的拡大について〉われわれは、国際ロータリーの365区を明年度動かす、中心の人間であるということを、覚悟を新たにしてもらいたいと思います。

ロータリーは、どこの土地へ行こうとも、ロータリアンはそういう意味では、世界人であります。世界的なセンスと、世界的なものの考え方で、会を運営して頂きたいと思います。決して、規則をよく知らんから、というようなことで卑屈になられることは、ないのであります。

きょうから規則の勉強をお始めになっても、決して遅くはないのです。また、やむをえず会長などになったというようなことは、もはやこの段階になっては、決して言ってはならないのでありまして、皆さんは、たとえどういうプロセスであろうとも、やはりしかるべく選挙をされて会長、幹事等になられたのでありますから、皆さんは確信をもって、自信をもって、情熱をもって、やって頂きたいと思います。

私は、ロータリーにおける一つの大きな問題は、ロータリーを如何ように前向きに成長させ、内的拡大のみならず、外的にも拡大していくかと、いうことであると思うのであります。その面では、第2正会員とか、インターアクトの問題とか、あるいは、ロータリー財団におけるところの、フェローシップ等々いろいろな種類がありますが、これは皆さんはよくご存じだと思います。

とくに、こんなことを申しますのは、私はこの間、グループ・スタディ・エクスチェンジの方が6人、奥村先生によって指導されたのでありますが、絹川委員長、奥村リーダーというような方々の、ご熱意によって行なわれた、その学生の報告を聞きましたが、実にすばらしい。

私は40年来大学教育に関係しておりましたが、端的に申して、わずか2ヵ月で6人の諸君が、あれほどすばらしく成長して帰った、あるいは成長しつつある。たしかに、成長している。それを、まのあたりに見まして、感激を新たにしたのであります。それはなぜか、昔の人もみな勉強し成長されました。昔も一つの研究というようなものの成長ぶりは、たしかに、すばらしいのでありますけれども、部分的な成長であります。

今度のグループ・スタディ・エクスチェンジの学生の2ヵ月の成長ぶりは、人間全体として、その土地－つまり具体的には、カリフォルニアの522区へ行った－と、そこの人間と、そこの歴史等々を、全般的につかんできております。もちろん2ヵ月でありますから、つかみ方は決して非常に深いとは、申しませんけれども、いかにも若者らしく、しかも問題になるようなものは、しっかりと身につけております。

日本人の若者の知能は非常に信頼すべきもので、これは世界的に認められておりますが、

しかし、そういうふうな社会的な訓練、人間全体としての社会的な訓練というものにおいて、少なくとも過去においては、不十分であります。そういうことを、しみじみと感じていた矢先でありましたので、この6人がわずか2ヵ月の人間成長ぶり、やがてこの人たちは成長します。どしどし、こういう人を送りたいと思うのであります。これは絹川委員長ならびに奥村リーダーの、陰にあってのすばらしい並々ならぬご指導があったとは思いますが、同時に、行った6人の学生、たしかに、すばらしい人であります。

そういう意味で、来年度は今度は逆に、日本が522区から受け入れる番であります。いずれ皆さんにも、格別のご協力を願わねばならぬと思いますが、この間のグループ・スタディの人々を見まして、これは、やり甲斐のある仕事である、ロータリーのため日本のために、いや、人類の将来のために。もちろん、専門的な研究も必要でありますが、今まではなかった、人間全体としての、教育と申しますか成長と申しますか、そういう面において、私は実は目を見張った。私は若者が好きでありまして、40年間ずいぶん若い諸君を、見てまいりましたが、なるほどこれは、大したものだということを感じました。

〈奉仕の理想について〉それから私は思うのでありますが、われわれは、共同の、奉仕の理想をもって、世界のために地域社会のために、個人としてまた家庭人、職業人として奉仕の生活をしようという、共同体であります。同じ目的に向かって進むところの、兄弟であり同志であります。

少なくとも、われわれの365区のロータリアンのすべてが輪になり、すべてを讃美しながら、前向きにいきたいと思います。

よく自然を征服するといいますが、征服という言葉はコンカー（conquer）といいますが、この語は実はその方面の専門家の田中秀央先生から聞いたものでありますが、研究し尽す、という意味だそうであります。勝つとかなんとかという意味は第2、第3の意味なんです。

そもそもは、研究し尽す、問題を解決し征服することは、いいかげんに、ただ方法を考えるのではなくて、研究し尽し、全力を注ぐということだ、語源的にはこうだ、ということを聞いて私は感心したのであります。

われわれはできるだけ研究をして、その及ばざるところは、きょうからでも努力をし、365区のロータリー活動が決して、世界の国際ロータリーの、前進の方向にそむかないのみならず、なんとかして、少しでも、前向きに前進するように、いたしたいと存じます。

ただ、そこで申しますが、そのために、神経質になってはならぬ、ということであります。ホッジス会長は、真剣にやってくれ、しかし深刻になり過ぎてはいかん、ありのままの善意、好意をもってやってくれと言っておられます。ありのままで好意をもってというところは、私にはできませんけれども、そういうことが、やがては言えるような人間になりたいと思います。見かけを立派にやることでは、ないのであります。皆さんが努力をして、それでうまくいかない時は、またその次のロータリアンがいるわけです。問題は、いかなることにも負けない、くじけない、ひがまないこと、すでに示されておる、われわれロータリアンとしての道を、世界ロータリアンとしての道を、堂々と、あくまでも前進することだと思います。どうぞ、ひとつご協力をお願いいたします。

1967～68年度　国際ロータリー　第365区　第５組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和42年10月28日

閉会の辞

平澤ガバナー

ガバナーになりまして私自身が感じておりますことは、頭でロータリーを理解することは、ある程度できるのでありますが、ほんとうに体で理解するということになりますと、ロータリーは国際組織でありますから、世界各国の違った考え方とか社会の構造とか、そう言うものがございまして、そう簡単には、頭で考えるようには行かないのです。尤も頭で分かったと言うのは、実は分かったつもりなのでして、ほんとうに分かるという事は、頭で理解し、しかも気持の上で、現象の上でも理解し、さらにそれを実行する実行力と意志の力ですが、そう言うものが、みんな整わなければ、ほんとうに分かったと、いうことにならないと思います。

私どもが論じておりますいろいろな問題、特に先ほど話がありました、インターアクトの問題だとか、我国のサービスの問題、あるいはロータリーファウンデーションの問題だとか、フェローシップの問題だとか、ことばだけでは説明できない面もございます。

私は私自身に向かっても、言いたいのでありますが、あまり末節にとらわれますと、ロータリーが目ざしている、世界的なものを忘れるか、あるいは比重が減ると申しますか、一番大事なところが、落ちるおそれがあります。ロータリーは、世界的な組織である、したがって、世界的なセンスが何よりも大事だと言うことです。

私も残念ながらそう言うものが、十分に体についておりません。ついていないと言うことが、しみじみと分かります。それではいけないのです。もちろんロータリー全体としても、日本のロータリーも絶えず毎日進んでおります。コミュニティーと言うことばをみましても、地域社会から、今では世界社会にまで及んでいるのであります。地域社会に対する感覚と、世界社会に対する感覚が、同じように私の体についておるかと申しますと、なかなかそうは参らないものです。

ロータリーには二つの面があると思います。非常に地域的な現実的な面、同時に世界的な面。職業奉仕、地域社会に対する奉仕は現実的な面であります。しかも現実的な面があると同時に、365地区のロータリアンでありますから、何よりもこの地区の地益を考える。個々のクラブは更に、その中でクラブの地益を考える。そこに職業を持ち、その土地に対するところの、社会的感覚というのが、出発の第一になるわけでございます。それがそのまま、世界社会にまで及ぶのが理想であります。これはなかなか、日本人だけでなく、外国人にとってもむずかしいと思います。

たとえば、ホッディス会長とか前のエバンス会長などは、ほんとうに世界人であります。ロータリーの規則がだんだん世界的なものになり、今度は世界的な立場から、もう一度地域社会を見直す、地域社会からもう一度世界を、そう言う風な二つの、世界的なものと、地域的なものと互いにからみ合って、個人は同時に世界の人間に、世界の人間は同時に地域の人間に。そう言う感覚と考え方が、ロー

タリーの中を流れるものだと思います。

私もロータリーの規則を読みながら、文章は分かるのでありますが、その流れておる力というものが、そのままには、分からん所がたくさんあるのです。何としても、私は日本に生まれ育ったのでありますから、ほんとうに分かるのか、あやしいのであります。では日本のことが、ほんとうに分かっているかと聞かれても、私はなかなかイエスとは答えられませんけれども、外国のことよりも、比較的分かっておりましょう。しかし、ロータリーはその上で、世界的なものを身につけねばならない。それを分かる為に、ロータリーの規則を読むことも必要でありますが、規則を読みながら、文字にとらわれることなく、規則の精髄をほんとうの気持を、分かるようお互いに努力したいものだと思います。

四大奉仕部門にしましても、四大部門が目ざしておる、本質的なものは何かと言うことを、私も勉強しようと思いますが、皆さんもどうぞ地域の人であると同時に世界のロータリアンとして、もう一度、世界人として、地域を考え、地域の人として世界を考え、ロータリーの将来にご努力願いたいと思います。

1968～69年度　国際ロータリー　第365区

地区協議会－研究討論会

昭和43年6月8日

ガバナー平澤興

〈政治的活動について〉さきほど交通問題が出ましたが、時と場合によっては、政治的な活動が許されるものか、その限界についてお考えのようです。ロータリーは政治的な問題には関与しないのが原則です。

ただしこの場合、政治とはなにか、ということが問題になります。政治はどうしても、一党一派的な活動になります。直接に自分の利益を考えていなくても、いつの間にか、そういう方向にかたよる危険性があります。

ご承知のように、ロータリーは国際連合などと、かなり密接な連絡をとっていました。しかし、いまでは連絡はあるが、まあ好意的な第三者として、その活動をながめているていどだと思います。積極的に国際連合と協力して、仕事をやるということはありません。

地域社会の望んでいるもの、それの実現のために便宜をはかることも、ある意味では、政治かも知れませんが、日本の実社会でいう意味での“政治的”ではないと思います。

一党一派に偏するのではなく、自分の利益を考えない－そういう意味での政治的な動きなら、いいのじゃないかと思います。

ガバナー平澤興

〈陳情はどうか〉それはロータリーの規則に直接触れることはないと思います。理事会において、あらゆる角度から検討され、悪用される恐れがあってはなりません。これは考慮される必要があります。陳情していけないということはありません。

ガバナー平澤興

〈積極的に参加する〉とくに現ガバナーとして感じることは、第三者のような立場で、批判するのではなく、自分自身が積極的に参加しよう、決意を燃やすということが、一番パーティシペイトの趣旨に、そうことだと思います。

個々には四つのロータリーの奉仕部門、つまりクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際社会奉仕にパーティシペイトを…ということです。

国際ロータリーの基本方針というのが、手続要覧の第7ページにありますが、その第5項に、地域社会ではよく考えて、実情にそうようにやれ、最善の融通性を持ってやれ、そう書いてあるのですね。

ただ、なんとなしに、ロータリーのバッジをつけていてはだめだ。まず燃えなければならない。燃える場合は、クラブ・社会・職業・国際、この四つを通じて燃えることを強調しているのです。ただそれからさき、どうするかはみなさんで、考えていかねばならないと思います。各クラブにおいて、実情にそうて、火を燃やすということ、これは、なかなかきびしいことですが、それがみなさんに望まれているのだろうと思います。

ガバナー平澤興

〈再び政治について〉ロータリアンとしては、直接政治に関連するものには、実際問題として、現実に手を打つことはできないのであります。63年のロータリーの歴史を通じてそういえると思います。世界の組織が変った場合は別ですが…。

結局、政治には触れない。そして一党一派に偏しないで、職業や人種、国境を越えて、もっと大きな人間愛、人類の歴史を考えた場合にそれはすばらしい。

生命は35億年の歴史があり、人間が意思をもって5万年。これからです。そういう意味では、ロータリーが政治に関係しないということは、賢明だろうと思います。

1974〜75年度　国際ロータリー　第365地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和49年9月14日

平澤パストガバナー

〈米山奨学生のフォローについて〉京都大学に在職中、ドイツのフォン・フンボルト奨学財団の幹事と会話しているうちに、奨学生が現在どこで何をしているか、その人が、ちゃんと調べて知っていることが分かって、感心したことを憶いだしています。

奨学生の世話は在日中だけに限らず、帰国後も将来にわたって、最後まで学生のアフター・ケアーを考えるべきです。この意味では、国際問題であると同時に、国内問題でもあるといえるのではないでしょうか。この辺りに人間関係としての、大事な問題がふくまれていると思います。

1975〜76年度　国際ロータリー　第365地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和50年8月30日

パストガバナー平澤興

〈ロータリーの閉鎖性について〉…（前略）…日本のロータリーはご承知のように、米山さんの非常な努力で、できたのであります。

このことは、たいへん有難いことではありますが、日本の当時の事情としては、簡単な

ことばで申しますと、エリートの方々によって、つくられたのであります。

ロータリーの会員は、エリートでなければならないのではなくして、ロータリー活動に喜びをもつ人、つまり働ける人、そういうことだと思うのであります。

そういう点は、いろいろの社会的な習慣もありますから、日本人のすべての階級の、ものの考え方が、社会的によりよく成長するということを、考えていかねばならないと思います。あらゆる有意義な職業というふうに綱領では書いてあるのであります。あれは日本では、少し飾り文句になっている点がある、と思うのであります。

たとえば、お百姓さんとか八百屋さんとか、そういう人は、あまり入っておられませんが、いま言いましたように、社会的な習慣がありますから、お入りになって、ご本人がお困りになるような状態なら困るわけです。そういうことも、考えなければならないが、将来ということを考えるならば、これからわれわれはもっと、広く考えるべきだと思います。

われわれ自身は考えておりませんが、ロータリアンでない人から見ると、ロータリアン的な閉鎖性がないとは、どうも言えないのであります。

私は、皆さんがどうだと、言うわけではありません。私自身がどうだと、思っているわけではありませんが、しかし、大きく社会から、非ロータリアンから見ますと、ロータリアンというものの中に、どうも閉鎖的と言うと、いいすぎですけれども、特権階級のような、そういう感じは全然ないとは、残念ながら言えないと思うのであります。

私たちが、社会の見方、人間の見方について話す場合には、十分慎重に、深い愛をもって語らねばならんと思います。…（後略）…。

1978～79年度　国際ロータリー　第265地区　第３組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和53年８月19日

平澤興パストガバナー

〈職業奉仕について〉私もやがて80になりますが、私自身の過去を顧みても、充分の職業奉仕はなかなかもって、むつかしいものだと思います。皆さんは自分の職業そのものに対する認識とか、考え方とかいうことについては、どなたもお触れになりませんでしたが、自分で職業を選ぶ場合でも、あるいは世襲的に親からの職業をつぐ場合でも、どういうふうにその職業をお考えかということは、自らの職業に対する態度、ひいては職業奉仕に直結する問題で、大切なことかと思います。自らの職業に対しても割り切れん点や、考えさせられる点がないとは限りますまいが、それでは、なかなか望ましい職業奉仕にまでは行かないと思います。自分の職業に対する、正しい認識とか誇りを持つということは、職業奉仕にも、また同時に社会奉仕にも、大事なことではないでしょうか。自分の職業に満足して誇りを持ってやるということが、職業奉仕には基本の問題で、ロータリアンになられた方々は、皆そういう方々だと思うのでありますが、しかし、それをさらに、より良くするには、どうするかということが、きょうの問題だろうと思います。

京都東ロータリー・クラブ

クラブ奉仕部門のクラブ・フォーラム

クラブの管理について　　昭和54年8月10日

平澤パストガバナー

〈理事会について〉法律的だけに論じると難しい点があるが、ロータリークラブ全体に、大きな気持が通っておれば、そのような法律的問題は、起らないと思います。疑問があれば、議長としての会長にたずねれば理事会にかけるか、かけないかはすぐ分かる事であります。松居さん、村山さんのお話はその筋道を示されたのでありますが、今日、世の中は民主的であり、ましてロータリーは民主的というよりも、更にのり越えた友情の会でありますから、理屈ぽい話をしなければ話が出来ない、というような水臭いものではない筈であります。何よりもみんなが、相反する意見を持っていても、ニコニコと話が出来るという、空気を作っておく事が、実は規則以前の問題ではないかと思います。幸い京都東R.C.はそういう空気が出来あがっていると思っております。

1979〜80年度　国際ロータリー　第265地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和54年8月25日

平澤興パストガバナー

〈自己教育について〉伸びようという気持ちをもっている人間は、実に素晴らしい人であります。そこで私は思いました。イギリスの18世紀の歴史家でありますが、ローマ滅亡史を書いたギボン（Gibbon）という人ですが、その人が教育にはどんな人間も二つの教育をもっている。一つは人から受ける教育である。もう一つは、それのほうが大事だが、それは、自分が自分に与えるところの教育である。これこそは人間を決定するんだ。とにかくロータリーへ入って、良いところを感心しながら、おれもひとつ良くなろう、これは素晴らしいことであります。

私はそれで思い出したのでありますが、ロータリーへ入って、不満をもっている人は、割合に少ないだろうと思います。しかし、全然ないとは残念ながらいえないのじゃないかと。

しかし喜んでいる、ただそれだけの人と、ほんとうに喜んでいる、まずその親が喜び、奥さんが喜び、全く見違えるような人間になりつつある人がおられる。私はその実例を知っているのであります。

要するにロータリアンの一つの望ましいことは、ただ人から聞いて、感心するだけではなくして、良いほうへ変わろうと努力する。このことは容易ならんことでありますが、そういう良くなろうという夢をもっているような人、少々くらいの欠点があっても、そういう人ならば成長されます。このことは、新会員を選考する場合に、大事な一つの目標になるんじゃないかと思います。

1980～81年度　国際ロータリー　第265地区　第３組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和55年９月13日

平澤興パストガバナー

〈人間は生かされている〉奉仕というようなことをロータリーでは、やかましく申しますが、これをもっと基本的に申しますと、われわれがきょうの命を、無事に生きているということは、自分の力ではないのであります。生まれたときに、大自然から与えられてきた、自然の力によって、いま心臓がひとりで動いています。肺もりっぱに、呼吸しているわけでありますが、そういうふうに申しますと、われわれが、今日ただいま生きているということは、大自然の奉仕によって、生きているのでありまして、自分の力で生きているのではありません。これは断言できるのであります。

人間は、50兆もの小さい細胞が集まって、きょう生きているのでありますが、この調節もまた、大自然の奉仕による調節であります。生きるということこそは、奉仕そのものなのであります。

生かされているというその仕組みは、学問的にはまだ解明できていない。しかし生まれたときに与えられてきた、無意識の力でありまして、けっしてわれわれが心臓や、肺を適当に工夫をして働かしているのではないのであります。その意味では、生きるということは、そのまま大自然の奉仕であります。

きょういかなる人も例外なく、そして、草も木も動物も、実はそういうふうな、大自然の奉仕によって生かされているのでありますが、しかしこれが、大自然の奉仕だということを知ることが出来るのは、人間だけであります。

私はふだん考えるのでありますが、なるほどロータリーは、素晴らしいことを言っている。奉仕と。しかし奉仕というものは、実はロータリーがいう以前にわれわれ生物がすべて大自然の奉仕によって、命が保たれているのでありますから、そういうようなことに気付いて、奉仕をして生きようという、このロータリーの発想に、非常に感激しているのであります。…（中略）…。

いかように生きるかという、生きるありがたさを身近に感じて、その一部分の感謝として奉仕をしよう、私は、ですから、奉仕というのは、あまりにも人間にとっては、あたりまえすぎることではないか、と思うのでありますが、実は私も若いときは、そういうことは分かりませんでした。このごろそんなことを、感じているのであります。

1981～82年度　国際ロータリー　第265地区　第３組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和56年８月29日

平澤興パストガバナー

〈世界理解について〉世界理解について、たいへん実際的な、台湾、韓国などの話が出ました。こうした、実際のことは知っておかねばならないのであります。

要するに、台湾の方や、韓国の方々が、本

当のロータリアンであり、本当のロータリアンが、あそこにもここにも、おられるということではないか、と思うのであります。

世界理解というけれど、世界理解で一番大事なことは、現実を知ることであります。日本人の立場で、たとえば中国を見るとか、アフリカを見るとかということは、善意的であっても現実を知らなかったら、本当の理解にはなりがたいと思うのです。

たとえば、ある人が日本では言語が一つだとか、1億みな同民族だとか、いうようなことをアフリカで話をされた。これは事実の話であります。しかし、アフリカの人はどうしても信用しない。そんなばかな話があるか、とにかく一民族、一言語などということが考えられないではないか、いいかげんなことを言うなと、言ったという話でありました。その人はよく外国を知っている人でありますが、なかなか、善意を持ちながらも本当に理解をするということは困難だと、いうようなことを言っておりました。

日本人の気持ちで中国を理解したと、近頃、人々は簡単にそういうことを言いますけれども、なかなかもって、島国の日本人では、相当深い理解力のあるような人でも、中国人の生の姿を理解するということは、容易ならぬことであると思います。

そういう意味で、もう、くどいことは申しませんが、要するにこちらの立場でものを考えるのではなくして、相手の立場になって、相手の国の現実を知るということが、世界理解に一番大事なことであります。

ただ善意を持っておるとか、好意を持つということは、気持ちの問題であります。

先ほど、台湾の方が、現代はこうだが、将来はそうしたくないと言われましたが、これはロータリアンの、非常にすばらしいところだと思います。

そうでありますから、世界理解というようなことを、簡単に、善意とか好意とか、そういうようなものがあれば出来るように思うことが、これは現実に反すると思います。そこにむずかしさがある。ロータリアン的な善意を持ちながら、さらに深く現実を知るだけの努力がなければ、私は、世界理解はできないと思います。しかし、そうであればこそ、実は、いよいよ世界理解ということの努力が必要であります。

先ほど、台湾の人が、この次の時代には、そうでないようになるだろうし、そうしたいと言われましたが、これがロータリアンの理想だと思うのです。すばらしいことであります。私は、そう言われた台湾のロータリアンに、皆様と共に、敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

1982〜83年度　国際ロータリー　第265地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和57年8月28日

パストガバナー平澤興

〈ロータリアンとしての意義について〉今日的ロータリアンとしての意義、先ほどからお話になりますこと全部そうでありますが、言うならば各論でありまして、私は総論的に、今日的ロータリアンとしての意義は、本当の人間の中の人間らしい人間になろう、ということがロータリアンの一番大きな、共通の目

的ではないかと思うのであります。

世界には40数億の人々がおりますし、いろいろと立場は違っておりますが、ただひとつ、人間に大きな共通点は、この全宇宙の中で“ものを考え得る”という生物は、人間だけなのであります。

世界の歴史はいうならば戦争の歴史である、というようにも言われているのでありますが、それは、実は人間には、ひとりの人間には二つの自己があるからであります。

一つは精神的な自己であり、一つは動物的な自己であります。動物的な自己は本能的であって、わがままであります。つまり、相当能力をもった人間は、わがままになれば、結局戦争というようなことになります。もう一つは、わがままな動物的自己を抑えてゆく精神的自己。

超我の理想などと申しますが、自分に超我の理想であります、サービス・アバーブ・セルフとありますが、実はそのセルフは動物的なセルフであります。

人間には普通の言葉で申しますと、小さな我と大きな我「小我と大我」とがあると言えます。超我の理想というのは、小我に大我が打ち勝って、初めて出来るのであります。今の世界には国際連合などもありまして、世界の平和にご尽力になっているのでありますが、それらはしかし国を単位、民族を単位にしております。まだ本当に人間を、人間という立場で、民族も国家も、あるいは言葉も宗教も、そういうものを抜きにした、人間を中心として平和な生活、そういうものを考えているのは、ロータリーだけだといいませんけれど、ロータリーはその中の一番古い歴史の、そして随分と困難を克服して今日に至ったものと思うのであります。

要するに、ロータリアンは、そして、文化の最後の目的は、人間は人間らしくなることで、互いに手を握り奉仕と友情で、互いに仲よくしながら、あらゆる人類はひとつにならねばならぬと思うのであります。

人種とか言語とか宗教とか、そういうものの違いというものは、本当の違いではない。この大きな倫理的な夢を持つものにとっては、違いではないと思います。パール・バックが言っておりますが、“人間は夢をもつ生物である。夢をもてないような人間は、本当の人間の生活は出来ないのだ”と。

ロータリーは友情・奉仕で手を結んで、人種とかそういうものは言わないで、伸びていこうというのであります。しかも、ひとりではないのであります。人類の理想の中で、具体的で、世界的で、ロータリーの理想ほど手近であって、しかし遠い。言葉でいえば簡単でありますが、それは生涯のロータリアンの、夢かと思うのであります。

しかし、そういう意味で、本当に人間が人間として、お互いに手を結んで、国とか民族の単位ではなく、人類という単位で手を握ってやろう。そういうような感じがするのであります。今日的ロータリアンとて、言葉が足りませんけれども、なんとなく、私はそんな感じがするのであります。

1983〜84年度　国際ロータリー　第265地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和58年8月20日

平澤興パストガバナー

〈ロータリーでの教育〉ロータリーは、友情と奉仕というようなことを申しますが、その前に、あまり理想的でない会員があるということは、その人個人の問題ではなくて、会の問題ではないかと思うのであります。一旦入ってもらった以上は、完全な人でなくても、欠点を持っていても、それはそれでよいと思います。私は欠点というものは、人間の一つの特徴だと思っております。欠点といいましても裏を返えしますと、すばらしい長所であることが、しばしばあります。ですから、ロータリーというような組織は、まず、なんと言っても愛情です。その次に教育、もう一つ大事なことは情熱。

ロータリーはポール・ハリス他、三人の人の会から始まっておりますが、この始めの会の構成というものを、われわれはしっかりと、考えてみたいと思うのであります。大学を出たのは、その四人のうちポール・ハリスだけであります。あとは全部、田舎からシカゴへ出てきて、淋しくてしようがない。また正直者で、嘘を言っては暮らせないような、くそ真面目な人で、心の底には非常に人間的なものを持っている。

そういう人が、規則などというようなものを抜きにして、人間そのもの、全身の愛情と熱情をもって結びついた。仲を良くして助け合っていこう、正直に生きようじゃないかと。これが皆さんご承知の通りのロータリーのはじめでありますが、これはですから、友情と申しましても、友情の中に、本当に心のこもった愛情があります。それが教育であり、コミュニケーションであります。

既成品の人ばかりを入れるよりも、むしろ将来伸びるであろうと、いうような人を入れて、うんと成長して貰う方が、実際的ではないかと思います。

もう一つ、スケルトン会長は、これからはロータリーを必要とする時代だと言われたということ。私は原文を読んでいないのですが、これはロータリー的なものが必要となると言われたと考えないと、あまりに傲慢だと思うのであります。例えば宗教団体なんかに言わせれば、キリスト教はキリスト教で、仏教は仏教でみな自分らこそが必要だと思っていますが、その枠の中で窮屈になってはいかんのであって、そういうすべてのものを包括をして、民族を超越し、宗教を超越して、このロータリーを作ろうと、いうのでありますが、しかし、この基本の基本的なところまでいきますと、必ずしも、ロータリーだけが、世界唯一のものではないわけです。

ポール・ハリスが言っておりますが、ロータリーは他の目的を同じくするような、例えば、ライオンズとかキワニスと手を握って、世界を良くしようじゃないかと。

頭の中で考えるならば、ロータリーを最上のものにするように、努力すべきであるが、同時に同じような大きな目的を持ったものとは、手を握って世界を良くすべきではなかろうかと思います。

創立78年にして世界のロータリアンはまだ100万に達しないのであります。40数億という世界の人口からすると、あまりにも少ないと思います。いったいそれは何故か。何故まだ100万ぐらいにしかなっておらないのか。そしてロータリーが今日隆々として進むというよりは、油断が出来ないといった状態は、いったいどういうことなのか、このことこそは、考えてみなくてはならないと思います。とにかく、シェアーロータリーというような、ロ

ータリー的なものをしっかり作るには、あるいはロータリー自身を作るには、最も広い意味の教育、それは善意をもって人の長所を見ながら悠揚とつき合う、そういうことではないかと思います。

1984〜85年度　国際ロータリー　第265地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和59年8月25日

平澤興パストガバナー

〈社会奉仕について〉私はロータリーの中で社会奉仕、これは地域社会奉仕、国際奉仕等々広い意味の社会奉仕であると思うのです。そういう意味では、日本では欧米諸国におけるような、社会観念というものがしっかりと身についていないのではないか。そこに日本のロータリーの、一つの苦しいところがあるのではないかと思っています。

これは、歴史的に考えて見ましても、日本では戦前までは家庭生活が中心でありますから、家庭を中心とした日本人の姿は、なかなかしっかりしていたのであります。今では残念ながら、この点も少し怪しくなって参りました。それでは対社会的な感覚はうんと成長したかと申しますとそうではないようです。

われわれが対社会的な問題を見ます時には、頭では理解しておりますが、われわれの体の中の、対社会的な感覚というものが、大分遅れているのではないかと思います。この問題は、個々の問題としてよりも、日本人の対社会的な態度なり、感覚なりをどうするかであって、社会奉仕の基本的なものになるのではないか。青少年問題なども、何でもないようでありますが、社会が共に考えているというのと、考えない社会の中で、無理をやるということでは、大分違うのではないかと思っております。社会奉仕、その前提となる社会に対する感覚、そういうものを、もっと頭ではなくて、口先でやかましいことを言うよりも、体につけるよう努力せねばならないのではないか、と考えております。

平澤興パストガバナー

〈四大奉仕についてのアンケート回答について、まず現実を知る〉きょうのフォーラムは、たいへんいろいろな事実を知らされて、ありがとうございました。私は、本当の理想、もしわれわれが、21世紀に、よりすばらしいロータリーを作ろうというなら、まず、現実を知らねばならないのだと思います。いろいろ予想外のことがあったにしても、それが現実であります。こういう方法でなければ、分らないような現実です。

私はきょう出た数字は、モニターの方々が正直に回答され、さすがにロータリアンだなあと思うのです。まず、われわれは理想をもたねばならんが、それには、今日のロータリーが見かけではなくて、実際には、どうであるかということを、知らねばならないと思うのであります。

そういう意味では、今日のこのフォーラムは、すばらしかったと思います。しかし、正直なところ、私自身にも、予想外のものがいろいろありました。しかし、それが現実ですから、予想外ということは現実を知らなかったからなのです。明日の理想を実行するなら、今日の実情を知って、そしてそれを直してい

く。もちろん、夢がなければなりません。ですから、失望以上の大きな夢をもって、がんばって頂きたいと思います。

1985〜86年度　国際ロータリー　第265地区　第3組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和60年8月24日

平澤興パストガバナー

〈規則・燃えるということについて〉広い視野から物を見るということ、これは、ロータリー自身もそうであり、ロータリーの規則を読んでいるだけでは、本当のロータリー活動はできないだろう、と思うのであります。

いまもお話がありましたが、国際的であるということは、ただ、他の国の真似を、ちょっと、平面的にできるということではなくして、本当に日本人であって、日本人の歴史を知り、伝統を知る。さらに文化的なものを知り、そういう深い理解の目で、世界を見る時に、初めて私は正しく理解できると思うのであります。

私は何よりも、まず、基本的にとらわれないでものを見るという見方、これがいちばん大きい、と思うのであります。それから、東京圏とか京都圏のお話もございましたが、まさに私は、芸術とか学問ということになれば、京都には現在表面に出ている以上に深い、むしろ、神経質とも言われるような、誠実さがあると思うのであります。

その具体的な人の例は、日本ではノーベル賞は6人程もらっているようでありますが、湯川秀樹さん、朝永振一郎さん、江崎玲於奈さん、これらの人は全部旧三高の名校長であり、燃える物理学者である森総之助先生の教え子であります。世間的には有名ではないが隠れた情熱の人、この人はただ学問を学問的に、型の如く教えているのではないのです。冗談を言いながら、しかも妙な質問をしても、決して怒られない。湯川さんなどに対しては、まさにそうであります。普通の先生のところに質問に行くと「君そんなことまで考えなくていいのだ。僕が講義したのでいいのだ」と不快な態度をされますが、森総之助先生になりますと「偉いものだな湯川、それは実は、現在世界の物理学界で問題になっている問題を君は考えている。大したものだ」そう言われると湯川さんは燃えるのであります。

燃えて教えられた森総之助先生、京都の三高であります。朝永さんと江崎さんは大学は東京大学でありますが、しかし、あのノーベル賞をもらうべき人間の元を作ったのは、京都の三高の森総之助先生であります。

結局、先程のライラの問題にしましても、ただ形を真似している、ということではないのであって、我々が燃えているかどうか、それと同時に、余り急いではならないと思う。青年の問題とか、国際性の問題は、1日や2日でできるものではありません。

燃えるということは、上手にやるということでは、無かろうと思います。大切なのは、燃えるということ。しかし、急がないということ。限りない愛情を持つということ。愚かさにも似た誠実さを持つということ。私はそういうことではないかと思います。

1986～87年度　国際ロータリー　第265地区　第３組

インターシティ・ゼネラル・フォーラム

昭和61年８月30日

平澤興パストガバナー

〈奉仕について〉きょうは奉仕の精神を見直そうということでありますから、そういう定義的なものも必要でありますが、私はポール・ハリスに聞いたら、それは時代と共に変わってくる。場所により、環境により違ってくると答えるだろうと思います。

まず、現実をしっかり見て、家庭生活から、いかに家庭の中で、立派な人間であるかという、極めて簡単なことから始める。

それから地域社会に及ぼし、職業社会に及ぼして、さらにその心がそのまま、世界の平和にどうこうということはありませんが、あらゆる人間を賛美し、あらゆる人間を拝む、そういう心になればと思います。定義は私もなかなか出来ません、というのは、余りにも面が広いですから、個人、社会、各民族、宗教、みなそれぞれによって方法が違うと思うのであります。しかし願わくば、ロータリーの奉仕は、宗教によって、民族によって違うようなものではなく、宗教を越え、民族を越え、国境を越えた人類全体に共通な将来に向かってのものであると、思うのであります。

人間の精神活動には科学的な知的な文化と、もう一つは芸術とか道徳とかの本になる心の文化があるのですが、ロータリーは、まさに、心の文化を追究しているのであります。しかし、人間はまだ、今日精神的には、決して最上に来ているのではないのであります。

現在の人類は、地上に現われて、２万年ないし５万年ぐらいですから、まだまだ未熟であります。このことは頭の文化一つ考えても分かるのであります。次から次に新しい発明・発見をしているのであります。しかし心の文化、ロータリーが対象にしている友情とか、奉仕とか、平和とか、これらはみんな心の文化ですが、そういう面になりますと、日本だけでなく、世界の文化はすこし狂っているのであります。知的な頭の文化だけが進んでいて、心の文化が衰えているために、なかなか、平和が出来ないのであります。

私はロータリーでは、まずもって、家庭人として本当に家庭の人から感謝をされ、地域社会では近所の人がニコニコして頭を下げていくような人間、さらにそれが職業、日本、世界へといくべきであると思います。

私はそういうあらゆる面を持った、奉仕ということを短い言葉でいうことは出来ません。余りにも多面的であるからです。しかし、人類の世界は発展しつつあるのです。発展しつつある人類の社会に適するような、奉仕でなければならないわけです。まず、現実をしっかりと認めること、理想家であるほど現実を認めておかねばなりません。

100万のロータリアンは、政治的に考えるなら、それほど強力ではないと思うのです。戦争一つ納めることが出来ないのです。そういう、現実を認めなくてはならない。しかし、現実を認めて、それに捉われては駄目です。現実を認めて、さらに燃える情熱によって、その時代に応じながら、いかにやるかということが、ロータリーに与えられた、楽しい、しかし、むつかしい問題ではないか、と思うのであります。お互いに燃えましょう。

平澤興先生への頌辞

先生の年譜

追想 平澤先生

会員　岡林　事

正に巨木がどうと倒れた思いでした。

前日の朝、恒例となった京都東ロータリークラブの、次年度会長からの朝粥のご招待があって、都ホテルの佳水園に、平澤先生を始め元会長たち十三名が、元気な顔を揃えました。

一献のおみきと朝粥のご馳走に、ロータリアン特有の明るい清談がしばらく続いて、ひとわたり終った処で、平澤先生のご挨拶ということになりました。上席、私の左側に坐って居られた先生が、立ち上ろうとされたとたん、ヨロリと右に傾かれ、私が慌ててその右腕を抱きかかえて、

「大丈夫ですか」と伺うと、

「なあに大丈夫、大丈夫」とおっしゃって、ゆっくりとご挨拶と新会長への餞のお言葉がありました。言語も明瞭で、平素となんらお変りなく、さてお開きとなってお帰りにも、至極お元気で、ステッキ片手に悠々と、帰途にお就きになりました。つい前日、こんなご様子を拝見しているだけに、先生の突然のご訃報は、私共にとっては、まさに青天に霹靂、唯々驚くばかりでした。

先生の、京都東ロータリークラブへのご入会は、昭和三十二年四月十五日、かつての京大医学部時代の同窓、青柳安誠・山本俊平両元会長のご推薦で、入会に当ってのロータリー教育は、たまたま私が担当致しました。当時ロータリーの知識にも乏しく、どのようなお話を申し上げたか、今はさだかに記憶はございませんが、一応、ロータリアンとしての知識と使命とについてお話申し上げ、当時、世界百三十数ヶ国が加盟する国際ロータリーこそ、世界平和と人類の幸福に寄与・貢献すべき責任と機会を持つものだということを、特に強調したことだけは記憶して居ります。後年、先生が岡林君は私のロータリーの先生だと、しばしばおっしゃられて、そのつど恐縮した次第でした。

その後、先生が、学会その他世界的なご活躍の中で、ロータリアンとして、とくに会長、ガバナー、或は斯界の長老としてのご活躍や、残された数々のご功績、後世への影響などを思うにつけ、かかる大器をロータリー界にお迎え出来たことを、私どもは大きな誇りとし、幸いであったと思わざるを得ません。

先生は解剖学、特に脳解剖学では世界に比類のない学者と謳われましたが、選ばれて京都大学総長としてご就任、その間、名総長の名をほしいままにされました。所謂学園紛争の直前でしたが、先生の明るく、誠意と信念に充ちた重厚な言動は、全学は素より広く学会、一般社会の尊敬と信頼を集められました。

このご経験によって、先生のご人格に更に一層の厚みと幅と深さを加え、視野を広められて、ご晩年の融通無礙、円満な一種の達人の域に達せられたと思われます。

先生が一般学生や、大学院学生の教育・指導に当たられるや、常に人間の英知と努力とに信頼を置かれ、その将来に期待するという信念に基づいたものでした。日常の学生等に対する態度や、残された数々の文章、手紙、

訓話、挨拶、式辞等を見るにつけ、その精神の脈々と伝わるのを知ることが出来ます。

先生はご自身、しばしば大患によって手術をお受けになり、その後遺症に悩まされましたが、変らぬご晩年の活躍振りや、老いてなお、明晰な頭脳、精神力、日常の活動などを拝見するにつけ、その若々しさに感動させられましたが、これは先生の人生に対する考え方、内に燃える生命の火の若々しさによるものと、思わざるを得ません。

先生は科学者でありながら、科学万能者ではなく、むしろ研究が進めば進むほど、真理の深さに驚嘆し、いきおい、極めて謙虚な態度をおとりになりました。時に現代の科学の力ではどうにも解明できない問題に当面して、頭を下げざるを得なくなり、科学は決して、宗教や信仰と相反するのではなく、本当の学問をすればするほど、神・仏の道に近づくのではないかとさえ考えられました。

先生が、解剖学の研究が深く進むにつれ、「自然は、神こそ、しろしめし給う」とのお考えに近づかれ、神によらずして自然はないとの結論に達せざるを得なかったと思われます。解剖学を、そして近代自然科学を、神との切点まで進められた、稀有の学者であられたと申すべきであります。

先生の、ガンに就てのお話の中に、今ではガンは遺伝ではなく、どんな人でも或る条件の下では、ガンは出来るということは解ったが、健康な細胞が、ガン細胞に変わるのはなぜかと云うことが未だ解らない。細胞そのものの構造・機能やその生存の条件が解れば、自らガン細胞の発生や繁殖の原因も或るていど解り、その治療法も考えられるが、一ミリの何十分の一という、小さい細胞でも、広大な宇宙の如く複雑で、吾々はまだそれらを共に明らかにしていないと、珍しく悲観的なお話でした。

都ホテルのロビーで、開会を待つ間の先生との雑談の中で「先生、何時になればガンの問題は解明されますか」との問に対し「十年待ち給え。もう十年。きっと解明されるだろう」とのお答えでした。

十年は疾くに過ぎました。いま一度、伺おうと思っている矢先の、先生のご不幸でした。私共の失望は、色々な意味で申す迄もありませんが、世界人類のためにも、大きな期待はづれ、大きな不幸、落胆であります。

短軀、五分刈りの大きなおつむ、太いお首、刈りそろえられた短いお髭、いつもニコニコと微笑を絶やさぬ童顔、部厚く温いお手に、お心の真実がジワジワと伝わって来る握手でした。

景仰 平澤興先生

会員　　松居久左衛門

私が京都東ロータリークラブに入会させていただいたのは、平澤興先生が入会された1957年4月（昭和32）に3ケ月遅れでありましたが、当時、先生は公務ご多忙で、例会でお目にかゝる機会も少なかったように記憶しておりますが、あの優しい話しかけ、温かい

握手は、新入りの私にとっては大変嬉しい思いでありました。

先生は1964～65年度のクラブ会長でしたが、例会での会長挨拶は、まことに心が籠もっていて、聴く人にしみじみとした感慨を催させるものでありまして、他クラブの友人達にもぜひ聴いてもらいたいとて、メーキャップに来るようにと誘い掛けたものでした。

先生がガバナーをお引受けになった時に、私に事務局をお手伝いするようにとおっしゃったのは、おそらく先生ご本人の発意ではなく、どなたかのご推薦かと思います。まことに重大な役目をおゝせつかったもの、これも何かの御縁だと思い、及ばず乍ら身魂を傾けて取り組むことを、決心した次第でした。しかし、事前、期中、事後を通じまして、ことごとく自分の非力を知るのみに終ったような気がいたします。そればかりか、先生には大変ご迷惑をかけているのではないかと、恐縮することが多い当時でありました。たゞ、奥村忠君と事務局の西村真紀さんのお二方の、ひたすらに誠意溢れる奉仕のおかげで、どうにか大任を果し得たのでありました。

先生から教えて頂いたことは、数えきれぬほど多くあります。その一つに、先生が常に口にされた『ロータリーの奉仕について、これは、He profits most who serves bestという西洋流の表現を以て、サービスというものが讃えられているが、論語の「恕—己の欲せざるところは人に施すこと勿れ」という東洋流の表現も、積極消極の差、また表現の違いはあるけれども、思想的には全く規を一にしたものである。奉仕というものは、ひと言で言えばその事ではないか』このことについては、ガバナーズレターに詳しく申されています。

先生の偉大さは、確固卓抜たる実践哲学をお持ちになって、ロータリーの奉仕を徹底的に理解をされ、全力をもって実行に励まれ、まことに、先生はロータリーを身につけておられた第一人者ではないかということを、更に強く感じているこの頃であります。

先生のガバナーズレターを拝見しますと、あれだけのアドレス、また毎月の挨拶その他に於きましても、あのように内容のある、しかも心の底から、体の中からほとばしり出る気概を込めて、あのような長い文を書かれたガバナーは、珍しいのではないかと存じます。

先生はガバナー公式訪問のとき、随行の人も連れず、一人で重い鞄を引きづって、一泊の旅を続けられ、疲れて宿に着かれても、公式訪問所見のメモを誌されました。

公式訪問は、その当時には、未だ旧陸軍の部隊が、師団長の検閲を受けるような、一種の畏怖にも似た感覚を抱いて、事前に入念な準備をして形を整えるクラブもありました。また、ガバナーを困らせようと意図する、意地悪で瑣末なことについての質問をして、得々としているロータリアンもいました。

平澤ガバナーは、訪問先のクラブに着いて、先ず会長・幹事から、クラブのありのままの実情を出させ、悩みごとがあれば、ガバナー自身の悩みと受け止めて、適切な指導をされたと聞きます。クラブ・アッセンブリーにおいては、そのクラブの長所を更に伸し高め、積極的な奉仕活動を促進させるように助言されました。殊に、他のクラブがこうだから、わがクラブも……というような猿真似は駄目で、それぞれのクラブのもつ特質を生かして活動することを強調されたと言うことです。

例会でのガバナー・スピーチも、格調が高く、そして世界的視野に立った内容でありま

して、その上に、前日のクラブ及び会員から受けたインスピレーションを加味した、スピーチを心がけられたのであります。

このように、公式訪問におきましても、その他の機会におけるスピーチにいたしましても、聴きいる人に非常な感銘を与え、感動を与えて、本当のロータリーとは、こんなものなんだ、こういうことなんだと教えられ、迷いを断ったロータリアンも少なくはなかったと思います。そして少し大げさに言えば、こういう方が現われられたことへの感銘、あるいは、出現を待望しておったという、そういう感じを抱くほど、先生に対してロータリアン達は、深い感謝と、期待をもったのではないかと思います。

はからずも、私の文庫の中から、20年余り前の先生のR.I.へのファイナル・レポート、これはガバナーが年度の総括をR.I.に報告される最後の重大任務でありますが、その先生自筆（和文）の原稿が出て参りました。これは私すべきものでないと思いクラブに保存して頂くようにお願いしたいと思っております。

そのレポートの中の一節(本誌第54頁参照)「常にガバナーとしての私を苦しめたのは、私自身のロータリアンとしての姿である。口に言うロータリーはやさしいが、これを100%生活の中で活かすことは容易なことではなく、私は人に求める前に、私自身に要求した。」

私は、あの先生にしてこのお言葉、己にきびしく他人に寛大である、東洋流に言えば、徳を積むというその神髄を常に心がけ、これを生涯の訓戒とされたということに、強い感動の念を禁じ得ないのであります。

平澤先生の思い出

マキ・ポカヴァニット
（旧姓　西村真紀）

はじめて先生にお会いさせて頂いたのは、大学卒業を間近かに控えた1967年2月のことです。ガバナー事務所に於ける先生の、個人秘書という仕事の面接でした。ロータリーのことはもちろん、世の中のことも右も左も分らない、卒業ホヤホヤの私を、以来約一年半秘書というよりは、孫娘のようにして見守って下され、忍耐強く導いて下さいました。

次期ガバナーまたガバナーとしての先生は、レークプラシッドに於ける、次期ガバナー会議へのご出席をはじめとして、第365区内のクラブの公式訪問、R.I.への各種レポート、ガバナーズレターの原稿ご執筆、ロータリー大会に関する各種準備と出席、R.I.代表の方のご接待、ホームクラブ関連の仕事などと多忙を極めるスケジュールでしたが、どんなにお疲れになられても、そのひとつでもおろそかに、人まかせにされず、その上、ご自分のことよりは、周囲の人たちのことに、まず、お心を配られ、秘書の私にまでお気を使われるという、ロータリー精神SERVICE ABOVE SELFの文字通りの毎日でした。

お疲れになっても、ニコニコとされている超人的な先生を、少しでも見習わせて頂きたいと、私も一生懸命努力をいたしました。

事務所の開設後2・3ヶ月目のことだったと思うのですが、レポートやら、翻訳やらロータリー大会の準備やらで、先生はじめガバ

ナー事務所補佐の方々も、みなクタクタになっておりました。私もいささか疲れて肩が下がっていたのでしょうか、ある日、事務所で珍しく先生と二人きりとなり、先生は原稿の手直しをされ、私は先生に背中をむけて、コピーをとっておりました。

その時、先生が静かな優しいお声で「まき君こちらへいらっしゃい」とお呼びになられたので、ソファーの方へ参りました。立ち上がられた先生は、暖い柔らかい両手で私の手を包むようにされ「まき子さん。ほんとうにありがとう。いつも一生懸命やって下さって、ほんとうにありがとう」とじっと私の目をご覧になられました。

涙が溢れそうになった私は「いいえ、とんでもございません」と言い「先生もお疲れでしょう。お茶をお入れしましょう」泣き顔をお見せするのは恥ずかしいのでございました。そこで私は、急いで、まだ、お湯が口まで入っているポットを持って、お湯を沸しにゆくふりをして、階下にある湯沸し場へ行き、そこで涙をふいて、また事務所に戻り、お茶をさし上げたものでした。

私の後姿に〝つかれ〟を感じとられたのでしょう。後姿にも心を配らなくては、先生に余分な心配をおかけすると、その時つくづく思ったことでした。その後、疲れをみせないようにと努力をいたしましたが、お心の敏感な先生には、たぶん私のこうした努力はすべて〝お見透し〟だったことでしょう。あの時にして頂いた握手は、その後もして頂いた数多い握手の中でも、今もってぬくもりが忘れられない、私にとっては心の宝となった握手でした。

レポートの英訳の仕事では、緻密な科学者的ロジックの裏づけのある、先生の英文知識の前では、私の簡単な英会話がやっとという程度の厚みのない英文では、いくら頭をしぼっても不充分で、今もあの当時の英文を思うと、冷汗がにじんで来るのですが、先生はがまん強くどんなにお忙しくても、R.I.へのレポートの原稿・ガバナーズレターの原稿等をご自分でたんねんに書かれた後、英文に翻訳したものにも全て目を通され、一字一句おろそかにせず添削して下さいました。

1978年にお会いさせて頂いたのが、私にとって先生とは最後のこととなりましたが、その時に戴いた小冊子「心の鏡」の中で「いずれ天国では子どもにかえって、ゆっくり母に甘えてみたい。」と書いていらっしゃるのです。大きな優しい透き通った目をキラキラと輝かせて、若い情熱をいつも燃やしつづけていらっしゃった先生。きっと今は天国でゆっくりと、お母さまに甘えていらっしゃることでしょう。

(1990年3月　バンコックにて)

西村真紀さんは、ノートルダム女子大学を出て、平澤ガバナー事務所へ秘書兼事務員として入られました。彼女は、英語に堪能で、公式訪問のガバナー所見やR.I.への各種のレポートを整理・翻訳したり、R.I.など外人の訪問者の通訳等に加えて種々の事務があり、ずいぶん多忙且つ氣苦労されたことと思います。西村さんは、その後、アメリカに留学、その時知りあったのが、タイ人の公認会計士で今の御主人です。この度、特にお願いして執筆して頂きました。

(松居久左衛門誌す)

ロータリアンの鑑

会員　　満田久輝

昭和37年、もう28年前のことである。平澤先生は、第16代京大総長として東奔西走の、お忙しい生活をされていた頃の話である。私はその時ロンドンで開催の国際食品科学工学会議で研究発表すべく、又この機会に約３ヶ月、欧米の教育、研究機関を視察するため家内同伴で海外出張をするため上京した。

当時は東京も現在のような立派なホテルもなく、大学関係者は新橋の第一ホテルによく宿泊したものである。今と違って、海外ではお寿司は中々食べられない時代であったので、ホテルの寿司屋で夕食をとることにした。偶然、平澤先生が京大本部事務局の方々と盃を交わしておられるところに行き会い、御一同と合流して楽しい一ときを過ごしたが、「翌朝出国が早いので、お先きに失礼します」と挨拶したところ、「日本のために、しっかり国際会議で活躍してくるよう」と激励して頂いた。ここまでは記述するほどの内容ではない。これからが平澤先生の御立派な一場面である。

翌朝、荷物を整えて、チエックアウトしてホテルを出発しようとしたところ、午前５時という早朝に、黒い服に襟を正し、ホテルの玄関口に平澤先生が立っておられるのである。

若い教授夫妻が海外に出発するに当って京大総長がお自ら見送って下さり、「十分、体に注意するように」と励ましの握手を私に、そして家内にもされたのである。その温かい手のぬくもりは、今も忘れることができない。

おそらく前夜は遅くまで、事務局員の労をねぎらっておられたに違いない。本当に勿体ない話である。100日余の旅程をすべてこなして帰国後、平澤先生に国際会議の成功を報告したところ、大へんな御機嫌であった。

私事で申訳ないが、私の父は京大医学部の明治41年の卒業だったので、平澤先生はよく、大先輩だと申され、また兄が医学部卒業後、神経医を専門にしていたので、脳の縁で昵懇（じっこん）にして頂いていたような次第で、私はロータリークラブに入会する前から先生とは席を同じくすることが多かった。

京都東R.C.のメンバーになってからは毎週例会で、大学とは違うロータリアンとしての無言の教育を受けた。昭和44年前後の学園紛争中は大学関係者にとっては例会への出席は中々至難であった。毎日団交の連続でメークアップも不可能な状態に陥って、遂に１回だけ欠席しなければならなかったが、私は職業奉仕の点で連続皆出席でないことを、むしろ誇りに思っている。平澤先生は奥田東総長にバトンタッチされたあとであったが、大学の激しい実状を案じられ、現役の私たちを励まして下さった。京都東R.C.には大学関係者が多いので互に理解し合えて心丈夫であった。

昭和53年、私が41年間奉職した京大を去り、名誉教授になる半年程前、平澤先生から「お願いしたいことがあるので、是非お会いしたい」と極めて鄭重な御連絡があった。その頃、先生は手術をされて体調を崩しておられたので、先生が所長をされていた環境科学総合研究所を、引き継いでほしいというお話であったが、当時、私は国立大学と私学と二ヶ所か

ら、学長就任を要望され贅沢な悩みの最中であったところへこのお話で、三つ巴になり決断に困惑した。平澤先生の御健康を静かに考えると、私が先生の希望を受けて環研の世話をし、先生の精神的負担を軽くして療養に専念して頂くべきだと考えた。国立大学の管理職では兼職はできないので、熟慮の結果、国立大学長はお断りして、研究所との兼務を条件に、男女共学の四年制の私学の学長に就任し、一方、環研の充実に務めた。昭和56年には環境庁所管の財団法人の認可を受け、平澤名誉所長の庇護の下、理事長・所長として基礎研究の指導に没頭した。スポンサーの御厚意による潤沢な研究費、優秀な人材、充実した施設に恵まれ、ユニークな成果を上げ、国の内外で高い評価を受けるようになった。

平澤先生の学問的業績は日本学士院賞を受賞され、日本学士院会員に選定されているので、その評価について補足する必要はない。実に輝しいものである。ただ、京大では管理職が長く、教授としての直系の門下生は新潟大学教授時代の方が多かったので、あるいは京都では、その面ではお淋しい点もあったかと思うが、京都東R.C.の全員は先生を大黒柱として纏まり、立派に長期間パスト・ガバナーの模範を示されたと確信している。

先生は糖尿病、直腸の疾患、白内障その他色々の病気をおもちであったが、闘病などと気負わずに、常に病気を可愛がって、病とともに生き続けられた。一病息災という次元ではなく、淡々と88歳9ヶ月の天寿を全うされたのである。昨年6月、度重なる入・退院で体力も劣えられて上京も段々困難な状態であったが、どうしても平成元年度の日本学士院賞の授賞式には出席したいと申され、東京上野の式場に来られた。私はお隣りの席で見守っていたが、緊張されてか、急に顔色が悪くなり、私の肩にもたれて来られたときは冷汗が出た。私の手を握り乍ら徐々に落着いて来られたときは、やれやれと安堵した。やがて、国歌　君が代が静かに流れる中、今上陛下が入場され、すべての行事が無事終了したときはほっとした。そのとき先生から最高の感謝の言葉を頂いた。翌13日も先生は学士院の分科会、部会に出席され、最前列で私の研究発表も、熱心に聴取される精勤振りで、正に職業奉仕の範を示された。その週の16日(金)は日比野丈夫次年度会長を励ます恒例の、歴代会長の朝食会が都ホテルの佳水園で開催されたが、先生は御挨拶のあと、乾杯の発声も元気なお声でされた。終了後、例会まで相当時間もあり、畳の上に正座しておられたのでお疲れと思い、先生にお宅へお帰りになってはと申し上げたが、いや例会には出席したいと云われ、浄土寺のお宅の方角の景色を眺められて一服され、何時ものように例会を済ませ、帰宅された。その夜、急に不調を訴えられ京大病院に入院、翌朝大往生されたのである。突然の悲報をうけ、お宅に馳けつけ、御親戚の意向を尊重しつつ、松居、加地両会員と三人で葬儀の大綱を確認、直ちに日本学士院に連絡の上、京大に直行した。当日は京大創立記念式が挙行され、平澤先生も御出席の予定であったので、急な訃報を西島安則京大総長に伝え、式辞の最後に総長は平澤先生の突然の御他界を述べられ、一同で黙禱して先生の御遺徳を偲んだのである。

「生きるとは燃えること」の名句を好んで色紙に書かれたが、最後の最後までロータリアンの範を示しつつ、燃え盡くされたのである。正に京都東R.C.の誇りである。　合掌

平澤 興 先生 年譜

年　号	西暦	事　　項
明治33	1900	・10月５日，新潟県西蒲原郡味方村大字山王町新田96番地にて，父平太郎・母チノの六男として生れる
大正 6	1917	・３月京都府立第二中学校卒業
		・７月第四高等学校(金沢)入学
9	1920	・３月第四高等学校卒業
		・６月京都帝国大学医学部入学
13	1924	・６月京都帝国大学医学部卒業
14	1925	・10月京都帝国大学医学部助教授となる
15	1926	・５月新潟医科大学助教授となる
昭和 3	1928	・スイス，ドイツへ留学
5	1930	・３月帰国
		・５月新潟医科大学教授となる
10	1935	・６月Morphologisches Jahrbuch Bd. 75にて錐体外路系の５亜系分類発表
21	1946	・７月京都帝国大学教授となり，解剖学第一講座担当
26	1951	・５月錐体外路系の研究により日本学士院賞受賞
28	1953	・11月錐体外路系の研究により武田医学賞受賞
32	1957	・12月京都大学総長となる
38	1963	・12月京都大学総長を退く
42	1967	・11月日本学士院会員となる
45	1970	・11月勲一等瑞宝章受章
50	1975	・４月第19回日本医学会総会会頭となる
55	1980	・10月財団法人高松宮妃癌研究基金審査委員長となる
56	1981	・９月「平澤興博士論文集」(全七巻7782頁)刊行
63	1988	・８月京都大学創立90周年記念委員会名誉委員長となる
平成元	1989	・６月17日午前４時急性心不全のため薨去 天皇陛下より哀悼の御言葉を頂く(侍従より伝達)，正三位に叙せられる
50～ 平成元	1975頃？ ～1989	・ノーベル賞(医学・生理学)の候補者推薦者を歴任(先生の遺品中より書類を発見，但し初任はいつ頃かは分らない)

平澤興先生のロータリー年譜

西　暦	年号	事　　項
		クラブへの奉仕
1957	昭和　32	・4月15日入会
1958～59	33～34	・一般情報委員長
1959～60	34～35	・クラブ理事
1960～61	35～36	・クラブ理事
1964～65	39～40	・クラブ会長
1966～67	41～42	・クラブ理事
		R. I.・地区への奉仕
1967～68	昭和42～43	・第365地区ガバナー
1968～69	43～44	・68年10月第359地区年次大会(ホスト甲府南R. C.)にR. I. 会長代理として出席 ・ロータリ財団委員会委員長 ・日本ロータリー連絡委員会委員 ・R. V. A.(ロータリー海外奉仕篤志家計画)委員会委員長 ・68年9月I. G. F.(ホスト武生R. C.)ゼネラル・リーダー ・同11月I. G. F.(ホスト富田林R.C.)ゼネラル・リーダー ・68年10月地区年次大会会長・幹事懇談会リーダー
1969～70	44～45	・諮問委員会委員(国際奉仕部門委員長) ・ガバナー指名委員会委員 ・世界社会奉仕及び組合せ地区クラブ委員会委員長 ・69年6月地区協議会国際奉仕班リーダー
1970～71	45～46	・R. I. 諮問委員会文献委員 ・71年5月レーク・プラシッドに於ける国際協議会日本グループ討議リーダー ・諮問委員会委員(クラブ奉仕部門) ・ガバナー指名委員会委員 ・米山記念奨学会理事

西　暦	年号	事　　項
		・70年8月I.G.F.(ホスト舞鶴R.C.)ゼネラル・リーダー
1971～72	昭和46～47	**・71年10月第370地区(ホスト八幡R.C.)年次大会にR.I.会長代理として出席** ・諮問委員会委員(国際奉仕部門) ・ガバナー指名委員会委員 ・71年6月地区協議会ロータリー財団説明リーダー ・71年11月I.G.F.(ホスト橿原R.C.)ゼネラル・リーダー ・71年10月地区年次大会パネル討論会討論リーダー
1972～73	47～48	・諮問委員会委員(ロータリー財団部門) ・72年11月I.G.F.(ホスト山科R.C.)ゼネラル・リーダー
1973～74	48～49	・諮問委員会委員(エキステンション部門)
1974～75	49～50	・諮問委員会委員(社会奉仕部門) ・ガバナー指名委員会委員 ・74年6月地区協議会国際奉仕説明リーダー
1975～76	50～51	・諮問委員会委員(国際奉仕部門・ロータリー財団部門) ・ガバナー指名委員会委員 ・75年9月I.G.F.(ホスト大津東R.C.)ゼネラル・リーダー ・75年6月地区協議会国際奉仕説明リーダー
1976～77	51～52	・諮問委員会委員(ロータリー財団部門) ・76年6月地区協議会国際奉仕部門説明リーダー
1977～78	52～53	・諮問委員会委員(エキステンション部門) ・78年3月ロータリー財団功労表彰状を受ける ・77年6月地区協議会職業奉仕説明リーダー
1978～79	53～54	・諮問委員会委員(エキステンション部門) ・78年6月地区協議会広報説明リーダー
1979～80	54～55	・諮問委員会委員(担当部門なし) ・79年6月地区協議会クラブ奉仕説明リーダー
1980～89	55～平元	・諮問委員会委員(担当部門なし)を歴任

跋 文—巨人の生涯

平澤興先生は、平成元年六月十七日午前四時急逝された。この巨人の生涯は、大きく四つの時代に分けることが出来よう。

第一の時代、新潟県味方村で周りのすべての人々の愛情に育くまれた幼年期から、京都二中の中山校長をはじめ、多くの人生の教師に恵まれ、さらに漢籍、古典に親しんだ少年期。東西の先人の伝記に心を打たれ、そして自らの将来を正に見据えんとされた、その青年期へと続いて行く。この青年期には、自らを鞭打たれること余りに厳しく、懊悩と煩悶の荒野をさ迷われたこともあると聞く。ベートーベンの幻の声を聴かれたのもこの頃のことである。

第二の時代は、ヨーロッパ留学と新潟医大での謂わば研究の時代である。ただひたすら研究に打ちこまれたこの時代が、基礎医学者としての先生を創りあげ、その成果はあの錐体外路系の研究として内外に輝いたのである。

第三の時代、京都大学の教養部長、医学部長そして衆望を荷って、京大総長に就任された先生は、その寛い心と何人からも敬愛される類いまれな、誠実な人柄によって、教育者としても大きな業績をあげられたのである。

総長退任の後は、広く一般社会に大きな影響を与えられた、第四の時代に入って行かれた。正にこの時代こそが、ロータリーに於ける先生のお姿と重なるのである。

一九六四年に京都東ロータリークラブの会長、次いで一九六七年にR.I.第三六五地区ガバナーにつかれた先生は、生来の勉強熱心さを発揮され、徹底したロータリーの研究によって、ロータリーの本質に迫ろうと努力されたのである。この研究と、古今東西に亘る先生の深い教養とが、見事に調和して、われわれロータリアンに対する語りかけとなって現われたのである。

あの巨人をしてその晩年、機会あるごとに熱っぽく語らしめたロータリーとは、そも何ぞや。いま静かに改めて考えて見たいものである。

奥村 忠 識

編集後記

故平澤興先生追悼記念誌の編集に与らせて頂くことになり、光栄の感と共に畏怖の念も禁じえぬ我々でありましたが、ともかく懸命に微力を盡しました。本誌を手にとられた方々には、幾多の御不満もあろうかとは存じますが、どうか御寛恕の程お願い申し上げます

編集委員

満田久輝　村田侑三　奥村 忠
木下 収　奥西 保(委員長)

平澤興先生追悼記念誌
発行日　平成2年(1990年) 6月17日
発行所　京都東ロータリークラブ
〒605 京都市東山区祇園町北側275 ABL 4F
TEL 075-561-2020
印刷所　河北印刷株式会社

再版あとがき

平澤興先生を信奉なさる方は多い。

新井正明　住友生命保険相互会社名誉会長・関西師友協会会長や医療法人　敬成会　白根緑ヶ丘病院理事長・国際ロータリー第2560地区パストガバナーの佐野孝博士、とりわけこの「平澤興先生追悼記念誌」の編集委員長をなさった奥西保会員は、ご自身の職業分類・教育図書出版である株式会社新学社・代表取締役会長として1985年に入会され、先生の秘書兼介護役的姿勢を終始貫かれたように拝見していた私である。

詩人であり文士でもあった佐藤春夫を新学社の初代総裁に仰ぎ、逝かれたあと先生は総裁を引き受けられた。奥西さんとの仲は19歳の年齢差はあっても京二中の同窓生であり、あの有名な中山校長のご薫陶よろしきをえてその交わりも我々が想像する以上のものがあったろう。

僅か百字余りの奥西編集委員長による編集後記だが、そこには先生へ寄せる心情がひしひしと伝わってくる。

この種の〝あとがき〟というものは、余程のことがないかぎり、その字面からしてみても再版には不要なものであると考えもした。

だが、しかしである。今回この任に当り久方振りにこの記念誌を繙いてみて、編集委員として四半世紀前に名を連ね、今となっては唯一の会員として、そしてまた、60周年の記念誌部会の一員として、この記念誌は先生が第九代のクラブ会長をなさった時の幹事・奥村忠会員による跋文とガバナー月信担当だった親父の七光でその資料とともに関わった不肖私以外、その全てが奥西編集委員長の独壇場であったことを明言し、おそまきながら生意気にも奥西保会員の顕彰をこの機会にさせていただく。

なお、今回の再版にあたり、遺稿集を尊重し、内容・体裁とも、可能な限り初版のままとさせていただいた。

（木下記）

平澤興先生追悼記念誌

平成２年（1990年）６月17日　初版発行
平成27年（2015年）12月11日　再版発行

発行所　京都東ロータリークラブ
〒604-8005 京都市中京区姉小路通河原町東入ル ABSビル３F
TEL 075-256-1991
印刷所　河北印刷株式会社